
オタクと美少女達

たまちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オタクと美少女達

【Nコード】

N5969T

【作者名】

たまちゃん

【あらすじ】

オタクとして生きる湊、しかしある性格のせいで美少女達に好きになられ・・・

ハーレムを乗り越え湊はオタクを貫けるのか！？それとも美少女達に屈しオタクを止めるのか！？

新しいヒロインが出る度に章をつけます

始業式（前書き）

更新遅めです

始業式

ある日の帰り、俺は同じ学校の生徒と思われる美少女を助けてしまった

その日から全てが狂いだした・・・

「おはよう湊！今日から2年だな」

「おはよう、明日のミラクルハッピー妹達の楽園買いに行くのか？」

「当たり前だろ、あれは妹が色々ご奉仕してくれるゲームだぞ！」

「お前本当にロリコンだな・・・」

自己紹介？それは後でわかる事、だが一つ言っておく・・・俺の名は湊みなしだ

見てわかるように俺達はオタクだ

しかも俺はリアル女子に興味などないくらい廃人だ

そんな俺でも困ってる女の子を見るとほおっておけない

それは母親のせいだ・・・

俺は母親に「女の子が困っていたら必ず助けなさい」といつも言われていた

寝てる時にも言われ続けていたから助けずにいられない体にされてしまった

「何やってんだ・・・もう始業式終わったぞ、クラス分け楽しみだな」

え？いつのまに始業式始まったのかって？そんなの当然母親に寝てる最中って所でもう始業式始まってたんだ・・・まあ寝てたけどな

「クラス何て何処でもいい」

「そう言っつて後で後悔するなよ」

俺は常に後悔してるようなものだぞ、何を今更・・・

何か悲しくなってくるな

「お！お前と一緒にクラスだ」

「・・・まじかよ」
「本当だぞ、見てみるよ」
「本当にありやがった・・・」
「また1年間よろしくな」
「おう・・・」
「あの・・・」
二人同時にその声の方向に向く、その瞬間俺は逃げたくなった
「この前はありがとうございます、そしてこれから1年間よろしく
お願いします」
やべ・・・そう思った時には遅かった
「み〜な〜と〜く〜ん」
「坂井落ち着け！」
「この裏切り者〜」
走って行ってしまった
「私何か悪い事しましたか？」
「いや、気にするな」
どんな言い訳あいつに言うかな
俺はその場を離れ坂井を探しに行く
「いたいた、探したぞ」
「なあ、俺思っんだ」
「どうした急に？」
「お前がリアル女子に興味が出てきたように俺も変わるのになって
変わるのが当たり前だろ？」
「そうだよ・・・お前は2次元を卒業したんだ、俺もお前の前で
は2次元の話題は避けるよ」
「お前本当に馬鹿だろ？」
「お前に馬鹿って言われるとまじで傷つく」
「そうかい、っで俺はオタクを止める気はないぞ？」
「本当か？」
「本当ですか・・・」

さっきの女子だ、残念ながら名前を知らない

「本当だ、俺はオタクだ」

「そう、ですか」

衝撃発言

教室に戻ると自己紹介をさせられた

名前、趣味、一言言って終わりだ

「俺は坂井流石だ！趣味はゲーム（妹系のみ）！よろしくな」

「俺は太刀原湊趣味はギャルゲー、一言は・・・話しかけないでくれ」

「次は月島さんの番か」 「どんな事言っただろうね」 「きつと何言ってもかわいいんだろうな」

こんな話し声がひそひそ聞こえる

「おい、坂井！あの人気はなんだ」

「知らないのか？あれは校内美少女ランキング上位の月島さんだぞ」

「それだけか？」

「それだけだ」

席につき寝る

誰が人気か知らないけど俺には関係ないしな

「で、では自己紹介を続けたいので席に着いてください」

先生の一言で皆が席に着く

「では、どうぞ」

「はい、私の名前は月島鈴鈴です、趣味は読書です。一言は・・・」

「」

「聞こえなかったのもう少し声を上げて貰えませんか？」

「・・・」

「あの～もうちょっと・・・」

その言葉で吹っ切れてしまったらしい

「湊君！好きです！付き合ってください！」

クラスが蒼然とする、大声を上げた事もそうだが、よりによって太

刀原に告白するなんて誰も想像しなかったからだ（まあ当たり前だが）

「やばい」

皆が殺気を持った目でこちらを見ている

女子からは断ったら殺す、男子からは付き合ったら殺すって理不尽な要求をされている

「どう逃げよう・・・」

少し考えて皆言った

「今答えるのは無理だ」

そう言った

帰りに月島から話があると言われ人気の無いところに連れて行かれた

「もう答え決まってるんですよね」

最初からわかっていたらしい

「そうだ・・・俺は付き合うことは出来ない、俺はオタクだからな」

「オタクだから付き合ってもらえないんですか？」

「そういう事になるな」

「・・・わかりました」

そう言っていると月島は家に帰った

俺はこれで自由になれると思っていた

「よう、太刀原！おはよう」

「坂井か・・・おはよう」

「月島への答えは考えたんだろうな？」

「あれか？あれはもう終わった」

「終わった？どういう意味だ？」

「後でわかる」

ぎりぎりでクラスに入る

H Rは俺の月島への返答になった

何故かって？先生がこの話題が大好きらしい

だが答えは出ているから月島が話してくれるのを待つ

「あの」

「どうしました？月島さん」

「私昨日つられました」

その後の言葉が予想と違った

衝撃発言（後書き）

駄目です・・・

1000文字しか書けないと内容薄くなりまくりです

つられてますけど月島さんは諦めていませんよ？

むしろこれからラブコメ展開大爆発です！

落ち着いてきちゃったら次の美少女フラグ立てます！立てまくります！

つて事で見捨てないで！

月島の宣言

俺はこれで話が終わると思ってた

しかし・・・

「フられた時にこう言われました、オタクだから付き合えないと」
「そうそう確かにそう言った」

「私が一晩考えて決めました、ここに宣言します！湊君を普通の人間にして付き合います！」

うんうんって、え・・・！？

「ちよつと待て！何を勝手に」

「オタクだから付き合えないんでしょ！じゃあオタクじゃなくなったら付き合えるって事ですから私頑張ります」

「いや、頑張るって・・・」

「見てて下さい！3年になるまでには更正させて見せます！」

「坂井助けてくれ」

「やっぱりお前の前では2次元の話題は避けるよ」

「坂井~~~~！！！」

それから授業が終わる度にこっちに来て解放してくれなかった

「と、トイレ行ってくるよ」

「30秒ね」

「へ？」

「30秒で戻って来なかつたらお願い一つ聞いてください」

「無理だろ・・・っで？そのお願いの内容は？」

「秘密」

そんなかわいい感じに言われても・・・

「30秒もお願いも無理だ」

「じゃあ逃げないように私もついていきます」

「何言ってるの！？30秒から急すぎるだろ！」

「私にとっては30秒も会えないんです、当然です」

「じゃあ去年どうしてたんだよ……」

「写真片手に授業とかお風呂とか……」

俺よりこっち更正した方がいいんじゃないのこれ？

「そんな事よりトイレ大丈夫なんですか？」

大丈夫も何も最初から逃げる為に行く予定だったのに行けなくなっ
たし……

「取り合えず30秒を何とかしてくれ、後来るのも駄目だ」

「そんな……酷いです」

涙目でこちらを見る……ってツハ！

やばい、この感覚は困っている女子を見た時の感覚だ……

こんな時、俺はその時のもっとも適切な方法を勝手にやってしまう
今回はわからん

一緒に行っていいって言うかも知れないし、他の事するかも知れな
い……

取り合えずここを離れないと危険だ
だが動いた瞬間ドアに女子が立った

「行かせないわよ」

「どいてくれ」

「湊諦めろ」

「坂井助けてくれ」

「俺にそんな事は無理だ」

その時背中に誰かが抱きついてきた

「ほら無理だろ？」

「坂井……」

てか、やばい！そろそろ堪えられない……

「行っちゃ嫌です」

何かから解放されるような感覚……まさか！？

「おゝ裏湊登場か」

そう、皆が2重人格だと思っっているそれは俺が母親に無理矢理させ
られた性格の一部……だけど俺自身コントロール出来る訳じゃな

61

月島の宣言（後書き）

2日でPVが10000を超えるなんて・・・
喜んで立った瞬間頭をぶつけましたが・・・orz
湊にどんな行動させるか楽しみですw
てかPS3でせめて10000文字くらい書けるようにしてくれな
いかな・・・
って事で今回はここまで！次回も見てくれたら嬉しいですノシ

裏湊

どうしてこうなった・・・

ここは俺の部屋だ、なのに何故お前がいる

「こ、ここが湊さんの部屋・・・」

そう言つて赤くなる月島

取りあえずこいつに何があつたか聞かないと

「おゝ裏湊登場か」

「うら・・・みなと？」

「月島は知らなかったな、湊は2重人格なんだ、時々なるんだがその時は凄い女子に優しくなるんだ、そのギャップで湊の事を好きになつた女子は少ない」

「そうなんですか・・・でも今苦しそうですよ」

「あれは2重人格と戦つてるんだよ、多分・・・すぐ雰囲気変わるよ」

言つたそばから苦しまなくなり雰囲気が変わつた

「裏湊！今日は誰を好きにさせるんだ」

「そんな事お前に関係ない」

「やっぱ裏湊は男に敵しいわ」

そう言つて笑う坂井さん、なんだか悲しそう

「さてと月島姫、参りましょうか」

「ふえ？え・・・！」

いきなりお姫様だつこをされる

「さて、取り合えず俺の部屋にでも行こうか」

「湊！それは危ない発言だぞ！」

「何が危ないんだ？別に何かするわけじゃないのに」

「だから」

「うるさい黙れ」

裏湊が月島を連れて教室から出ていくのを皆は黙って見ている
俺の部屋につくまでにこの性格の特徴を言っておこう
まず困っている事を解決すればこの性格（裏人格と言っておこう）
から解放される

その為に一番適切な方法を勝手に取ってしまったって事だ
今回月島を泣かせたのは俺が離れたから、なら近づくのが一番適切
な方法である

俺からすると地獄なんだが・・・
裏人格のは体をコントロール出来ないんだよ・・・
しかも記憶も無いし

「さて、ついたよ」

「ふえ？は、はい」

いつの間にか寮についていた

俺は自宅は近くにあるが一人暮らしがしたいのとテストで50位以
上だと寮が無料になるという事もあって俺はここに住んでいる

「さあ入っていいぞ」

玄関で降りしてからまったく動かない

「え〜つと・・・お邪魔します！」

そう言つてゆっくり部屋に入る

適当な所に座らせ俺は行動につつま

1時間くらいたっただろうか

話が弾み月島がどんどん元気になる

それに従い俺の体は少しずつ自由になっていった

話の後月島は俺の部屋を色々見て回り俺はゆっくりしている

そして俺が体を取り戻す一言が・・・

「これから毎日私が湊さんのお世話をします」

「はあ〜何で!?!」

完全に体を取り戻して最初の言葉がこれだ・・・

裏湊（後書き）

もう少し書きたかった〜!!!

せめてお世話する理由くらい書きたかった・・・

取り合えずこの投稿が終わったら「（名前）部!？」の執筆に移ります

11時頃に投稿するので見て下さい「（・・）」

こっちより面白いかは人それぞれ!てか最近妹中心に書いてる気がするし・・・

って事でそろそろ止めないと危ない気がするのでここまでにします
次もよかったら見て下さい!

お世話の条件

「だってキッチンを使ってる様子がありません！だから私が湊さんの……」

何故そこで顔が赤くなる！？

「取り合えず世話はいらん」

「何ですか！？絶対お世話します！お風呂とかも……」

「最後何て言った？小さくてよく聞き取れなかったんだが」

「何も言ってますせん」

また顔が赤く……

やっぱり俺よりこつちを更正した方がいいんじゃないのか？

「とにかく私はお世話します」

「駄目だ！絶対にやらせない」

この口論は2時間くらい続き

「わかった、俺の負けだ、だが条件は出させて貰うからな」

最終的に涙目になられまた裏人格になる事を恐れた俺は負けを認める

裏人格になってしまったら無条件でOK出す事になる、ならこつちから動くしかない

「条件って何ですか？」

「まず部屋に来ていい時間帯を制限、後土日も駄目だ、後はお世話する内容の制限だな」

「それは多すぎです……」

「つく、なら時間帯の制限かお世話の制限のどちらかだ、どっちがいい」

どっちも制限だと涙目になる、まさか俺の弱点が涙と気づいたか？

「なら時間帯の制限を無くして下さい」

「わかった、じゃあ次はお世話の制限の内容だが……」

「お背中流すのは有りですよ？」

「もちろんなしだ」

「そんな〜」

「当たり前だ！」

さて質問だ、ここで有りという人は何人いるかな？

一度集計してみたいな・・・

なんて考えてももられない

「嫌です！それだけは絶対にやらせて貰います！」

「お前はその行為がどれほど危険か知らないのか！」

ギヤルゲーだとフラグばつきばきに立つだろうが！

というか最近お風呂でばったりが多くなつて来た気がする・・・ラ

ノベとかアニメとか見るとよくわかるな

「その危険が二人をより高い位置に持つていつてくれると思います

！」

顔を真っ赤にして叫んだ月島、結構危ない事言ってると思うのは俺

だけか？

「それに・・・」

もう後戻りは出来ないと思つてしまったのか月島は続ける

「吊り橋効果もあつていいと思います！」

吊り橋効果つて・・・確かドキドキつて感情が恋に結びつくつてい

うあれだよな？

「そんなので好きになるほど俺は甘くないぞ」

「そんな事はないはずです！今からやつてみましょう」

「いい、めんどろっだ」

「いつかやつてやる・・・」

「何か言つたか？」

「いいえ、何も言つてませんよ」

何だろっ笑顔が凄い怖い・・・

「そうか、というかそろそろ帰つた方がいいんじゃないか？」

「今日は泊まります」

お世話の条件（後書き）

また途中で終わった・・・

ちよつとPSS3でも100000文字くらい書けるよつたとして貰おう
かな・・・まあ無理だと思っけど

取り合えず明日は（名前）部！？更新します！

って事で後書き終わります。また見て下さいノシ

湊の危機？

「泊まるって・・・え・・・」

「時間は自由なんですよね？なら泊まるのも問題ないと思います」
「しまったー！そんな落とし穴があったとは・・・」

でもお世話を自由にした場合どうするつもりだったんだ？

「今からお世話の自由に変えたら何するんだ？」

「もちろん一緒におふ・・・」

口に手をあてて止める

ふふふ、さっきの事忘れるなんて俺も馬鹿だな・・・

「親とか心配するんじゃないか？」

これが最後の砦だ！これを突破されたら俺は終わる

「今日親帰って来ませんから大丈夫です」

終わった・・・

「負けた・・・好きにしる」

「じゃあ一緒におふ・・・」

「前言撤回・・・せめておとなしくしてくれ」

「そんな・・・」

本気がわかりしてるらしい

「じゃあ一緒にお風呂が駄目なら一緒にね・・・」

どんだけ危険な事しか頭にないんだお前！

これ・・・もしかして貞操の危機？

いやいや、いくら月島でもそれは無いだろ

「今日の夜、私は・・・」

ごめん・・・間違ってたみたいだ・・・

俺は携帯を取り出す

「坂井、今日泊まらせてくれ」

「駄目～～～！！！！」

携帯を奪われ切られた、携帯を取り戻そうと手を伸ばすが

「駄目です！ここで寝て貰います！」
逃げ道を封じられたか・・・辛いな
「もしどうしてもこの家で寝たくないならいいですけど」
もしかしてチャンス！？
「そのかわり私と付き合っただけ貰います」
悪魔の囁きだったらしい、チャンスだと思ったのに・・・
取り合えず俺が助かる方法考えないと
部屋のドアは鍵がないから簡単に入られる
となると自然とあそこに寝る事になるな
「わかった、ここで寝る・・・だが寝る場所は決めさせて貰う」
「何処ですか？場所次第では駄目ですよ？」
「やられた・・・」
「もういい、俺は自分の布団に寝る」
そのまま部屋に向かう
「お風呂入らなくていいんですか？」
「明日はいる！」
今日入ったら何されるかわからん
「体臭のする湊さん・・・」
「またもや前言撤回・・・」
「やっぱり風呂に入る」
「そう言い風呂場に向かうが」
「何故ついてくる」
「何故って一緒に入る為です」
「その話はさつきもしただろう・・・駄目だ」
「えー！一回だけ、一回でいいですから」
美少女の月島にここまでお願いされたら聞きたく・・・なるわけ無い、俺はオタクだからね
「どうしても駄目っていうなら私にも考えがあります」
「やべ〜マジで今日危ないかも・・・」

湊の危機？（後書き）

昨日投稿しようと思ったのに寝ちゃって遅れた・・・

さて、言い訳も終わりにして・・・

来週木曜日発売の龍が如くOF THE ENDを買います！

いや〜ゾンビ系のゲームと龍が如く好きな俺にはもってこいだねw
ちなみに龍が如くとゾンビ系の好き比率は2：8です

圧倒的にゾンビ系好きだね俺w

・・・描くことなくなっちゃった

って事で後書き終了〜

また見て下さいね〜ノシ

月島の両親

「っでその考えって何だ？」

「教えません」

そう言つて部屋に戻る月島

風呂に入った俺はまず鍵を閉めた

良かった、これで安心だ

数分後・・・

ガチャガチャ

「あれ？」

外で月島の声が出た

「ここは開かないぞ、鍵かけたからな」

脱衣所で月島が悔しそうな声をあげている

「こ、ここを開けてくれないと私の両親に紹介します!!!」

不味いつてあれ？これってチャンスなんじゃないか？

親にあつて俺はオタクですつて言えば普通反対してくれるだろう

「いいぞ」

「へ？」

「だから親に紹介してもいいぞって」

「ほ、本当ですか!？」

凄じ嬉しそうな声が聞こえる

俺の計画を知らずに・・・哀れな奴だな

その日俺はぐっすり眠る事が出来た

俺の寝る邪魔しないと誓ってくれたからだ

「なあ湊、月島さんが妙に嬉しそうなんだが何か知らないか？」

まだ嬉しそうにしてたのか・・・

「何も知らない」

知ってるなんて言つたら問い詰められる、最悪昨日月島が泊まった

なんて知られたら俺は終わりだ、オタクとして・・・

「そうか、何か心当たりがあったら教えてくれよ」

言うわけないけどな

「了解、思い出したらな」

最初から覚えてたら問題ないよな

それから学校が終わるまで月島は嬉しそうな顔以外しなかった

俺が連れてこられた家は至って普通の一軒家

「お邪魔します」

「おお、君が湊君か、入ってくれ」

リビングに案内される、両親が居る前で俺は計画に移る

「こんにちは、太刀原湊です、オタクですがよろしくお願いします」
決まった~~~~!!!!

案の定月島の父親は震えている

「う・・・う・・・」

「う?」

「嬉しいぞ〜!湊君!いや〜実は私も昔オタクだったんだよ」

マジか・・・

「そして母さんに強引に更正させられてね〜」

嘘だ~~~~!!!!

「君の行動はわかった、私達にオタクと言えば解放されると思ったんだろ〜、いや〜私と同じ事考えるなんて」

「え・・・」

「その時は逃げただけで捕まってしまったね」

まさか俺も逃げれば同じ運命になるぞと言っているのか・・・

「その時なんやかんやで母さんと付き合うことになったんだ」

なんやかんやって何だ~~~~!!!!

何があつたかすごい気になる事いうな!

そして逃げるって選択肢が使いづらくなった

取り合えず無理矢理泊まることになり、俺は部屋へと案内された

「逃げるなんて考えない事だよ」

最後にそう言われリビングに戻っていった

「考えるさ」

俺は窓をみる

月島の両親（後書き）

毎回毎回変な所で終わるな・・・

さて、ちよつとフラグ立ててみるか・・・

次の話で湊は逃げます

まあよくよく考えるとネタバレじゃね？って思えますが・・・

まあ気にしない！！！！

明日から面談週間で投稿8時くらいに出来るかも！

頑張れば2、3話投稿出来ます！（まあしないけど）

理由は早く投稿しすぎると後々めんどろになるからで・・・

てかどうでもいいことばっか書いてるよな・・・

って事でここらへんで終わります

また見て下さいノシ

月島父からの提案

窓は普通の窓で開けたらすぐ近くに木がある事が確認出来た

「これなら逃げられそうだな」

その時ドアがノックされた

「ご飯だつて！早く行こ」

月島．．．ここでは鈴と呼んでおこつ、混乱する

「わかつた、行くから引つ張るな」

鈴に連れられて俺は月島夫婦のいるリビングまで向かう

「来たか、湊君一つ言っておくことがある」

「はあ、何でしょう」

まさか娘頼むなんて言い出すんじゃないだろうな

「一つゲームをしないか？」

「ゲーム？」

「そうだ、晚ご飯が終わつて30分後スタート、君が私達に捕まらず自分の家にたどり着くことが出来たら勝ちのゲームだ、無論スタート地点はさっきの部屋からだが」

「メリットとデメリットは？」

「君が勝てば娘に諦めさせる」

「今日は（勝てばと娘の間に）」

この時俺は月島母の言葉に気づかなかつた

「負けた場合鈴と付き合つて貰う、ゲームをするかね？」

「勝つたら諦めて貰えるんですね！やります！」

「（簡単に騙せる男．．．）」

「では私は準備があるからちよつと失礼するよ」

そう言つて月島父が出ていく

食事が終わり俺は部屋に戻つた

「窓からなら．．．．ん？」

窓の前に手紙らしき紙が置いてあった

「これが本当なら．．．．」

俺はゲームが始まるのを待った

その頃鈴は．．．

「ゲームにお父さんが勝ったら私と湊さんがつ、付き合う事に．．．
キヤー」

布団で悶えていた

「ダメダメ、こんな所湊さんに見られたりしたら私．．．．キ
ヤー」

また布団で悶える

「本当に駄目、私は湊さんを普通の人に戻すんだから！．．．．
で、でもちよつとくらい期待しても．．．．」

そう言つて悶えそうになるが何とかこらえる

「もう寝よう．．．．じゃないと私、自分を抑えられないよ．．
．．．．」

電気を消して布団に入った

ゲームが始まった

「後10分だな」

紙に書かれていた時間を確認した

「でもこれ本当なのか？こんな事して月島父に何の得が．．．．
？」

色々考えたが結局わからず、俺は指定された場所へと向かった

月島父がいる

「本当に逃がしてくれるんですか？」

「逃がしてあげるよ、だけど一つ条件がある」

「条件？」

「……である事を言って欲しいんだ」

「……その言葉は？」

「俺は鈴の事が好きだ！」

今その言葉を言っても、もう関わらないんだから大丈夫か……

…?

「……いいでしょ」

「じゃあどうぞー」

月島父からの提案（後書き）

はい、やっと投稿出来ました

そして龍が如くOF THE END入手！

これが終わったら早速やります！

・・・後書き終わります

今後も見えて貰えたら嬉しいです！それではノシ

月島両親の作戦

「お、俺は鈴の事が好きだ．．．．．」

「よし、じゃあ家に帰っていいよ」

「．．．．．わかりました」

俺は家に向かった

「はあはあ．．．．．家に着いたな」

俺は後々捕まるのでは？と考え走って帰ってきた

後ろを見ても誰かがいる気配はしない

「（これでやっと、安心して生活出来るな）」

家に入ると布団にすぐ入った

月島父視点．．．

「ふう〜母さん、録音ちゃんとしたぞ」

「これで湊君はもう逃げられないわね」

「何の話してるの？」

鈴が部屋から降りてきた、どうやら寝られなかったらしい

「湊君が君の事好きだって話をしてたんだよ」

「でもここに湊さんいないよ．．．．．負けたの？」

「ああ負けたよ、でも今日だけ関わらない約束だからね」

「あれ？いつしたの？私が聞いてた時はずっと関わらないって言っ

てたのに？」

「（お前もか．．．．．）」

「ああ鈴がいないに時に約束したんだ」

「あ、そうだ！あなた、あれ聞いてもらったら！」

「そ、そうだな（ナイスだ母さん！）」

そういつて録音機を取り出す

「ちゃんと聞きなさい」

「う、うん」

『お、俺は鈴の事が好きだ．．．．．』

その瞬間バン！と鈴が部屋に戻っていった

「母さんの作戦通り」

「本当に成功しちゃうなんてね」

鈴視点．．．

『お、俺は鈴の事が好きだ』

バン！扉を思い切り開けて自分の部屋に行く

「（駄目駄目、冷静にならなくちゃ）」

そう思つてはいるがなかなか冷静になれない

違う事を考えてもすぐあの言葉が頭に響く

『俺は鈴の事が好きだ』

「（もう壊れちゃうかも．．．．．）」

そういつて布団の中で悶える

数十分後．．．．．

「（もう、駄目．．．．．）」

色々あつて動き回つた鈴の身体は眠気に勝てず、眠ってしまった

湊視点．．．

「ふあゝまだ眠い」

まだ寝足りない身体を無理矢理起こし昨日の出来事を思い出す

「（も、もう自由なんだよな）」

そう思つと何だかやる気が出てきた、今なら何でも出来る！そう感じた

「（さて、今日は絶好調だ！頑張るぞ〜！！！！）」

そう思う湊だが現実をあまくなかつた

「（どうしてこうなつた．．．．．）」

ここは学校の屋上、時間は7時30分だ

やる気がでてしょうがないから早めに学校に来た、そしたらこれだ．

目の前には月島鈴
もう一度言おう、俺は早めに学校に来たただ、そしたらこいつに

月島両親の作戦（後書き）

『』と（）を使ってみました

読みやすくなったでしょうか？それとも読みづらくなってしまったのでしょうか？

少しは読みやすくなるかなって思って加えました（読みづらくなったらごめんなさい）

よし、話を変えて、2人目のヒロイン考え中です！

さらに妹も出すか考え中です（出すならだすで自分なりに面白いと思える展開は考えてます）が妹を出さない方が後々いいんじゃないかな？何て考えもあり纏まりません（妹出さないでとか、その他意見があればメッセージでも何でもいいので下さい）

これで後書き終わります、また見て下さいノシ

学校で

「え〜と、何の用でしょうか？」

月島両親 約束が違うぞ
そんな事を考えながら返事を待つ

「み、湊さん！」

「は、ハイ！」

いきなり大声出すな！
返事しちやったじゃないか

「わ、私の事好きって本当ですか？」

「な、何の事だ？」

無駄だと思うが一応とぼけてみる

「昨日お父さんが」

昨日あつた事を聞いたが
月島父！よくもやりやがったな！？
くらいの感想しかわかなかつた

「それで 私、いいですよ」

「はい？」

何がいいの!?

「私、湊さんなら」

「ストップ!

それ以上は言わせない!」

「何ですか!?

両思いなのにな?」

駄目だ、ここは逃げるか.....

月島父への復讐も考えなきゃいけないし

「湊さん!?

何処に行くんですか!」

俺は追ってくる月島を振りきるとトイレにこもり、今後の対策をねる
やばいな、これ以上俺に関わらせる訳にはいかない.....

「湊さん?」

トイレの外で月島の声がする

「湊さん?」

あいつトイレに入ってきたやつだ!?

しかも一つ一つ個室を確認してるし.....

やっぱりあいつを何て考えてる余裕も無くなった

「ここも違う」

怖いですって．．．．．
昼間なのにホラーゲームやってるみたいな雰囲気か凄いするんだよ
ホラーゲームの主人公ごんだけ怖い体験してるんだよ！
マジで同情するわ

「ここも違うか」

後はここだけ、湊さん居てね」

どうしよどうしよ．．．．．
このまま見つかったらやばいし（ホラーゲームならゲームオーバー
だね）
かといって逃げ道なんて無いし．．．．．最後の頼みはここか
その瞬間

「あれ？ここにもいないの」

ガツカリした声でトイレから出ていく音がする
ホラーならここで上見るとのぞき込まれてるよな．．．．．

恐る恐る上を見るが誰もいない
そのおかげで心に少し余裕が出来た

「た、助かった」

俺はショートホームルームSHRが始まるまでトイレからでれなかった

SHRが終わりすぐトイレに向かおうと教室の扉を目指すが

「何処に行くつもりですか？」

「いや、それは……………その」

「話したい事があるので席に戻ってくださいよね？」

「……………はい、わかりました」

俺って無力だな

女子の笑みと笑っていない目を見た瞬間何も出来なくなる

学校で（後書き）

1行ずつあけてみました

色々考えた結果「（）」はやめます

それと批判等の感想待ってます（その方が改善点わかりますし）

次回は3日〜1週間以内に投稿します

また見てもらえると嬉しいですノシ

学校で 2

「何で逃げたんですか？」

「言わないと駄目ですか？」

「質問に質問で返すなんて」

「言わせていただきます」

誰か助けて！

そろそろ俺この空気辛いよ

「月島さんが何言っても聞いてくれなさそうなので逃げました」

「両思いなのにな？」

無言になる

ここで反論したいけどお父さんなんて言えば確実にやばいかと行ってここで逃げてても状況がさらに悪くなる
もうどうしたらいいかわからないよ

「わかりました」

何がわかったの！？

俺に関わらなくなるなら嬉しいんだけど

「今日から湊さんの部屋に住みます」

俺の人生終わった
もうこれ以上ないってくらい終わった

「え〜っと

駄目って言ったら？」

「婚約届けを書いて貰います」

「まだ結婚出来る年齢……………」

「そして18歳になったら出します」

「そうだよね、うん」

どうやって逃げればいい？

誰かマジで教えて欲しい

「大変だな〜」

坂井が笑いながらこつちを見ている

こつなったらこいつも一緒に地獄に落とそう

「坂井、すまん」

「何だ？」

「お前の姉に電話するよ」

「すみませんでした！……！」

もの凄い早さで土下座される

こうされると凄く困るのだが、まあいいか

坂井の姉の事を話そう

こいつ、もとい坂井には姉がいる

結構な美人なのだが弟のこいつにしか興味がないらしく毎日迫られてたとか

だが俺と同じ寮になってから姉が来なくなり坂井は嬉しがっていた

「というか何故俺の姉ちゃんの電話番号を？」

そう、弟のこいつにしか興味の無い姉が何故俺に電話番号を教えたかそれは簡単な理由

「お前の事で聞きたい事があつたら俺に来るから」

「だから俺の行動知ってたのか！」

そう大声を上げてから動かなくなった

月島も呆然としている、今なら逃げれる

つと思つた所でチャイムがなり授業が始まった

「ここまで来れば平気だろ」

俺は今寮の前にいる

走って来たせいで息が苦しい

逃げた理由は簡単だ

「今日一緒に帰りますから！」

「何でだよ！」

お前は月島両親が心配してるぞ」

「大丈夫です！」

ちゃんと連絡して了承得ました！

お母さんから頑張れって言われましたし」

「頑張れって何を!？」

「そんなの決まって」

「今だ」

「あっ！」

俺は走って逃げて来た

「さて部屋でのんびり」

絶句した

なぜなら俺の家の前に月島がいるからだ

「やっと帰ってきましたね」

学校で 2 (後書き)

サブタイトルって難しいねw

そして後書き書きながら「神聖魔導王エンディミオン」のデッキ構

築中w

でも使えるカード少なくて弱いw (来月構築済みデッキ2個買いま
すがw)

これ入れたら強くなるとかアドバイス歓迎!

では以上!また見て貰えたら嬉しいです

家で

「な、何でここに」

「近道してくればすぐここに着きますから」

いや、俺はここに住む前に色々調べたけど近道なんて何処にも無かったぞ

俺が見落とした？それとも普通の道じゃない所通ってるのか？
でも待てよ、ここで道を教えて貰えればギリギリまで寝てられるじゃないか！

「あの〜、月島さん」

「何ですか？」

「その近道を教えて貰えると」

「キス」

「っは？」

「だからキスですよ！」

「あの魚の鱧？」

「無理矢理していいですか？」

「ごめんなさい」

ラノベで使ってたから使いたくなっただよ
ひよっとしたら誤魔化せるかもしれないし……

「そんな事より早く家の鍵開けてください」

「どうしても？」

「どうしても」

駄目だ、こいつに何言っても無理だ

坂井悪い！俺は諦めるからお前も一緒に地獄見ないと駄目だよな

「携帯取り出してどうするつもりですか？」

変な事すればすぐ携帯取れるって位置にもつ月島は来ていた

携帯〓俺が何かすると思われているのだろうか

「坂井の姉に電話するんだ

ちよっと坂井の家に行くように促すだけだから」

「坂井さんの態度からしてよっほど嫌なんでしょうが
それって少し酷くないですか？」

わかってますとも月島さん

俺は悪魔の（自分で言うのもなんだが）微笑みをつかべながら電話
をかける

ちよっとするとすぐ出てくれた

『もしもし』

何かご用なのかな？』

「ちよつと坂井の事で」

『何々！』

何かあつたの！？』

「ちよつと苦しいって言って早退したんですよ」

『大変！』

今すぐ行かなきゃ！』

そう言つと電話が切れた

これで計画通り、あいつも俺と同じ苦しみを味わう事になるだろう

「湊さん、ちよつと怖い」

月島がちよつと怯えている

その瞬間俺は閃いた、このまま怖がつて貰えればいいんじゃない？
すぐ実行に移そうとしたが

「でも吊り橋効果でもつと好きになれそうです」

やっぱり無理でした

こいつに諦めるという言葉はあるのだろうか疑問だ
そう考えながら鍵を取り出した

「やった！」

月島に取られ、家の鍵を開けられる
しまったと思つた時には遅かつた
家に入った瞬間部屋を色々見て回っている

「何してるんだ？」

「決まってますよ！」

自分の部屋を決めてるんじゃないですか」

「ちよつと待つて〜！」

何でもするからここに住まないで〜」

後で絶対後悔する言葉を俺は口にしてしまった

家で（後書き）

相変わらずサブタイトル酷いです

そして祝16000PVです！

凄い嬉しいです！久しぶりにアクセス解析見たら驚きました！

そして問題のヒロイン2人目、もう大部分決まっていますが出す機会をそろそろ入れたい

って事で今頑張って考えてます！

さて、後書きも（果たしてこれで後書きが成立してるのかは疑問ですが）これくらいにして、最後の1言

また見て貰えると嬉しいです！

坂井の家へ

「本当ですか？

本当に何でもしてくれるんですか？」

やばい、そんなに目を輝かせながら言われると怖い
でも月島もR18指定されそうな事まではしないだろう
俺はそう信じてる！

「なら今日は私と一緒に寝て……………」

すぐに俺は月島の口を塞ぐ

2割くらい信じてたのに裏切られた

そんな事を考えてるうちに月島は俺の手を払いのけ

「もしかしてあたしの唇が目当てですか？」

何て聞いてきた

断固否定したいがここで否定したらどうなるんだろうか
怒る？ それとも別か？

「否定したら怒る？」

「怒りませんよ」

「よかった！

実は……………」

「そのかわりキスします」

どっちにしても俺キスされるんじゃないのこれ？
ファーストキスは女子にしかない決めてるんだ！
まあ2次元女子だけだな、それとバカ スミたいなやりとりになる
とは思わなかった

「わかった」

「本当にキスしてくれるんですか！」

「そのわかったじゃない！」

俺が今何をすべきかわかったって事だよ」

「何をするんですか？」

「逃げる！」

そう言った瞬間に走る、目的地は坂井の部屋だ
数分もしないうちに坂井の家に着く
チャイムを押して数秒後、坂井姉が出てきた

「あれ？」

「どうしたの？」

「ちょっと匿って欲しくて来ました
坂井はどうですか？」

「それじゃあ私かさー君かわからないよ」

「そうでしたね

いつも坂井って呼んでるのでつい」

さー君は誰と言わずとも流石の事だ
さっすが〜と褒めるときわかりづらくなるからこつ言つよつにな
ったとか

まあ俺は褒めないから関係ないけど

「うんうん

じゃあ入って入って」

お言葉に甘えて家の中に入る

入った瞬間俺は思った

やっぱり似てる人って集まりやすいんだと

「流石」

俺は言葉を失った

何故なら流石がワイシャツとパンツだけの格好で布団に縛られてい
たからだ

「今からお楽しみの時間に入るから邪魔しちゃめっ！だよ」

「湊助けてくれ！

俺達友達だよな？」

映画みたいな言葉を言っているが涙目だ
助けてやりたいが俺にはそんな勇氣はない

「お前は本当にいい奴だった」

「み、湊？」

その言葉の後はきつと助けしてくれるんだよね？ な？」

俺は部屋の扉をゆっくり閉める

流石の悲鳴が最後に聞こえた

「終わったよ」

リビングに座りながら何処に行こうか考えていると坂井姉が俺の所に来た

何が終わったのか聞きたいが怖い

坂井の家へ（後書き）

遅くなりました

しかも1、2時間程度で書いたのでおもしろいかどうかわかりませんが
もしかすると話が早いかもしれません。が次は余裕を持って書きたい
と思います

そして後書き最中に震度4の地震……………

まあ気にしないw

つて事で後書きを終わります。また見て貰えたら嬉しいです

坂井の家で

「そ、そうなんですか
流石の様子はどうですか？」

正常であると信じたい
まあこうなった元凶は俺なのだが

「元気になったよ」
さすがに私も疲れちゃった」

「な、何をしたんですか？」

「む、何でそんな怯えながら聞くの？」

あなたは危険だから！

なんて言えるはずもなく、というか言ったら命が危ない

「さっき怖い目にあつたので」

「そうなんだ」

「っで、何したんですか？」

「本当に聞きたい？」

そう言われると決意が鈍るから止めて〜！……！
ただどこは聞くしかない！

「聞きたいです」

「大人の秘密」

俺帰ろうかな

ここに居たら見てはいけないものを見そう

「今エッチい事考えたでしょ」

「へ、そんな事は全くこれっぽちも」

「考えてた？」

「はい」

駄目だ、この人の前では嘘がつけな
ついたらどうなるか知ってるしね

「私も流石の友達がいるのにそこまでしないよ
ただ私にしか興味が向かないように少し変えただけ」

俺がいなかったら流石の貞操が危なかったと

それに興味が向かないようにって……

もしもこれをあいつが聞いてたらきつと

「私にもやりかた教えてください！」

そうそう、そう言うに決まって……

あれ、この声に聞き覚えあるな

「じゃあ鈴ちゃん、こっち来て」

そうそう月島鈴だ！　って何でこいつがここに
この家は知らないはずなのに

「な、何で月島がここに」

「ごめんね

私に教えちゃった　てへ」

てへって言われても

ま、待てよ！　今なら家に帰って鍵とチェーン閉めれば
俺は助かるじゃないか！

「何処行くんですか？」

「ちょっと家に忘れ物を」

「そんな事させて上げないよ
さー君　湊君を捕まえて」

いつの間にか後ろにいた流石は俺を羽交い締めにする
そのせいで逃げられない

「さ、流石！

う、裏切り者！！！！」

「お前が言っな〜！！！！」

「っく、流石さんさっきはすみませんでした

だから離して下さい」

「すまんな
体が言うことを聞いてくれないんだ」

「これもあなたがやっただんですか？」

「そうだよ〜
凄いでしょ」

「懂れます！
私も出来るようになりますか？」

「簡単よ〜
まず耳元でこう言うの」

「その言葉を耳元でいっぱい言うんですねー！」

「あの、それって洗脳じゃ……………」

「違っよ〜
最後に薬使っし」

「何の薬!?!」

坂井の家で（後書き）

1週間以内に投稿しようと思ったのに遅れた理由は前に投稿した作品が完結して無く設定が思い出せなくなっていたので最初から作りなおしていたからです
夏休みが終わるまでに投稿出来ればいいな

まあその話は後にして

もうそろそろ2人目のイベント起こしたいです

それに夏休みなど色々イベントありますしね

.....3年になるまでにはヒロイン全員出したいですね

これで後書き終了！また見てもらえたら嬉しいです！

何とか寮へ

「大丈夫だよ

危ない薬じゃないし」

「いや、絶対非合法でしょ．．．．．」

やばい、本気で逃げないと相当危なそうだ

だけど流石が離してくれないと逃げる事も出来ない

「そんな．．．．．」

決めつけるなんてひどいよ」

待てよ、ここは本気で泣かせれば流石は姉の方に行くはず

そしたら逃げられるじゃないか！

「本当の事行ってるんですよ

あなたならそのくらいやりかねません」

その時俺は逃げる事優先で忘れていた

この人を相手にする事がどれほど危険であるかという事と
相手を泣かせる自分への危険性に

「本当にそんな事いいんだ」

「え、ええ．．．．．」

「じゃあ本気で泣いちゃえ！

裏湊君出しちゃえ！」

え、ま、まさか、何で裏湊の事を
俺はこの人に教えた記憶はないぞ
.....

「どうしてその事を」

「さっきさー君から聞いてちゃった」

「湊、そんな目で見ないでくれ
俺の意志じゃなかったんだ」

「でも泣くのとて難しいな
鈴ちゃんはずぐ泣ける？」

「私にも無理です」

「じゃあしょうがないな
裏湊君だすのは諦めよっか」

「どうやら諦めてくれたみたいだ
しかし俺が裏になって意味があったのだろうか？」

「裏なら簡単に薬飲ませられるのにな」

「諦めてくれて本当に助かった
というかどんな効果あるんだ？」

「飲ませないで下さい
それと流石には試したんですか？」

「な、何て事言うんだ!」

「忘れてた!

さー君おいで」

流石の羽交い締めが解ける

この瞬間に行動に出る

「すまん!!!」

解かれた瞬間流石の後ろに回り姉達の方に押す
姉はすぐに反応して鈴の手を掴み横に避けた
結果流石が転ぶ形になったがそれでもいい

「何処行くんですか!」

そう叫ぶ鈴を背に俺は玄関に向かう

幸いすぐに靴も履け鍵もかかっていなかった為
すぐに家の外に出れた

そして数分、体力が元々あまり無いのに坂井家での騒ぎ
そして焦っている事による呼吸の乱れなどなど
家に着くまでに凄い疲れる要素満載だった

「はあはあ.....」

やっとなついた」

自分の寮の前にいる

だがまだ安心は出来ない
何故なら俺が精一杯走って知りうる限りの最短ルートで
来たにもかかわらず月島がいた事実があるからだ
俺はおそろおそろ家の前を見るが

「良かった！」

今回は俺の勝ちだな」

鍵は開いていた

薄暗い中、俺は部屋に入る

何とか寮へ（後書き）

何故だろう。

坂井姉と鈴を一緒に出すと鈴が空気になる気がするの

それから2人目を出すイベントをやっと見つけました
次話かその次に出ます！

住まない為の条件

「家の中に鈴はいないな」

万が一を考え隅々まで探すがいなかった
— 安心出来たと思ったら玄関の扉が開き

「やっぱりここにいましたね」

し、しまった！

家の中に鈴がいる事を考えて玄関の鍵閉めていなかった！

「どうしてそんなに落ち込んでるんですか？」

「俺はバカなんだ……………」

ほっといてくれないか」

「いいですけどその前に」

何かが書かれた紙を渡される

無気力ながら受け取って内容を見る

『誓約書』

私、太刀原湊は、1週間の間、月島鈴以外の異性との必要以上の会話をせず、登下校、お弁当、夕食、お風呂を一緒にする事をここに誓います。

「何だこれ」

「家に住むことをあれほど嫌がってたので……私も鬼じゃありません。」

そこに書かれた内容を守ればここには住みません」

「何だろう」

色々終わってる事が書かれてる気がするんですけど」

「異性との会話とお風呂以外なら1つだけ無くしていいですよ」

「俺はお風呂を絶対に無くしたいんですが」

「会話とお風呂以外なら無くしてもいいですよ」

駄目だ、お風呂は嫌だが住まわせるのも嫌だ

鈴の事だ、住むことになれば確実に入浴中に入って来たりしそうだ
1週間我慢すれば住まないでくれる、ここは我慢して

「ペンと判子を取ってくれないか」

あ、場所わかるわけないよな

そう思い動こうとした瞬間

「はい」

「……何故場所を知ってる？」

「言わないと……駄目？」

涙目にも目遣いで言われた
多分最初の頃の俺なら

『さつさと見え』

とでも言えたらうけど

何故か心が揺れ動く……………

毒されすぎたか？ そろそろエロゲやらないと危険だな

「言わなくていい」

そういつて受け取る

誓約書を書き終わると何もする気になれない

「明日と明後日学校に行けば土日か」

「そうですね

じゃあ今日から1週間よろしくお願いします」

出来ればご遠慮願いたい

だが俺の生活を取り戻す為だ

「あ、そういえ……………」

俺の言葉は1本の電話によって消された

携帯を取って確認すると母からだ

何のようだ？

「はい、もしもし」

「は、初めまして

あ、お久しぶりの方があってますよね」

誰？

俺の知らない声が

しかも久しぶりとか言ってきた

「え〜と……………」

どちら様で？」

「やっぱり覚えてませんよね」

がっかりしたような声でそう言われる

住まない為の条件（後書き）

やっと2人目を出す事が出来ました！（まだ電話だけですけどw）
というか日にちたつのが遅すぎるw
次回から改善しないとテストにたどり着くまでに恐ろしいほどの投稿しないといけなくなる．．．．．

まあこっちの事情はさておき

久しぶりにアクセス解析見る PV：26992 ユニーク：63

39

風呂で頭を冷やし再度確認 変化無し

まあそんな事は置いといて

これで後書き終わります！ また見て貰えたら嬉しいです

電話でのやりとり

「近くに母さんいる？」

「いますけど」

「かわってくれないか？」

わかりました。そう言って会話が終わる
1分くらい待つと母が出てきた

「あれは一体誰だ？」

お久しぶりって言ってたけど記憶にないぞ

「そ〜よね〜」

あんな事故があつたものね

記憶に障害持っても仕方ないわよね

「ちょっと待て！」

事故に遭った事態初耳なんだが

「当たり前じゃない

今思いついたんだから」

「おい！」

おっと、話がそれた

俺が知りたいのはこんな事じゃない

「それより誰なのか言ってくれよ」

「許嫁」

「へ〜許嫁か〜って待て

俺に許嫁がいた覚えなんてないぞ」

「あの事故の」

「それはいいから」

「つれないな〜」

「早く言え〜!!!」

「そんなに怒らない

幼なじみの………名前何だっけ？」

「忘れんなよ!」

電話の向こうで何やらやりとりしてるらしい

俺はいつの間にかいない鈴の姿を目で探している
探して数秒すると

「このえちゃんよこのえちゃん」

「上は?」

「ちょっと待ちなさい」

「またかよ！」

「たく上の名前も聞いとけよ」

「わかったわ」

「太刀原このえちゃんよ」

「は？」

「何だつて？」

「太刀原とか言わなかったか？」

「太刀原つて……」

「もう入籍してるんだし当たり前じゃない」

「ふざけんな！」

「俺は記憶にないぞ！」

「もうそんな大声上げない、耳がキーンってするじゃない」

「そんな事はいいい」

「このえちゃん湊が私をいじめるの」

「ええいあのバカ母め」

「今から家に戻り込んでやる」

「ちょっと整理したいから切るよ」

「頭の整理がいたらちゃんと連絡しなさい」

そうして俺は電話を切る

よし、今から乗り込みに行こう

立ち上がるうたとすると

「湊さん」

「何だ鈴か」

凄い笑顔で紙と録音機を持っている

紙は誓約書だろう．．．．．あれ？

何か忘れていたような気がするな？

「これで私は住む事が出来ます」

これってピンチじゃないか？

母さんなんかにかまっている余裕なんてないかも知れない

「ちよつと誓約書と録音機貸してくれないかな？」

「駄目です。」

それではまた後で」

また後でって．．．．．？

も、もしかしてあれをあの親共によ！？

それは非常に不味い

「ちよつと待て！

話があるんだけど！大事な話が！」

「今日の夜楽しみにしてます」

もう夜だけだな

なんてツツコム暇もなかった

電話でのやりとり（後書き）

2日続けての投稿です。

気力が続く限りこれから毎日投稿する予定です（どうせ俺の事だ、

1週間もたたずに終わるだろう）

鈴が録音機持つて親の所に行ったり、湊が実家に突撃したりと大変
そうです。

次話は鈴視点で書きます。

これで後書き終わります。また見てもらえたら嬉しいです

親の助けと告白！？

視点 鈴

私は今自分の家の前にいる

早くこの誓約書と録音した声を聞かせたい

「ただいま！」

「おお〜鈴

家に住めるようになってもなつたか？」

さすがお父さん

「うん

これ見て〜」

そう言つて誓約書を渡す

「証拠は？」

「はい」

「録音機か……………どれ」

『え〜と……………』

どちら様で？』

『近くに母さんいる？』

『かわつてくれないか？』

「これでは証拠不足だ」

「そんな〜……………」

「大丈夫！

こんな時の為にこんな物を用意してみた。
母さん」

「これでしょ、はい」

渡されるビデオカメラ

「これで湊君が他の女の子と
話してる所を撮影してくるんだ
そうすれば大丈夫だぞ」

「ありがとうお父さん」

「母さんも応援してあげるから
頑張つて行ってらっしゃい」

「うん

頑張るね」

そう言って家を出る
湊さんの実家の場所は確認済み
真っ直ぐに向かおうとしたその時

「あ、あの！
月島先輩！」

そう呼ばれた
先輩って事は下級生の子かな？

「どうしたの？」

「あ、あの．．．．．」

「本当にどうしたの？
言いたい事があるの？」

そう言っつと意を決したという顔になり

「つ、月島先輩！」

「は、はい」

「す、好きです！
付き合ってください！」

「え〜と．．．．．
ごめんなさい」

「そうですよね
好きな人がいるんですか？」

「いるよ」

「太刀原先輩ですか？」

あんな人より俺の方が先輩を」

「湊さんをあんな人呼ばわりされるのは嫌だな」

「でも」

俺の方が太刀原先輩より優れています！

俺の方がふさわしいはずだ！」

「優れているからって好きになる訳じゃないでしょ？
それに湊さんはあなたに負けないよ」

「オタクで成績も悪く、運動も得意じゃない
そんな奴に負けるものか！」

「そう思うなら挑んでみたら？
あなたじゃ湊さんには勝てない」

「いいでしょう
ならやってあげますよ
では俺はこれで帰ります」

ああ言っちゃったけど本当に大丈夫かな？
でも私の為に頑張る湊さん最高！
何て思ってる場合じゃないよ

早くビデオカメラで湊さんを撮らないとって違う！
証拠を撮らないと

その頃

太刀原湊

俺はあんたに勝って月島先輩をものにする！

だけど太刀原先輩の成績は悪い

勉強しなくても勝ったな

親の助けと告白！？（後書き）

変なフラグ立てちゃいましたw

「鈴視点だけだと長くかけないな〜どうしょ？」

しばらくして太鼓の達人やってる時「湊にライバルっていいんじゃない!?」と思い立ってすぐ行動

そして気づく、鈴の性格がわからなくなってきた……と

まあそんな事より次話は鈴が湊の家を出てからの湊視点で書きます
では後書き終了！また見てもらえたら嬉しいです

実家で

取りあえず俺は母さんの所に乗り込むか．．．．．
そいえば俺の実家の場所って鈴知ってるのか？
まあ知らなかったら嬉しいんだが

さて、家に着いたはいいが
家の中に俺の知らない子がいるのは確実なんだよな？
出来れば関わりたくないんだけどな
まあしょうがない

「ただいま」

「おかえりなさい」

出迎えてくれたのは電話の声と同じの人
大人しそうなイメージ
だが何故玄関にいる？
ここに来る事を知っていた？

「か、母さんいる？」

「こっちにいます」

そう指さすのはリビング

俺は一直線にそこに向かった

「母さん言い訳ある？」

「あるからそんな怖い顔しないの」

「じゃあ早く言おうよ」

「婚約は嘘だから

本当はいとこよ、だから落ち着きなさい」

「落ち着いていられるか！

母さんのせいであいつが住む事になりそうなんだぞ！」

「あいつって誰の事？」

不味い！

親に鈴の事言っていないのに口が滑った！

「私も聞ききたいです

女性の方ですか？」

何でお前まで食いついてくる？

関係ないだろ？

それよりどうにかして話を逸らさないと

「え〜と……………」

さ、流石だよ！」

「嘘ついてるわね」

「即答!？」

いくら何でも酷いだろ
言った瞬間嘘って!

まあ嘘だけどさ．．．．．

「当たり前じゃない
これでもあんたの母親だよ」

そうでしたね
でもその息子で遊ぶのは止めて欲しい

「では誰なのですか？」

話が逸れたと思ったのに
誰か来てくれ〜!

その時家に誰かがやってきてくれた

「た、助かった〜」

「っで、あいつって誰なの？」

母さん、あんたもか!
言うのも面倒だし無視するか．．．．．

「湊さん見つけた!」

この声は鈴!？」

何故俺の実家を知っている?

「早く寮に帰りましょう！」

そして私と一緒に風呂………」

「わかったから少しだまっててくれないか？」

「湊、あんた………」

「何で深刻そうな顔でこっち見てる!？」

それとこのえさん、何で泣いたふりしてるの!？」

「いつの間にか大きくなって………」

「何で感動したって感じに言ってるの!？」

「冗談よ」

「……もう疲れたから寝る」

「お風呂入ったの？」

「起きたら入る」

「ちゃんと鈴ちゃん起こすのよ」

「わかったよ」

別に起こさなくてもいいよな
面倒だしゆっくりしたいし………」

流石に相談

朝起きると鈴が隣で寝ていた

鈴を起こさないように布団から出て風呂に入る

「さっさと支度しないと」

風呂から上がるとこれから着る服の上に紙が1枚

「なにになに？」

何で私を起こしてくれなかったんですか？

約束を破ったからには後でおしおきます。

おしおきが増えないようにほかの約束は破らないで下さいね」

無言で着替え部屋に戻る

鈴に謝ろうと思ったからだ

「鈴、つていない？」

部屋に行くと誰もいなかった

そして俺が来たのを確認したかのように携帯がなった

「もしもし」

「湊さん、早く寮に戻って制服着て下さい

朝食作ってますから」

も、戻りたくね〜！

取りあえず何とかしないと

．．．．．坂井に相談してみるか

「もしもし、流石か？」

「何だいきなり

俺は今バカ ス2期の4話見て現実逃避してるんだが」

「実は鈴の奴が．．．．．」

「わかった、実は俺も今ピンチなんだ

そこで提案だ。

お前と俺で勝負を仕掛けようと思うんだ」

「勝負？」

「そつだ。

そこで負けた者が勝った者の言うことを聞くってルールにする

そしてお前か俺のどちらかが勝って今の状況を無かった事にすれば」

「俺達は助かるわけか

お前にしてはいい作戦だが

何の勝負にするんだ？」

「トランプにしようと思う

勉強で勝てるわけ無いし、運動でも勝てるかわからない

だったら運要素の強いトランプがいいって事だ」

「わかった。

でもトランプの何で戦うんだ？

大富豪ならわかるが」

「ダウトで勝負する」

「ダウト？」

「詳しく説明してやる」

ダウトとはカードを裏返しに出していき、手札が無くなったら勝利するゲームである。

ルールは簡単

プレイヤーに均等にカードを配り、プレイ順を決めた後、プレイヤーは A , 2 , 3 , 4 , . . . , 10 , J , Q , K の順で、自分の番に対応したカードを裏向きで場に出す。手札をなくしたプレイヤーの勝ちとなる。

尚、カードを出す際に、自分の番に対応したカードをあえて出す必要はなく、これが名称の由来である。他のプレイヤーは、出したカードが対応していないと思ったら「ダウト」コールをかける。かけられた場合は出したカードを表向きにし、対応したカードだった場合はコールしたプレイヤーが、そうでない場合はカードを出したプレイヤーが、場に出ているカードを全て引き取る。パスは一切無しである。

「ルールはわかったろ？」

後は作戦だ！」

流石に相談（後書き）

ダウトの説明はウィキペディアから転載
他にもチートとか面白いルールもあります

これで後書き終了！また見てもらえたら嬉しいです

寮に帰ってから

「ちょっと待ってくれ

俺は着替えたりしたいから学校で話さないか？」

「わかった」

電話を切る

そして動画配信サイトでバカ ス2期の4話見てみる

「負けてしかも脱衣……………」

危険な賭けかも知れない

鈴がどんな事言ってくるかわからない

それにしてもこの主人公悲惨だな……………」

女装、撮影、アップロードされてネットアイドルなんて

まあ鈴の事だからこんな事はしないだろう

……………フラグじゃないぞ？

「早く着替えないと遅刻ですよ！」

「まだ7時半だぞ！」

それに一人で着替えるから向こう行ってくれ」

「後1時間しか時間がないんですよ！」

「1時間もあれば十分だろ！」

俺は今寮にいる

そして朝食を無理矢理というか

口移しで食べさせられるのを防ぎ

食べ終わって部屋で着替えようとしたらこうだ

「1時間の貴重さがわかってません！」

もしかしたらこの1時間で私達が結ばれるかも知れないのに」

「結ばれないよ！」

それだけは絶対ないよ！」

「そんな事より、抵抗せずに脱いで下さい」

「お前が出ていけば脱ぐよ」

「………わかりました」

そう言って部屋を出ていく

「やっと着替えられる」

さっさと着替えて学校行くか

作戦も決めなきゃいけないしな

「鈴、着替え終わったぞ」

「早くしなさいよ」

「学校に遅れるでしょ」

「先に行けばいいのに」

「あんただけだと心配だから私も一緒にいってあげるんだから少しは感謝しなさいよ」

「何故いきなりキャラが変わった？」

「ここは一つ遊んでみるか」

「鈴、大事な話があるって言ったよな」

「ふえ？ な、何よ」

「俺実はお前の事……………」

「み、湊さんやっとなの事を！」

「何でキャラ変えた？」

「……………別に変わってないわよ」

「またやったよ」

「ここはこうだな」

「どうしたんだよ？」

いつもの鈴らしくないぞ？
熱でもあるんじゃないか？」

手を額に当てる
これで元に戻るな

「だ、大丈夫です
早く学校行きましょう湊さん」

顔を赤くしてかわいい奴め
これで好感度．．．．．
しまった〜！

何故俺は好感度を下げる行為をしなかったんだ．．．．．

「どうしました？
何だか凄いガツカリしてますけど？」

「自分の馬鹿さに呆れてるだけだよ
それより早くいこう」

学校に着くと校門前に人が居た

「太刀原先輩！」

誰だ？

それに何の用だ？

寮に帰ってから（後書き）

やばい、サブタイトルがどんどん変に．．．．．
どうしたもんかな〜それにあれだ、バカ ス出しちゃったw

バカテス2期は4話が一番好きです。それと今日はバカテス放送しますね（正確には後1時間10分くらい）

鉄人をどうやって突破するか楽しみです。それと暇だったのでちょっと後書きの終わりを変えてみる．．．．．
これで後書きおわりだよ〜またみてね〜

流石の現実逃避？

「あなたに勝負を挑みます！」

月島先輩から話は聞いてると思います。逃げないで下さい。」

「おい、勝手に決める……。」

「では、俺はこれで」

言うだけ言って行きやがった

勝負？ 俺と？

月島から話？ 何のだ？

「あれ誰？」

「俺が知るか

お前から話して事はお前の知り合いじゃないのか？」

「私下級生に知ってる人いないよ？」

「じゃああれは何だ？」

「向こうは鈴と話した事あるような言い方だったし

でも鈴は知らないし

単なる馬鹿か？」

「お、おはよ

みなと、つきしまさん」

「そんなに弱ってどうした流石？」

まるで死ぬ寸前の喋り方だぞ」

「おれ、いちどしんでぞんびになるわ
そして、めいかいのねくろまんさーとかといっしょに……」

「それ以上喋るな

これはゾビですか？ の主人公になれるわけないだろ」

こいつは危ないな

坂井姉に来てもらうか？

嫌、それで現実逃避したんだから駄目か
なら保健室で寝かせとくか、それが一番安全だな

「ほら、きちんと歩け

保健室に連れてってやるぞ」

「ほけんしつ、じよし、えろ、やほー」

現実逃避もここまで来るとやばいな
本当に坂井姉呼ぶか？

「それよりはやくぞんびに」

「ここはその世界じゃない
目を覚まして現実見る」

「こ、ここはふづきがくえんですか？」

「ここがそうだったら試験召 獣使ってお前を補習室送りにしてる
わ」

「ああ、おあしすがみえる」

「もう無視」

延々と喋る流石を引つ張つて保健室に送る
保険の先生が精神病院に連れて行きますか？
って言ったときは本当に同情したよ
断つといたけどな

授業が全て終わり放課後

俺は鈴に事情を話し、先に帰ってもらう

「先生？」

流石はどうですか？

あれ、いないのか？」

「流石、迎えに……………」

カーテンを開けるとそこには寝てる流石
そしてその上にまたがっている保険の先生

「……………」

「ま、待ちなさい太刀原君！」

凄い勢いでこちらに近づいて肩を掴まれた

この人と一緒にいるのは危ない、そう思った

「ご、誤解ですよ太刀原君」

「はい？」

「私は決して襲おうとしてたのではなく、坂井君が元に戻るために頑張ってただけよ！」

「じゃああなたがってたのは何故ですか？」

「あ、あれは．．．．．そう！
目を見なきゃいけないからよ」

絶対嘘だ．．．．．
そう思ったとき扉が開いた

流石の現実逃避？（後書き）

何故だろう？

夏休みなのに暇すぎる

はあ〜キヨンが羨ましいよ……………

事件に巻き込まれるのはごめんだが、SOS団の団員（普通人、問題事に巻き込まれない）のポジションで入りたいね〜

だが現実には厳しい、こんな夢見てるくらいなら勉強した方がいいのはわかってるさ

だけど俺はこの生活が好きなんだ。そうそう変えられん

キヨンの喋り方で書いてみました！（わかってもらえるかな？）

それより本題です！

ダウトの説明あったのに次の話でダウトに行きません

書いてる途中で下級生との勝負が先になっちゃいました

予定としては下級生との勝負を早めに終わらしてダウトに入りたいです

ではこれで後書き終わります！

べ、別に次の話は見なくてもいいわよ！

で、でも、見てくれたら……………その……………嬉しいな
ツンデレ？からの一言でした〜

下級生との勝負1

「姉さんに太刀原先輩……………」
「何やってるんですか？」

「しよ、翔太！
これは違うのよ……………」

「姉さんはちよつと黙って

太刀原先輩、俺はあんたを許さない
月島先輩を裏切るような真似して、俺の姉さんに手を出すなんて」

おい、手は出してないぞ
しかも被害者なのに加害者にされてるし
さっさと流石を連れて帰ろう

「あの〜先生、そろそろ離して貰えますか？」

戸惑ってたけど離してくれた
そしてベットに近づき流石を起こす

「よう湊

俺はゾンビになれたかい？」

「一発殴っていいか？」

「すみません」

流石は寝たおかげでだいぶ元に戻っていた

運ばなくて楽になるからうれしい
そして姉弟を無視して保健室を出る

次の日

俺が保健の先生に手をだしたと噂が広がっていた
当然鈴の耳にも入るわけで

「湊さん、噂って本当ですか？」

どうする？

はい 鈴は離れていくが変態とうレットルが貼られる
いいえ 鈴が離れていかないかわりに普通に生活出来る
鈴がいる時点で普通の生活じゃないような気もするが・・・
ここは自分の為にいいえを選択しとくか

「嘘だ」

「なら良かったです」

ほっとした様子で席に戻っていく
その時

「太刀原先輩！」

廊下の方から声がする
無視していいだろうか？

「放課後残つて下さい！
月島先輩をかけて勝負です！」

また一方的に言っていていきやがった．．．．．
たく、鈴が欲しいなら勝手にすればいいのに
どうして俺が巻き込まれる？
何て考えていると先生が来た

「まさか本当に残っているとは思いませんでした」

「鈴が帰してくれなかったんだ」

「．．．．．まあいいでしょう
いざ勝負！」

「何で？」

「．．．．．」

何も考えて無かったのかよ
こいつ大丈夫か？

「ちよつと待った」

「流石？」

「その勝負の方法はこっちで決めといた」

「絶対企んでただろう？」

「．．．．．勝負はテストでやってもらう」

スルーしやがった!?

まあいい、テストなら俺が勝つ確率なんて無いに等しいからな
自由な生活が約束されたものだ

「それと湊」

そう言ってこちらに近づいてくる流石

何をされるかと思っただら耳元でこっ言われた

「今からだす問題」

1問でも答えられなかったら即結婚だっつて」

「何!？」

「そのかわり絶対わかる問題にしてくれるんだとさ」

絶対に間違えられなくなった

下級生との勝負1（後書き）

本格的なテスト勝負は次話ですネ

それにしても焦りました

終わってると思ってたこの話の執筆が

まさか半分も終わっていなかったなんてw

11時30分に気づいてなかったら今日の投稿はやめてる所でした

（^o^;）

ねえお兄ちゃん？

明日も見てくれるよね？

私待ってるから.....

妹系からのお願いでした

妹系になりきれてるかは不安ですけど

下級生との勝負2

それから数分の暇な時間があると言われた

俺は今から何をしてても無意味だと思いつつ適当に過ごしているが

下級生は違った、黙々と勉強している

流石が言うには優等生だそうだ

「はい、テストくばりますよ
座ってください」

そんな感じに入ってきたのは鈴

何故先生口調？

そんな事はさておきテストが配られる

? 5 + 7 =

? 5 + = 9

ふざけてるだろ？

いくらなんでも高校生だぞ？

まあこのテストだったら俺は勝てないだろう

.....このまま簡単な問題だったら負けるとも思わないけど

ふう、一通り終わりだな、次は裏だ

「な、何だこれ.....」

「そこ」!

私語は慎みなさい」

「……………すみません」

一応謝ったがこの問題は明らかに酷いと思う
きつとこの問題作ったのは流石だな

大きい問題5 『涼宮ハルヒ』について答えなさい

? 涼宮ハルヒの好きな人は誰かを答えなさい

? 涼宮ハルヒの無自覚に発動する力を答えなさい

これならまだいい方

涼宮ハルヒは世間で知られているからな

一番の問題は最後だった……………

最終問題

太刀原湊さんが持っているゲームを1つ答えなさい

個人の問題だしたら絶対だめだろ!

この問題をあの優等生が答えられるとは思わないよ!?

俺らの好きな世界とは無縁そうだし

と、取りあえず答えるか……………

テストが終わった

鈴が回収して採点の為とどっかに行った

鈴が戻ってきたら文句言おうか？

いや、優等生が文句言うだろ

『こんな問題答えられるわけない』って感じで……

数分後に鈴が戻ってきた

「では点数を発表します」

「天道君が56点

湊さんが100点です」

ほら、優等生早く言え！

おかしいうて

「ちょっと待って下さい」

視線を優等生に向ける

「一つだけ言わせて下さい」

来るぞ、来るぞ！

「今回は負けましたが次は負けません！

用は覚えてるって事です」

そう言っ教室を出ていく優等生

「またやらなくちゃいけないのかよ……………」

がっかりしながら帰り支度を始める

そいえば本当に最近エロゲやってないな……………

明日は休みだし流石も誘ってやるか

と思っていたら丁度よく昇降口で流石と会った

「よお、流石

今日ネットゲー一緒にやらないか？」

「いいぞ

俺も久しぶりにやりたい」

「後作戦も話すぞ！」

下級生との勝負2（後書き）

さて、そろそろ話のネタが無くなってきましたw
どうしたものか.....

じゃあ適当に話すか

「ニコニコメモリアル」やってみたい！

「灼眼のシャナ」3期が早くやってほしい！

「バイオハザードオペレーションラクーンシティー」を早くやりた
い！

はい、願望でしたw

という事で話が変な方向に進まない内に後書き終了！

.....さて、次は何のキャラになってみよう？

ヤンデレ？まあ明日までに考えておくか

また見て貰えたら嬉しいにゃん

ネットゲでの会話(前書き)

わかると思いますが一応

ロリコン 流石

h a i z i n n 湊です。

それにしても眠い.....

0時まで起きられそうにないです

だから早めに投稿しました！

眠って投稿出来なかった！何て事にはしたくないです

ネットゲでの会話

ゲーム画面

ここまでたどり着くのに凄い疲れた

鈴に妨害（風呂、夕食等）され、アップデートには失敗し……

正直止めようかと思った

しかし流石との作戦会議があるから止めることが許されなかった

チャット画面

ロリコン：ようやく来たか、待たせるなよ

h a i z i n n n：色々あったんだ、許せ

ロリコン：わかったたよ、それより作戦だ

h a i z i n n n：作戦って言っても良い手札かどうかの運だろ？

ロリコン：まあそうだな……

h a i z i n n n：作戦あるか？

ロリコン：ないかもな

h a i z i n n :

ロリコン：(、・・・、)

h a i z i n n : 久しぶりのゲームだし楽しむかw

ロリコン：そ、そうだよなw

h a i z i n n : でも少し待っていてくれ

ロリコン：どうした？

h a i z i n n : 鈴の奴が・・・

ロリコン：頑張れ

さて、どうする？

今ドアを前で夜食を持ってきたので開けて下さいと言っている鈴・・・・・

開けたくないな

でも開けないと後が怖いし

なら道は1つ！

「何でもっと早く開けてくれなかったんですか？

両手が塞がってて大変だったのに」

「すみません」

「もういいです

そのかわり私が作った夜食食べて下さい！」

そう言って渡されるラーメン
それを受け取りテーブルの上におく

「食べ終わったら持ってきて下さい」

それだけ言つと部屋を出ていった

「……………食べるか」

その前に

h a i z i n n n : 今からラーメン食べる

ロリコン : まさか月島が作ったのか! ?

h a i z i n n n : そうだよ……

ロリコン : 俺はお前達が夫婦にしか見えないよ

h a i z i n n n : 何! ? おかしいだろ! ! !

ロリコン : だって一緒に暮らして夜食まで作ってもらってるんだし
絶対に夫婦だろ w w w

h a i z i n n n : 仕方ないだろ、誓約書にサインしちゃったんだから

ロリコン : 俺なら言い訳言つけどな w

h a i z i n n n : ……じゃあお前の姉に同じ事言つてやるよ

ロリコン：それだけは止めてくれ、俺の人生が終わる

h a i z i n n n : お前諦めたらどうだ？

ロリコン：絶対に嫌だ

h a i z i n n n : だろうなw

ロリコン：そいえばラーメン食べてるのか？

h a i z i n n n : 食べてる

ロリコン：食べながらチャットかよw

h a i z i n n n : そう思うなら3分くらいほっといてくれ

ロリコン：俺もつ落ちるから心配無い

ネットゲでの会話（後書き）

はてさて湊達はとうなるんですかね
作戦無しに少し頭使うダウト勝てるんでしょうかねw

最近の悩み

暑くて執筆する気がでない

ネタがどんどんつまらなくなっていくてる気がする

猫を部屋にいれると時折壁の方を30秒近く見てるから怖いw（霊的に）

それと3人目どうしよう.....??

え？2人目が全然出てこないって？

それはダウトが終わったらヒロインにするからです。

これで後書き終了！

僕なんかの小説見てくれてありがとう

また見てほしいな？

今回は僕っ娘でした！

似てるかな？

ネットゲでの会話2

h a i z i n n n : どうしたんだ？

ロリコン：姉さんが帰ってきたんだ・・・

h a i z i n n n : お前達が普通の姉弟に見えない

ロリコン：ありがとう

h a i z i n n n : ふえ？誰？

ロリコン：誰って酷いな〜さ〜君の姉だよ

h a i z i n n n : ・・・俺もそろそろ落ちるよ

ロリコン：姉さんから奪い返せた。落ちるのはいいが気をつける

h a i z i n n n : 何だ急に？あ、ちょっと待っててくれ

ロリコン：月島から水もらったら飲むなよってまさか・・・

「どっした鈴？」

片手にコップを持っている
水かな？

「ラーメン食べ終わりましたか？
それと水です」

「ありがとう」

丁度喉が渴いてたから一気に飲み干す

鈴に渡すと俺は食器を片づける為鈴についていく

鈴がやっておくと言うのでお言葉に甘え

お休みとだけ言うと部屋に戻ってチャットに戻る

h a i z i n n n : 飲むなよってどうした？

ロリコン：どうしたも何も・・・もう飲んだか？

h a i z i n n n : 飲んだよ

ロリコン：そうか・・・じゃあもう遅いな・・・

h a i z i n n n : 何が遅いんだよ!？

ロリコン：すぐわかるさ・・・

h a i z i n n n : 凄い怖いんだけど・・・眠れねえよ

ロリコン：大丈夫すぐ眠くなる

h a i z i n n n : 何を言っているのかわからないがそろそろ落ちるわ

ロリコン：頑張れ・・・俺も頑張るから

h a i z i n n n : わからないけどお前も頑張れ？

ロリコン：じゃあ乙！

h a i z i n n n : 乙 . . .

流石の言っている事がよくわからないままパソコンの電源を切る

「確かに眠くなってきたな」

あいつは予知能力者か！？

まあそんな事はいい、今は寝よう

誰かに何かされている

しかし起きたいが体が言うことを聞いてくれない

それでも何とか目だけは開けられた

鈴？

ただどあいつが何で？

駄目だ、思いつかない

俺は鈴をじつと見つめ何をするか見ている

すると鈴が隣に来て寝始める

それで安心したのか眠気に負けた

「はっ！」

ここは俺の部屋

そして隣に鈴はいない

「嫌な夢だったな．．．．．」

そして起き上がり制服に着替える
部屋を出ると鈴が朝食を作っている
顔を洗い鈴の所に向かう

「あっ！」

起きたんですね」

「おはよう

今日もかわいいな」

制服にエプロンをつけている鈴
毎日見ているがかわいいと思う

朝食を食べ終えて家をでる
しかしその前にする事が一つ

ネットゲでの会話2（後書き）

疲れました……………

まあそれはさておき今日はゲストに来ていただきました

「月島鈴です。よろしくお願いします」

さて、月島さんは太刀原湊さんをオタクから更正させたいんですよね？

「はいそうです！毎日どうやったら私に興味を持ってくれるか頑張つて考えてます」

そ、それはいい事ですね（湊君からしてみれば最悪でしょうが）

「ありがとうございます。今から坂井君のお姉さんにまた色々教えて貰いたいのでこれで失礼します」

ありがとうございます（行くの早いな）湊君って実は幸せ者でだよな、羨ましくな）

「あ、言い忘れてました」

どうしました？（いつのまに來たんだよ）

「湊さんを更正させる面白い方法大募集しています。後ヒロイン2人目でたつて私は負けませんから！」

い、以上月島鈴さんからでした（家に帰ったらギャルゲーやる）

すみません！

後書きに何書くか思いつかずこんな感じになってしまいました！

大募集は嘘ですごめんなさい。だけど息詰まったら教えて欲しいです

では最後に月島鈴さんからの一言で後書きを終わります

「私と湊さんの愛を描いたこの作品の次話も見てください！湊さんを愛しながら待ってます」

鈴が勝手に言っている事です

夢と休日（前書き）

なれない事はするものじゃありませんね
まさかあんなに混乱するとは・・・
頭が痛い

夢と休日

「湊さん」

「鈴」

鈴が目をつぶる

そして俺はどんどん鈴に顔を近づけ……………

「わあああああ！」

その声に反応して鈴が部屋に来る

「ど、どうしたんですか!？」

ゆ、夢か

あれこそまさに悪夢だ

……………予知夢なんて事ないよな？

このままだと本当にああなりそうだから止めてほしい

「いや、怖い夢見てな」

「それだけですか？」

「そうだが」

「なら良かったです」

そう言って戻っていった

「……もう一度寝るか」

今度はいい夢見られるといいけど

夢をまたみれた

今度は不思議な夢

自宅に戻った時にいた女の子を含む4人が俺の家にいる
そして何かの目的の為にバイトをしている俺
夢はそこで終わる

気がつくところはいつも見ている天井
そして鮮明に思い出せる夢

「つま、所詮夢だろ」

時間は11時23分

眠くないからさっさと起きる

「おはよう……いないのか？」

家は静寂に包まれていた
部屋は綺麗になっている

きつと掃除してくれたんだろう

そう思つて部屋に戻ろうとした時に

バンと扉が思いつきり開けられ夢で見た4人が駆け込んできた

「月島さんが交通事故にあつてしまつたそうです!」

「今電話あつたんだ!

僕だつて信じたくないよ」

勝手に口が動く

体が言うことを聞かない

「早く行きましょう」

「わかつた、早く行こう」

その言葉と同時に走り出す

「っは!」

いつも起きる時に見る天井がある

「ゆ、夢か．．．．．」

もうどこからが夢だかわからない

最初から全て夢だつたら夢の夢の夢の夢を見ていた事になる

凄いややこしいな

2度寝した所は現実だと信じよう

部屋を出ると誰もいないのか静まり返っていた
さっきの夢と同じ行動を試してみる

しかし結局何も起こらなかった

俺は少し安心するとテレビをつけて暇を潰す

そして夜

次の日も休みだし

鈴も帰ってこないから1人部屋でエロゲをやっていた
だがエロゲだけでは暇なのでネットゲにログイン
流石と話して暇つぶしをしようと考えたが

その日、流石はインしなかった

次の日の日曜

この日は何も起きずただ時間が過ぎた

月曜

この日、俺は色々後悔する事になった

「湊さん起きてください」

声が聞こえるが無視

まだ寝たいから

「起きないと先にいつちやいますよ?」

いけいけ

俺はゆっくり寝てるよ

夢と休日（後書き）

フラグ立てましたねw

ちなみにフラグ回収は・・・・・・・・ゴホンゴホン

そして書く事がなにもないという

あ、1つだけあった

PCを買う予定です

でもこの小説はこのままPS3で投稿します

PCを使って書くのは次回作（考え中）になると思います

次回作は大きく分けて

バカテスの2次創作にするか

それともオリジナルにするかで悩んでいます

オリジナルの場合「魔法」+「恋愛」+「戦闘」になると思いますが・・・・・・・・

ではこれで終わります！

また見てくださいね？

待ってますから

学校での会話（前書き）

今回はダウトが出来ると思ってました

しかし結果は見ての通り．．．．．orz

ですが次話は出来るはずです！

途中で終わると思いますが

PV50000 ユニーク100000

総合評価200越えました！

本当にありがとうございます

これからも「オタクと美少女達」をよろしく願います

学校での会話

「起きないならキスしちゃうかな」

「ん」

おはよう鈴」

危なかった」

もうすぐファーストキスが奪われるところだった

「やっと起きましたね

早くしないと遅刻ですよ？」

そう言っ指さす方向を見ると……………

8時10分!?

遅刻と急いだのか起きてベットから降りようとしたら滑り
鈴を押し倒してしまった

「み、湊さん」

鈴が目をそらす

顔が赤くなっついていて凄くかわいい

何て事考えるより遅刻の方が大事だ!

「鈴先に行っていいぞ」

「駄目です!

一緒に行く約束のはずです」

約束はいいんだけど

お前を遅刻させた原因が

俺となると周りから何言われるか

わからないから先に行つててほしかったんだけどな

「あゝ早くしないと」

その日は凄かった

いつもは30分以上かかる支度が

まさか5分で終わつてしまふなんて

「ま、間に合つた」

朝なのに凄い疲れた

このまま帰りたい気分だ

しかしそんな事をすればどうなるかわかつたもんじゃない

運が悪いと鈴が付いてきて教師やクラスメイトから攻められ

運がよくても一緒に帰つてくれなかつたとかの理由で鈴に何かされる

このまま学校にいるのが安全なのだ

「よ、湊

今日決行するからな」

「俺の方はいいとしても

お前の姉は？」

「大丈夫だ」

今日は一日家にいると言っていた
後は月島が来れば決行できる！」

「わかった、聞いてみるよ」

俺は鈴の席に向かう

「鈴、放課後暇か？」

「何もありませんけど……
で、デートですか!？」

「それは違うが」

ちょっと坂井の家に付き合っただけなんだ

「わかりました」

ではちゃんと手をつないで帰して下さい

「ど、どうしてそうなる？」

「来て欲しいなら私と手をつないで下さい
そうじゃないと真っ直ぐ家に帰ります」

「い、家って自分のだよな？」

「私と湊さんの家に決まっていますよ？」

くそ、手をつなぐというイベントは好感度をあげてしまっ
しかしつなげなければ鈴はついてこない

だがつないでしまうと明日から普通の男子生徒の恨みをかう可能性が
だが……………

「……………わかった

手をつないで帰ろう」

そう言うと満面の笑みを浮かべた

凄い嬉しかったのか

授業中に元気すぎて先生に「どうしたんだ？」なんて聞かれたりし
ていた

そして放課後

俺は全校生徒の注目を浴びながら坂井の家に向かった

学校での会話（後書き）

それと私の初作品「アクセサリー・ソード」

見直した結果は「何でこれが面白いと思ったんだろ？」でした
そしてちよつと書き直そうと思った結果

タイトル「転生先は魔法世界!？」

あらずじ

朝起きたらいつの間にか知らない部屋に!?

しかもこの世界が魔法世界だつて!?

い、一応魔法は習っておいた方がいいよな……………うん

ちなみに前回の後書きで書いたオリジナルとは別です

今回は「アクセサリー（ry）」の書き直しとして考えて下さい

戦闘もありますがおぼ間違いなくギャグみたくなるでしょう（多分）

しかも姉と禁断の……………

まああくまで予定ですがw

ダウトとポーカー！？（前書き）

すみません

ダウトでの駆け引きとか入れるつもりだったのですが無理でした
です。ポーカーで埋め合わせ・・・・・・・・
本当に駄目です。ね俺

それと後書きでちょっとしたお願いというか・・・・・・・・
協力して欲しい事が書いてありますのでご覧ください

ダウトとポーカー！？

坂井の家に着いた説き、俺の精神的にまいつていた人とすれ違う度に「いいな」「あんな奴が可愛い娘と歩いてるなんて不公平だ」「殺す」の意味を持った視線がくる

「や、やっとなん」

「言葉おかしいぞ湊」

「す、すまぬ」

「ちょっと休め」

「わかったさす」

「そこで止めるな！」

「ば、罰ゲームとか聞いてないから！」

どうやら俺は眠っていたらしい起きると流石が姉に襲われていた

「あ、湊が起きた！」

早くダウトやるう」

俺を使つて難を逃れやがった

まあそれはいい

今は流石が配っているトランプに集中しよう

「とし、じゃあ始め」

「まず俺からだな」

順番は俺 鈴 坂井姉 流石に決定した

そしてルールも少し変化した

変化したと言つてもバカ スでやった「Fクラスローカルルール」を採用しただけなのだが

Fクラスローカルルール

手札が2枚になった時点でその人の勝利です

場のカードを貰ってしまった人は好きな数字から始められます

数十分後

1位坂井姉 2位鈴 3位湊 4位流石で終わった

「何をお願いしてもいいんだよね」

そう言つて流石を引きずりながら流石の部屋へと連れて行く姉
そして部屋に入つてすぐ悲鳴が聞こえたのは言つまでもない

「こ、今度こそ負けんぞ」

「流石ちよつと」

「何だ？」

流石にだけ聞こえるように言う

「やっぱりダウトだと頭の悪い俺達じゃ勝てないんじゃないか？」

「た、確かにそうかもな……」

でももしたらどうする？

俺達は運で勝たなきゃいけないるんだぞ！？」

「ならポーカーはどうだ？」

「ポーカー？」

ポーカーとは

ハンド（手札）の強さを競うゲームである。
ルール

最初に5枚の手札が配られる

その中から不要なカードを好きなだけ選んで捨てる

そして山札から捨てた枚数分引いて

出来て役で勝負が決まる

「確かにそれなら俺達が勝てる可能性もあるな……」

「よし決まりだな」

「ねえ、ポーカーしない？
罰ゲーム有りだ」

「ポーカーですか？
私はいいですけど」

「私もいいよん」

「じゃあ決まりだな
カードを配ってくれ湊」

「わかった」

カードを配り終わると皆自分の手札を確認する
俺の手札は4, 4, 3, 3, 10のツーペアだ

「（何で俺の手札には役が1つも無い!?）」

何故だろう？

流石が凄く焦っているんだが………

ダウトとポーカー！？（後書き）

前書きであったお願いを書きます

昨日言った「転生先は魔法世界！？」についてです。

次回作にこれを出して欲しいって事があったのを思い出して考えた結果こうします

「転生先は（ry）」で出して欲しい「イベント」「キャラ」などなど募集します

例えば「こんな状況にして欲しい」とか「このいうキャラを出して欲しい」等何でもいいです

俺の知恵を振り絞って全部だしたいと思います

設定は魔法学校に通うって事のみしか決めていません

主人公とかも決めてません

こういう事にした理由は、自分はどこまで答えられるかな？と疑問に思った結果です

無視して貰ってもかまいません

書かれた事以外で決まってる事はこちらで決めます

書いて貰う場所は感想か活動報告（出来れば活動報告でお願いします）

活動報告に「転生先は魔法世界！？」で作っておきます

それでは後書きを終わります！

また見て貰えたら嬉しいにゃん

新キャラ登場！？（前書き）

やっちまった〜!!!

流石・・・天国で元気にやってるだろうか
って気持ちです今w

2週間連続投稿出来た〜!

正直1週間も保たないと思ってたのにw

新キャラ登場!?

取り合えず10を捨てる

鈴は3枚、坂井姉は1枚、流石は……全部捨てた!?

余程運が悪かったんだろな

何て考えつつもカードを引く

引いたカードは6

皆一斉にカードを表にする

湊「3、3、4、4、6」ツーパー

鈴「8、8、11、13」スリーカード

坂井姉「ダイヤ1、2、5、7、9」フラッシュ

流石「5、7、8、12」ワンペアー

1位坂井姉、2位鈴、3位湊、4位流石

さつきと変わらない結果になった

「流石……どんまい」

「どんまいで済ませないで助けて!」

「無理言つな」

「い、いや〜〜」

引きずられながらも必死に抵抗する流石
無駄な事なのに

「な、何やってるんですか!?!」

不意に後ろから声がした
反射的に後ろの声の主を確認する

そこにはツインテールの少女が立っていた
俺は流石の方に視線を戻す

何故か顔が真っ青の流石がツインテールの少女を見ていた

「な、何でおま、お前がここにいる」

明らかに怯えている
しかし流石とどんな関係なんだろうつか？

「流石の知り合いか？」

「ち、違うただの」

「ただの許嫁よ」

な．．．．．なに〜!？

「お前に許嫁がいるなんて聞いてないぞ！」

流石にそう問いかけるがそれは坂井姉によって遮られた

「早く部屋に行くよ流石」

坂井姉が焦っている

あの人のあんなに取り乱すなんて

「ま、まちなさい！」

そう言つて流石のもとに行く少女
追いつくと坂井姉と少女のにらみ合いが始まった

「た、助けてくれ湊！」

そう言つと坂井姉と少女もこちらをじつと見る
隣では鈴が少し怯えていた
これ以上関わるのは危ないな
その考えをもとに考えた返答がこれだ

「流石．．．．．」

今まで本当に楽しかった

天国から俺の事を見守つててくれ」

「俺死ぬの!？」

ま、まさか天国に行かないよね？」

そう2人に問いかける流石だったが
2人は黙つたまま笑つていた

「い、嫌だ〜〜〜！」

天国でもしっかりやれよ

天国つて言つても死ぬつて意味じゃないぞ

あの2人に何されるかわからないが

普通の人から見れば天国だろ？ それとも理想郷かな？

今俺は寮の前にいる

流石が連れて行かれて1分もしないうちに帰った
だってそうだろ？ あの悲鳴の中いたくないだろ？

「あれ？ 部屋の電気がついてる？」

「本当ですね？」

「早く部屋に戻ってみよう」

新キャラ登場！？（後書き）

次回予告？

「簡単に言えばメイドですね」

「終わったからお風呂です」

「お背中流すのは当然ですよ」

さて、明日は暇なので友達とPC見に行きます

友達曰く「デスクもノートも今は性能同じ」

らしいので持ち運べるノートにしようと考え中！

これで後書き終わります！

明日も見えてくれるかな？ かな？

新たなヒロイン！太刀原このえ（前書き）

まああれです

まよチキ！見たせいですね・・・

新たなヒロイン！太刀原このえ

部屋には鍵がかかっておらず
部屋中にいい匂いが漂っている

「あ、おかえりなさい」

そこにはいとこがいた
何故俺の家にいる？

「このえだったか？
何で俺の家には？」

「聞いてないんですか？
私もここに住む事になったんです」

「何故？」

「私も湊君と同じ学校にかようからです
あ、タダで住まわせてもらうわけにはいけないので家事とかは私が
やりますよ

簡単に言えばメイドですね」

メイドって……
でも常識人そうだしこのえの前なら危ない事もされないだろう
ならいいかもな

「わかった」

「私の時は嫌そうだったのにメイドは簡単にやとつんですね」

やばい……………

後ろで鈴が怒ってる

「い、いや

親から頼まれた事だから」

「まあいいですけど

そこのあなた！

私と湊さんの仲は邪魔しないで下さいよー！」

「しますよ？」

だって昔に結婚の約束もしてあるんですから」

「え？」

まったく記憶にないんだが……………

「さあ食事の用意も出来てます

終わったらお風呂です」

お風呂という言葉に鈴が反応する

「お風呂なら私も一緒に入るからね！」

「なら私も入ります」

「何だよ！

あなたは関係ないでしょう！

私と湊さんは一緒に入る約束をしてるんですから!」

「メイドですからご主人様のお背中流すのは当然ですよ」

何だか大変な事になったよおい

ここは俺が止めないと

「ならどっちも一緒に入らないってのは?」

「それは(ないです)(ありません)」

泣きそうなんだけど.....
即否定はあまりにもひどいよ

夕飯食べている時ずっとこのえと鈴がにらみ合っていた

早く部屋に戻りたいという思いで急いで食べたなら喉につまり

このえが介抱したのが気に入らない鈴はこのえとまた口論

今俺の気持ちを正直に言おう

早くこいつら目が覚めないかな.....俺よりいい男なんてい
くらでもいるだろうに

「ふう〜」

気持ちいいな〜」

俺は今風呂に入っている

このえと鈴の目を盗み入った

ばれればただでは済まないだろうが風呂くらいゆっくりしたい

「ご主人様湯加減はどうですか？」

「……………あちようどいい」

早速ばれた〜！

やばい、取り合えず鍵を

「鍵なんかかけませんよね？」

鈴の声で鍵をかけようとしていた手が止まる

何故ばれたし……………

「私達も入るんですから鍵かけたら酷いですよ？」

俺終わったな

新たなヒロイン！太刀原このえ（後書き）

さて、今回は色々と疲れました

まず「あれ？このえと鈴の喋り方が似てる．．．．．？」で始まり

「あれ？俺もどつちかわからなくなってきたな？」で行き詰まり

「このえはこうで鈴はこういう喋り方だ！」で終わってくれました

このえは凄く丁寧な喋り方で鈴はそれをちょっと崩した感じですね

それと新ヒロインがでるたびに章をつけようと思ってます

章といってもヒロインの名前にするだけですわ

ではこれで後書き終わります

明日も見てくださいなきゃ泣いちゃうんだからね！

風呂が終わって(前書き)

いや〜まさか気づかないうちに0時過ぎてるなんて思いませんでした
たw

明日はちゃんと0時投稿したいよ〜……………

風呂が終わって

気づくと俺はベッドで寝ていた

お風呂にはいったはずだけどどうしてだ？

鈴に聞いてみるか

部屋を出るとこのえと鈴がテレビを見ていた
近づくと同時にこつちを見て少々怖かった

「俺は風呂に入ってたはずなんだが．．．．．
どうして布団で寝てたんだ？」

「．．．．．お風呂で溺れてました」

そういうと鈴の目から涙がでてしまった
俺が何かしたのか？

「心配したんですから！」

ああそうか

俺が溺れたのが原因か

「とりあえず月島さんに謝って下さい
あなたが溺れてるの見たら震えだして泣いてしまったんですよ！」

そうか．．．．．それは俺が悪いな

「ごめんな．．．．．」

俺はそう簡単に死なないから．．．．．だから安心しろ」

近くに行つて頭を撫でてやる
少し赤くなりながら安心したようだ

「でも私との約束破つて勝手にお風呂入りましたよね？」

急に辺りの温度が変わつた

「そ、それはだな……………」

「言い訳なら後で聞きます

湊さんは罰を受けなきゃ駄目ですよね」

「だ、誰か助け……………」

ぎゃ〜〜〜〜

「もう約束破りませんか？」

「はい、破りません」

正座をさせられている

俺は何をされたのかまったく覚えていない

このえが言うには『覚えてない方が身のため』だぞうだ

「じゃあ次から約束を破るたびに私のはじめてを奪つて貰います」

「はじめてって言葉が凄く怖いのですが」

「例えばはじめてのキスとかはじめての間接キスとか」

「何で例がキスだけ!？」

「じゃあ私のはじめてのあい」

「あ、キスとかだよなわかった!」

あつぶね

もうすぐ俺の貞操の危機だったよ

俺は魔法使いを目指すのだ!

目の前に大きな壁があるけど……………

「では楽しみにしています

早く約束破って下さいね?」

「ちゃんと守りますね

……………いや、絶対守ります」

これで絶対に約束破れなくなった

あ、やばい、そろそろ足が……………

「そろそろ湊さんの足も痺れてきた頃ですから今日はこのくらいで許します」

何故わかる!？」

お前は読心術の持ち主か!？」

．．．．．まあ解放されたんだし無視しよう

次の日

「湊」

「流石か．．．．．何のようだ？」

今は放課後

俺はつまらない授業で疲れてるのに

「今からカラオケ行かないか？」

「カラオケか．．．．．めんどい」

「そつ言っても無駄だぞ」

風呂が終わって（後書き）

今日あった事

山田にPC見に行った

家に帰ると「ジャパネットに色々ついてる奴あるぞ」

あるなら早く言ってよ．．．．山田行った意味ないじゃん

そして今日決めた無謀な事

「絵毎日描いてうまくなろう！」

チャレンジ

毎日投稿してる小説あるのにまた変な事決めたな．．．．と自分を馬鹿にしながら今日まよチキ！のスバルを描きました
学校の授業中の暇つぶしで絵描いてたけどやっぱり楽しい

これで後書き終わります

．．．．今日は言葉が思いつかないので無し！

なんて訳ないでしょう！

「また明日も見なさい！じゃないと罰金よ罰金」by ヒ？

カラオケで

「何でだ？」

「月島も一緒だから」

「……………帰るわ」

「帰るって何ですか？」

後ろを向くと鈴がいる
さて、どうやって切り抜ける

「まさか逃げるなんて事ないですよね？
約束破るつもりですか？」

「いや、そんな約束した覚えが……………」

「一緒に帰るって家まで一緒ですよ？
なら私の寄り道も一緒ですよね？」

「……………はい」

言い返せない……………
いや、言い返しても無駄だ

「じゃあ行きましょうか」

鈴に腕を組まれ連れて行かれる

このえと坂井姉もいる

「じゃあ入りましょうか」

「湊さんも歌って下さい！」

「い、嫌だ」

「じゃあどうしたら歌ってくれますか？」

「じゃあ取り合えず俺にくつつかないでほしい」

「……歌ってくれるならいいですよ」

離れてくれた

というか

「このえも離れてくれ」

「離れないといけないでしょうか？」

「いけません」

このえも離れる

取り合えず何歌うか選ばないと……

「私達の知ってる曲にしてくださいね？」

ごめんなさい

今の歌知らないです

「そ、それはちょっと無理かな」

「ならいいです」

さて、何歌うか．．．．．
ハレ晴レ カイ？ それかブラック ロック シューター？ それと
モラ オンでも歌っておくか．．．．．？

「思いつかないならバカ・ゴー・ーム歌ってくれよ」

「．．．．．まあそれでいいか」

歌い終わった

その後俺は1回も歌わなかった

帰る際に皆でガトによった

そこで俺と流石は密かに次の勝負について話し合った
ダウトとポーカーで負けたなら次は音ゲー（リズムゲーム）で勝負
しよう．．．．．

家に着いた時にはもう疲れはてていた

お風呂は明日にし、
すぐに布団で眠った

カラオケで（後書き）

もうすぐ夏休みの終わりで嬉しいような嬉しくないような気分を満喫しているたまちゃんです

そして今日またスバルを描いてみました

どうみても似てなくて少し悲しいです．．．．．

でもこの程度では負けませんよ！

明日は犬が家にきたり髪を切りに行ったりと大変そうです

さて後書きを終わります

わふゝ明日も見て下さいですゝbyクドリヤ カ？

俺の朝と流石の絶望

今俺は風呂からでて制服に着替えている
風呂場では地獄だった

風呂に入った瞬間体と髪を洗い湯船につかる
鈴とこのえが入ってきて体と髪を洗い始める
早く出てつてくれと思いつながら背を向ける
なのに湯船に入ってきた
あまり大きくない風呂に3人
俺の体に色々あたる
それに耐えながら数分
風呂から鈴とこのえがでていく
着替えの時間を含め1分ほど湯船に使って待つ
出ると頭がクラクラして1分ほど立ち尽くす
直るとすぐ部屋に戻り今に至る

「朝から疲れる」

「湊さん早くして下さい」

「ご主人様お急ぎ下さい」

「わかってるよ」

誰のせいだ誰の
急いで着替え家を後にする

「お前も大変だな湊」

今は放課後

今度の勝負の作戦会議をしようという事で教室に残っている
鈴は用事で先に帰るそうだ

「そういうお前はどうかんだ？」

「……………そいえばあの許嫁はどうしたんだ？」

「許嫁とか怖いこと言うなよ！」

あいつは家に帰ったよ

もともと俺の様子見に來ただけだったらしいからな」

「そのうち転入してきたりしてな」

「笑いながら言うなよ！」

本当に來たらどうしてくれる！？」

「あ、坂井君まだいてくれましたね」

このクラスの担任だ

恋愛話が好きならしい

24才の自称美人教師

「どうしたんですか先生？」

俺になにかようですか？」

「もうすぐ転入してくる生徒がいます
その子に色々教えてほしいのですが．．．．．
お願い出来ますか？」

「何で俺何ですか？」

「その生徒があなたがいいというので」

「名前は？」

「常盤 佳奈さんです」

常盤 佳奈

ツインテールが特徴の女の子
知っでの通り流石の許嫁である

「．．．．．本当にすまない」

「いや、いいさ．．．．．ハハハ」

声が震えながらも答えてくれる流石
本気で同情しそうだ

「では問題ないですね
寄り道せずに帰るんですよ」

「この状況で問題ないと言える先生が凄いです」

先生が教室を出ていく
俺の言葉はただの独り言になった

「元氣出せよ」

「わかってる」

「ありがとう湊」

「じゃあまた明日な」

「おう」

家に帰る途中鈴にあった

俺は流石に起こった出来事を話す

「常盤さんと言っんですか」

坂井さんの為に転入なんて懂れます」

懂れないで

被害受けるの俺だから

「それはそうと今日は帰ったら寝るから夕飯いらない」

今日はゆっくくり寝よう

俺の朝と流石の絶望（後書き）

ふう〜疲れた

さっきというかこれの投稿を終えたらまた「生徒会【個性豊かな役員達】」の執筆を続けないと

という事で生徒会【個性豊かな役員達】も見てもらえると嬉しいです
まあヒロイン固定になっちゃうのかな？あれ？

さて、今回はツインテール少女のが正式に流石ハーレムに入る事が
確定しました

そして3人目も決まりました

3人目がでるにあたって湊が何か覚える!?

とだけ言っておきましょう……

というかよくこんなの思いついたな俺って思います（悪い意味で）
さて、後書き終わります

「お主明日も見てくれるのであろう？」
「ワシは待っておるかの」
「b
y
h
i
d
e
s
h
i
?」

風邪をひいた湊

目を覚ます

時間を確認すると0時だった

「……………喉乾いた」

部屋を出ると声が聞こえてきた
鈴とこのえが使ってる部屋からだ
この声は鈴か？

「大丈夫だよ

明日は湊さん私しか見なくなるから」

何それ怖い

「え？ 理由？

明日勝負があつて……………」

何故鈴が知っている？

流石の馬鹿が喋ったか？

まあそれは明日でいい

リビングに行くと今度はこのえの声がある

「あ、お母様

……………ええ問題ありません

「……はい予定通り明日ご主人様をゲットします」

何それ本当に怖い

明日俺何されるんだよ

「……と、取り合えず寝るか
考えてもわからないんだし」

次の日俺は風邪をひいた

「熱が38.7ですか」

「湊さん大丈夫ですか？

私休みましようか？」

「いや、いい

俺一人で大丈夫だ」

「そうです

ご主人様は私に任せてください」

「俺は一人で大丈夫だと言ったんだが……」

「……わかりました」

あれ？ やけに素直だな？

「ではおかゆ作っておきますので食べて下さい」

「わかった」

12:00

もうお昼だがお腹は空かない
だが食べておいた方がいいだろう

台所におかゆが作ってあるのがわかる
暖めなおして………と

「変な味だな？」

風邪でおかしくなってるのかな？」

pm 3:00

「暇だな………」

「帰りました」

部屋の扉が開いた

どうやらこのえが帰ってきたらしい

「ご主人様おかゆちゃんと食べましたか？」

「ちゃんと食べたよ」

何だろう

いつもよりこのえがかわいい……………

「なら惚れ薬も効いてますね」

「あの味はそれか〜！」

くそ何て事だ……………

まんまと惚れ薬を飲まされてしまうとは

「薬が本当に効くのは体に入ってから3時間半です

その効いた時間から10分以内に見た人を好きになります」

俺が食べた時間が12:00時！

今の時間は3:10分！

後40分どうにかすれば俺は助かるわけだ

どうする？ トイレに逃げるか？

「あ、部屋からでる時は言って下さい

私も一緒に手伝いますから」

終わった……………

こいつは時間になるまで俺を逃がさないつもりだ

後回避する手段は……………一つだけあるじゃないか！

「わかった

じゃあ俺は寝るから」

「なら私も一緒に寝ます」

「え？」

どうしてそっなるの？

風邪をひいた湊（後書き）

いつもは早く感じる0時が今日に限って遅い……………もう限界というわけで早めに投稿します

そして後3時間でバカテスがやります！

タイトルは「ウチと日本と知らない言葉」

凄く楽しみです！ あ、あとまよチキ！も忘れずに見ないと！
次回予告でおもしろそうだったしw

ではこれで後書き終わります

最近思うけど後書きとして成立してるのか？これ？

まあ気にしないでおこう……………また見て下さい！

風邪をひいた湊2

「な、何で一緒に寝るんだ？」

「その方が早く直るってお父様が」

「お前の親が何考えているかわからない……………」

「それより早く寝ますよ」

「布団に入って来るな！

俺は一人で寝たいんだ」

入ってくるこのえを押し出す

「一緒に寝てくれないならこのまま起きててもらいます」

「何!？」

それはまずい……………」

このえが隣で寝てるとなれば自然と意識して眠れないだろう
しかしこのまま寝かせてもらえないのも危ない
あれ? というかどっちもアウトじゃない?

「どうしますか？」

「つく……………」

待て、鈴が帰ってくれば……………」

逆に危ないな

「早く選ばないと時間が来てしまいますよ？」

そんなのわかってる．．．．．3：30まで後10分
どうにかしてこの状況を打開しないと

「あ、起きる方を選んだ場合5分前になったら抱きつきます」

「今すぐ寝ます」

俺は寝る

抱きつかれたらそれこそ終わりだ
精神が弱ってるのに抱きつき何てされてみる
それこそ裏の俺が出てくる

「じゃあ寝るから」

布団に入って目をつぶる

「あ、寝てしまったらキスで起こします」

お前はどれだけ俺をいじめれば気が済むんだ．．．．．

「ちゃ、ちゃんと起きてるよ」

「ねたふりしてもキスします」

もう止めて！ 私のライフ（精神）はイチよ！
か、神様助けて！？

ピンポーン

「誰か来たようですね」

「このえ出てくれ」

「わかりました」

扉をあけていった

これなら声は聞こえるな

「坂井ですけど

湊君のお見舞いに来ました」

流石ありがとう

お前のおかげで俺は助かりそうだ

「ご主人様は意識不明の重体です」

「マジで!?!」

信じるなよ……………

「もうすぐ息をひきとられるそうです」

「そ、そんな……………」

いい奴だったのに」

お前は何処まで馬鹿なんだ流石

いや、でも普通出会って間もない奴が嘘言つとは考えないか……

「最後にお会いしますか？」

「はい」

流石が部屋に入ってきた

「湊……死ぬな」

「死ぬか馬鹿」

「え？ もつすぐ息をひきとるんじゃないあ……」

「お前の馬鹿もここまで来ると才能にしか見えない」

「ありがとうよ」

「褒めてないと思います」

「何!？」

「そうなのか湊!？」

その通り

よくそんなんで姉に勝とうなんて思ったよ
負けるのは目に見えてるじゃないか

風邪をひいた湊2（後書き）

やばいw

Steins ; Gate 以外とおもしろいw

さて、明日も風邪をひいた湊続きそうです

というか早くあの男だしたいw

まあ男が出したいんじゃないやなくて男が原因でヒロイン3人目にあうと言った方がいいかな？ それとアスラクライン（小説）見て思った.....

美少女の幽霊だしてみたい.....と

まあ出しませんけど（今の所）

もし出てきたら衝動に負けたと思って下さい

よし、今日はここまでと

明日も見て下さい！

後、地の文少ない方がいいかな？

風邪をひいた湊3

「はあ」

お前はリビングでくつろいでる
このえはお茶だしてあげてくれ」

「いいのか？」

こんなかわいいのに．．．．．
襲っても知らないぞ？」

「お前に襲う勇気があるならやってみろ」

「う．．．．．」

や、やれるさ！」

「だ、そうだこのえ」

「私は大丈夫ですよ？」

「マジで！」

「襲われても返り討ちにしますから」

「そ、そっちの大丈夫か！」

こいつらコントでもやってるのか？
それより時間がないんだ、早く出ていけ

「そんな事より早くリビングにいけ流石」

「何で焦ってるんだ？」

「後で話すからこのえを連れて部屋をでてくださいお願いします」

「何か怖いぞ湊」

「はやく〜」

「わ、わかった！ わかったから！」

このえを連れて部屋をでていく流石
た、助かった〜
と思ったら

「あ、ご主人様」

「な、何だ」

後1分しかない

「惚れ薬は嘘です

隠し味が変な味になっていたなんて少し残念です」

．．．．．嘘？

「．．．．．一つ言いたい」

「何ですかご主人様？」

「病人をからかうのは止めて下さい」

「大丈夫です！」

例え今日熱だしてなくても夕食に隠し味使いましたから」

その隠し味ってどんな料理でも大丈夫なの？

あれ？ ツツコムところ間違ってるか？ まあいいか

「じゃあもう寝るから」

「でもその隠し味に媚薬をちよつと入れました」

「そ、それも嘘でしょ？」

「どうでしょうね？」

「……………女って怖いです

というか男用の媚薬ってあるんだ……………初めて知ったよ

「あ、寝る事流石に言わないと……………」

リビングに行くと言石がこのえを事をじつと見ていた
そこで部屋に戻り携帯を手にし、撮影

「ほんの出来心だったんです

許して下さい」

「いや、許すも何も、もうお前の姉に送っちゃったし」

「せめて流石にやってもらったとか送ってくれば……」

「あ、返事だ……なになに

情報ありがとう、早急に家に帰るようにさー君に伝えてたとさ」

「泊めて下さい」

「いいぞ」

「ご主人様いいんですか？」

「明日帰ったらもっと酷い目にあうんだし」

「やっぱり帰るわ……また明日」

せつかく泊めてやろうと思ったのに
まあいい、俺も寝るか

「俺は寝るから」

「その前にお風呂です」

「どうしてっ？」

「お風呂で汗流しましょう」

どうしてそうなる

風邪をひいた湊3（後書き）

湊の風邪でここまで話数使うとは思わなかった
でもそれも次話で終わりのはず・・・・・・・・

そいえば東方の原曲って結構いいね
好きになったよ

キャラは博麗霊夢が好きになった
皆はどうなのかな？

よしこれで後書き終了
また見て下さいワン

風邪をひいた湊4（前書き）

や、やっと風邪をひいた湊終わった・・・
まさか4話続く何て夢にも思わなかった

風邪をひいた湊4

「風邪ひいてるのに風呂って……………」

俺は風呂に入らず寝かされてたぞ

「お風呂に入れば汗かきますよ？
なら入った方がいいです！」

「本心は？」

「それはさつきも言ったとおり……………」

「お前の事だ

何か裏があるはずだ」

「そ、そんなに自信持って言われると……………嬉しいです」

「何で!？」

「だって私の事ちゃんと見てくれてる証拠ですから」

しまった〜!

これじゃあ好感度が上がるじゃないか!?

「いや、それは悪い意味で……………」

「それでも嬉しいです」

駄目だ……

どうやったらこいつは離れて行くんだ

せ、せめてあの下級生みたいな奴が来てくれれば嬉しいんだけど

「じゃ、じゃあ俺は寝るから」

「お風呂に入ってくれないなら布団に潜り込みます」

「わかった

風呂にはいつてやろうじゃないか」

「本当ですか！

じゃあ早速風呂に入ってください！」

「ま、まさかお前の入るなんて言わないよな？」

「言わなくても入りますよ？」

どうしてお前達はそうなんだ

せめて風呂ぐらいゆっくりさせてくれ

「入るのは駄目だ

鍵かけるから入れないぞ」

「ではお風呂からでたら抱きつきます」

「別にその程度少し我慢すれば……」

「勿論裸で」

怖くて風呂から出れないよ

「そ、それも駄目だ」

「ならいいです」

良かった諦めてくれた

これで安心して風呂に……………

「寝てる間にイタズラするから」

「ちよつと待て

イタズラって何する気だ!？」

「キスとか『ピー』とか」

「今完全に危ない発言したよな!？」

「『ピー』は冗談です」

「冗談で良かったよ

あやうく逃げ出しそうになったよ」

「でも冗談になるかは気分が変わります」

……………このえと一緒の家に居てはいけない気がする

「ちよ、ちよつと俺は用事が……………」

「その手は聞きませんよ」

「い、いや〜〜!」

とある男の電話

「はい、太刀原このえを見つけました」

「我が妻を必ず取り戻して見せます」

「あ、ありがとう鈴」

「助かってよかったです」

それより私がないのをいいことにキスしようとするなんて!」

「ご主人様が悪いんです」

抵抗が無ければ最後まで出来たのに」

「な、な．．．．．」

鈴が顔を真っ赤にしている
変なこと想像したらしいな

「俺は寝るから」

そついい部屋に戻った

風邪をひいた湊4（後書き）

男が出ました

このえの事を何か言っていましたねw

予想は出来るかな？ だけどあれまで予想は出来ないはず！？

「もう少し俺の事を考えてくれ

鈴とこのえだけでも辛いのに3人目出るとか……………地獄だろ」

大丈夫だ、問題ない

何故ならお前にもうすぐサポートキャラが出てくるからだ

「マジで！？

いや、過度の期待は危ないな」

お前もわかって来たじゃないか

じゃあ鈴とこのえをよん……………

「っだ！（走り出す音）」

素直になれ……………お前はもう……………

もう逃げられないんだ

つて事で今回の後書き終了！

明日もみないと夢に阿部さん（阿部高和で検索）を送りません
さて、ニコ動で阿部鬼の続きを見よう

フェイク

明日も見なさいよね！

べ、別にあんたに見て欲しいわけじゃないんだからね・・・

自称このえの夫登場？

次の日の朝は穏やかだった

昨日ので疲れていたのか俺が風呂からでも誰もいなかった

「この朝が毎日続けばいいな」

部屋で制服に着替えながらそう呟く

「明日も続きますよ」

「鈴か．．．．．」

「というかそれって本当か!？」

「はい」

私と湊さんのあまゝい生活は明日も続きますよ」

「俺が何言ったか聞いてたか？」

「聞いてませんけど」

「今日私が一緒にお風呂に入らなかったから落ち込んでるんですよね」

「何故そうなる．．．．．」

過去を変えられたらこいつらと会わないようにしたい

「大丈夫か湊？」

「会ったび聞かれてる気がするが……
お前の方はどうなんだ？」

「毎日疲れてるよ
だけでもうすぐさらに疲れる奴がこっちに来るんだ」

「それは大変だな
それよりお前の家に住むんだろ？」

「何でわかった!？」

「そりゃ〜わかるだろ
何せ身近に同じような奴がいるんだし」

「お、授業始まるな
じゃあ俺は寝るから」

「テストで痛い目見るぞ」

「俺は諦めてるから」

「まあ後で苦労するだけだぞ？」

後ろを指さす

そこを見てみると……

鈴が俺を見ていた

「何か嫌な予感するんだが……」

「寝ない方が身のためだと思っぞ?」

「だが寝る」

「結局今日も一日中寝てたな湊」

「俺は勉強が嫌いなんだよ」

「でも勉強しないと色々危ないぞ……」

「何が危ないんだ?」

「後でわかるぞ」

後でね

嫌な事じゃなければいいけど

「湊さん帰りますよ」

「ご主人様お早く」

「お、おう」

二人に強引に連れて行かれる

「な、何でそんなに急ぐ!？」

「めんどろな奴が来たからです

ご主人様に迷惑かけたくないのです」

それはありがたいが俺に迷惑がかかるって何のことだ？

「見つけた」

その言葉を発した人物を見る
なかなかのイケメンだ

「我が妻このえ．．．．何故逃げる？」

つま？ 妻!？

このえには夫がいたのか．．．．

「あなたの妻になった覚えはありません」

「だが掟で．．．．」

「それが嫌で出てきたんです

あなたと結婚するくらいならご主人様と一緒にの死にます」

あんたどんだけ嫌われてるんだよ．．．．

それと俺は死にたくないよ

「だ、だが．．．．わかった」

諦めないで！

このえを連れてかえって！

「そこの男勝負だ！」

技拾得！？

また勝負かよ．．．．．

「その男が勝てば諦めよう
しかし俺が勝った場合覚悟してもらおうぞ！」

「望むところです！」

「しかし俺とお前の差は歴然、それでは俺が勝ってもこのえは納得
しないだろう」

確かにな．．．．．

でも何で勝負するつもりなんだ？

「なら少し修行してもらおう」

「．．．．．異議あり！」

「な、何だお前」

「まず勝負の内容教える」

「勝負は勝負じゃないか」

「ご主人様、つまり格闘とかの勝負です」

「なるほど．．．．．ならお断りだ」

「もう遅い！」

いきなり近くに男が来たと思ったら目の前が真っ暗に……………

目が覚めると知らない部屋にいた

「起きましたね」

そこには美少年がいた
だが美少女に見えなくもない

「ここは何処だ？」

「ここは太刀原家と成川家なるかわの実家……………忍者の里とでも言っ
ておきましょう」

「忍者つて……………俺は死んだか」

「大丈夫です、あなたは死んでません」

その時部屋がノックされた
そして聞き覚えのある声が

「湊入るぞ」

「こんなところで何やってんだ父さん」

「いや、お前が成川の人間と勝負するって聞いて会社休んでここに来た」

安心しろ！ お前は俺が育ててやる」

「帰り方は？」

「教えるつもりはない」

逃げようとしても見張ってるしもしここから出られたとしても周りは山だ」

言いたいことはわかった

どうやらここに監禁まがいな事をされるらしいな

「あ、紹介が遅れたな」

この子は成川 薫かおる今日からお前の世話をする」

「よろしく」

「ああよろしく」

「じゃ早速始めるぞ」

まずあの技をお前に覚えさせる」

父さんが言った技の拾得に1ヶ月かかった

「っで、この技はどう使うんだ？」

「その技は女にしか効かない」

今回の戦いに使えないじゃん

まあ勝とうなんて思っただけ

「その技にかかった女はお前の思い通りになる」

なら鈴に使えるかもな

これで俺の一人暮らしがまたもど……

「しかしデメリットとして使った女はお前の事を好きになる
もともと好きだった場合もつと好きになる」

殴りたくなってきた

だが落ち着け、こいつは仮にも俺の父さんだ

「今日薫に使ってみたらどうだ？」

「薫は男だぞ？」

効くわけないじゃないか」

「まあそう言わずにな

あ、それと薫が連れてってくれる部屋で神に感謝しとけ」

薫に技使用！

「俺は神様なんて信じてないぞ？」

「まあいいから行つとけ」

まあ適当に感謝すればいいだろ

薫に連れてきてもらった部屋
そこに忍者を支えている神がいるらしい

「かみさまありがとうございます」

棒読み気味に言ったが大丈夫だろ

『神に対して棒読みなんて酷い人だね』

「ん？ 薫しゃべったか？」

「いいえ」

『あなたは神を信用しないようだね』

「誰だ！？」

「何を言ってるんですか？」

『というか私の声聞こえるのか!?!』

「聞こえてるぞ」

『私の声を聞ける人間なんて何百年ぶりだろう』

そこで姿を現す美少女

その美少女はにっこり笑うと

『あなた気に入った』

『へえ〜薫にその技をね〜』

(何か問題でもあるのか?)

『さあね〜』

こいつと俺の関係に何かあるらしく

こいつに向かって喋りかけるように心で言つと通じてしまつ

それよりも薫がきた

父さんに言われた通り薫に話し実験台になつてもらつ

「まあ効かないと思うけど……やるぞ!」

ちなみに男だからと思って女にしか効かない事を言っていない

「はい！」

相手の目を見る
そしてある言葉

「催眠！」

これだけで完了だ

「さて、寝るか」

「……………はい」

そう言うと薫が馬乗りしてきた

「な、何すんだ!？」

「僕は命令に従うだけです」

薫が服を脱ごうとする

薫は寝る時は浴衣
だから簡単に脱げる

「お、落ち着け」

父さんの言ってた事嘘じゃねえか!?
男の薫に効いたぞ!?

「大丈夫、僕も初めてだから」

「いやいや男同士は駄目だ！」

「僕は男じゃなくて女だよ」

そこで手の力が抜けそうになる

薫が女？ そんな馬鹿な……………

「し、仕方ない……………薫！」

その言葉で薫が俺を見る

「催眠！」

そこで薫の手が止まった

「ふう……………自分の布団で睡眠をとれ！」

そう言うと薫は布団に入る、そしてすぐ寝息をたてる

「た、助かった」

『あなた助かってないよ？』

（何で？）

『だってさっきの催眠で好きになってまた催眠をかけたんだから』

そこで父さんの言葉がよみがえる

【もともと好きだった場合もつと好きになる】

(あれももともとなるのか?)

『なるよ』

う、嘘だ〜!

(待てよ、父さんは薫が女って事を………)

『知ってたよ』

殴りたい

拳を震わせながらそう思った

薫に技使用！（後書き）

3話連続投稿！

さらに23日連続投稿！

しかし夏休み終わったら更新ペース戻るでしょう（多分）

今回やつちまったねw

神様+ヒロインを一斉に出すなんてw

まあ湊にアドバイスする役目をすっかり果たしてくれそうです

そして今日はその自称神様に来てもらいました！

『自称じゃないよ！』

ちゃんと神様だよ！』

まあそこは置いてちゃんとう湊にアドバイス出来そうですか？

『私は神様だから大丈夫！』

それは頼もしい限りで

そしてあなたの下着の色は！

『あなた変態？』

いえ、答えてくれるか言ってみただけです

『じゃあこれで帰るわ』

では自称神様でした！

『自称って言うな!』

さて、これで終わりたいと思います

自称神様 めんどくさいので自称

『自信の間違いだと思われるよ!?!』

そんな事より終わりの挨拶をどうぞ

『あなたいい死に方しないわよ

はあ〜明日も見てね 』

以上自神からでした〜

『もうそれでいいわよ』

では神様さようなら〜

『 / / / / / 』

忍者の里での生活

数日後

ジーーーーー

薫に見られてる……………

(本当にどうにか出来ないのか?)

『無理言わないで』

そっだよな

俺がどうにかするしかないか

「あゝ薫」

「ぼ、僕に何か用かな!？」

何故俺が話しかけると顔を赤くする……………
原因は俺だけだよ

「着替えるからそっち向いてて貰えるか？」

「ぼ、僕は男だから大丈夫だよ」

またか……………

そう言つて風呂まで入って来たじゃないか
正直また催眠かけて遠ざけようとしたさ

『止めた方がいいよ』

(どうしてだ？)

『前に同じ事やった人がいるけど……』

(何だ？ 早くいえ)

『……死んだから』

(何故に！？)

『催眠かけた子の思いが強くて、だけど近寄れない』

(それで)

『その子が病んじやったのよ』

「……まさか？」

『その子に殺されてその子も一緒に死んだわ』

(……俺止めるわ)

『その方が賢明ね』

(でもそいつ近づけないような催眠かけたんだろ？)

どうして殺されたんだ？)

『病んだ瞬間催眠が解けちゃったの』

「男なら尚更こっち見るな」

「どうして？」

「僕は女だよ？」

「もついい」

布団に隠れて着替えた

「こんな修行いつまで続くんだよ」

「大丈夫だ、6月の終わりに戻れる」

「．．．．．それって出席日数終わるじゃん」

「その点は大丈夫だ、校長は脅してある」

脅したのかよ．．．．．

「じゃあテストが危ないじゃないか!」

「それならお前の彼女達と話についてる」

「っは？」

「帰ったらすぐ勉強だそうだ」

「俺こっち好きだな〜夏休み終わるまでこっちにいたいな〜」

「それは無駄だ」

「……………わかってるよ」

こんな事になったのも全てあいつのせいだ！

だが勝負だと負けなれないといけないのか……………
まあどう頑張っても勝てないと思うが

「さて、どうせ修行しても今のお前じゃ勝てないんだ
勝負の日までゆっくりしてる」

「勝負の日っていつだよ？」

「6月終わり」

殴っていいかい父さん

「それまで修行なしで休んでろと？」

「そうだ」

「この周りに何も無い場所？」

「そつだ」

「このネット環境も無いこつで？」

「そつだ」

殴ってやった

「父さんにむかって何するんだ！」

「うるさい！」

こんな不便な場所に1ヶ月もいられるか！」

忍者の里での生活（後書き）

次話！ついに男と勝負！（かも）

だってしょうがないでしょう．．．．．あんな不便そうな場所で面白い話がいつかない

男と勝負が無ければ思いついたと思って下さい（ここに来る事はもう無さそうだしw）

今日は神のみぞ知る世界の「エリュシア・デ・ルート・イーマ（エルシィ）」を描きました。といってもまだ途中ですが．．．．．

もうすぐ夏休み終わり．．．．．中学生までは宿題とか終わってなくて大変でしたが高校では宿題自体が無い！！！！

これはすごいありがたいです（あってもやってるかわからないけどw）

それではまた明日！

み、見ないと泣いちゃうんだからね！

高校へ（前書き）

これで毎日投稿が終わるかも知れません

高校へ

「早く！」

俺は今薫の高校に向かっている
どうしてこうなるんだ……

「こんな不便な場所に1ヶ月もいられるか！」

「じゃあ明日からこっちの高校に通え」

「何で!？」

「それなら戻るまで暇を潰せるし勉強も出来ていいだろう」

……確かに勉強したって言えば鈴達との勉強を無くせるか
も知れない

「わかった」

忍者の里から車で1時間
やっと町につく

そこから徒歩10分の場所に高校があった

「ここまで来るのに疲れる」

「これも修行です」

修行なんてもう俺には関係ないのに……………

(おい神いるか)

『いるよ』

(ここ普通の学校か?)

『そうだけど……………それがどうしたの?』

(いや、何でもない)

いや、薫が通ってるんだ

普通の学校じゃない可能性もある

「じゃあここでお別れだね」

昇降口で別れる

これから校長室に向かわないと

校長室につく

ノックをすると「どうぞ」と言われたので入る

「これは太刀原様」

(何で様なんだよ)

『太刀原家は有名だからね』

「ではこれから教室に案内致します」

校長について行きながら俺は今更な疑問を聞く

(そいえば父さんと太刀原家ってどんな関係なんだ?)

『あなたのお父さんは太刀原家の長男なんだよ』

(じゃあ何で太刀原家に住まないんだ? 長男なんだろ?)

『あなたのお母さんと駆け落ちしたから』

(それなら何で父さんはここに?)

普通逃げた人間は家から嫌われるんじゃないやあ………)

その疑問は校長の言葉に阻まれた
どうやら教室についたらしい

教室の前で1分ほど待つと「来て下さい」と言われ中に入る
人数は30くらいだ
そして小さい子までいる

「今日から6月の終わりまでお世話になります太刀原 湊です
よろしく願います」

自己紹介を終えると薫と小さい子以外の生徒全員が静まり返る
先生はその空気に気づき俺を席に誘導して少し説明を始める

「この学校は学年混同です

私は小さい子の勉強中心に見ると思います
ですので自主勉強が基本になります」

説明を終えてすぐ1時間目が始まる

(何か ひぐらしみたいな学校だな)

ひぐらしの鳴く頃に

『ここに来たのは初めてだからわからないけど
何か楽しそうだね』

でもひぐらしは殺人とか起きちゃうけどな

放課後

「部活やらない？」

そう薫に誘われた

高校へ（後書き）

さて、何故か高校に通う事になりましたね

これからどんな展開になるんでしょうか！（俺でもわかりません）

それとバカとテストと召喚獣の2次創作が凄く書きたくなった

主人公は湊です（どうやってバカテストの世界に行くかも決まっています）

ヒロインは秀吉のお姉さんを予定（変わってオリキャラになる可能性あり）

それとようやくエルシィが描き終わりました！

そして今吉井昭久描いています

では終わります！

また見てね！

ドッジボール！？（前書き）

ページが表示されませんのせいで投稿遅れました

活動報告にキャラの座談がありますので時間があれば見てみてください
後坂井姉の名前を募集します！

無かったのかよ！って疑問は座談見れば解決します

ドッチボール!?

部活ってまさか……………

「ここだよ!」

そこは体育館だった

「ここで部活?」

入るとクラスの大半がいて、皆ドッチボールをしていた

「部活ってドッチボールか?」

「そつだよ」

そう言つと俺の手を引いてドッチボールに参戦する
しかし……………

「あ、当たらない!?!」

俺が投げるボールは全て避けられる

しかも連携が凄い事になつてる

ボールは2個で難しいのに皆簡単に避ける
俺は避けるのに必死だがチームの仲間が取つたボール全部俺に渡して
てくる

「どうなつてんだ……………ハアハア」

「これなら修行も出来て楽しいでしょ」

修行の域なのか

なら俺は的の同然じゃないか？

(助けてくれ)

『よそ見すると危ないよ?』

(してなくても危ないよ!)

『わかった協力してあげる』

そして俺は一つのボールに集中、もう一つは神が見てくれる
．．．．．そろそろ神の名前考えなきゃな

数分後にはとうとう俺一人になった
相手も薫を含め2人しかいない

「よし！ ボールゲット！」

ボールを持つ

『左!』

そう言われて左へ避ける
避けた瞬間俺のいた位置にボールが飛んできた

『あれは右に避ける傾向があるよ』

神の言葉に従いボールを投げる
やっと一人当てられた

(ありがとな)

『どういたしまして』

「最後はお前か薫」

「僕に当てられたら何でもいっ事聞いてあげるよ」

「言ったな」

これで俺はやっと自由になれる

あの男は勝負の前に逃げたと言ってこのえを連れて帰るだろう

(行くぞ神！)

『つひ』

結果．．．．．敗北

最後は薫に当てられて終わった

「あともう少しだと思ったのに．．．．．」

「……………おかしい」

「どうした？」

「いくら湊があの人の子でも初めてであそこまで行くなんて……………」

何故だろう……………凄いやばい事を聞かれそうな気がする

「……………やっぱりあの噂本当なのかな？」

だ、誰か助けて！

「湊が二重人格って本当？」

やっぱりそれか〜！

俺は1秒でも長く忘れていたかったのに……………

「さ、さあ俺は知らないな〜」

「怪しい」

「って言いながら顔近づけんな！」

どうしよう……………

神の事言うわけにもいかないしな

……………ならここは話を逸らそう！

「ひ、二つ質問していいか？」

「何？」

ドッチボール！？（後書き）

最近絵がうまくなったと感じているたまちゃんです

いや、本当にうまくなったんですよ！最初の頃に比べたら天と地の差です

証拠をUP！といきたいところですがPSS3じゃあ無理ですよねw

ではこれで終わります！

明日も投稿・・・・・・・・出来るかな？

質問

「二つ目は……………」

俺はひぐらしに出てくるあの部活があるか聞いた

「あるよ！」

何でわかったの!？」

「たまたまだ」

しかし本当にあるとは思わなかった……………
二つ目はあの男とこのえの関係について聞いた

「あれは兄さんが勝手に言ってるだけだから気にしないで」

残念……………勝手じゃなかったら良かったのに

「そいえば……………」

俺は着くまで話を逸らし続けた

「学校では仲良くやってるか？」

「やってるよ」

「というか父さん仕事は？」

「行ってるぞ」

行ってるようには見えないんだが……
というか父さん仕事何やってるんだろ？

「そいえば……」

といったところで父さんの携帯がなった

「もしもし？ 母さんか」

へえ〜母さんからか

「ああ大丈夫だよ！

もうすぐ湊は変わる！

出来なかったら洗脳よろしく」

おいちょっと待て！

俺が変わるとか洗脳とか言ってたか！？

「ふう〜っで何だ？」

「俺が変わるってどういう意味だ

それに洗脳って言葉が聞こえたんだけど」

「そりゃ〜聞こえるように言ったからな」

また殴ってやるっか……

「っで、質問に答える」

「あああれはお前の性格．．．．オタクが直るって意味で」

俺の性格変えるつもりなんだな

「俺の性格をどんな風にするって?」

「うらみな．．．．」

また殴ってやった

俺が裏と同じ性格になる!?

絶対嫌だからな

「お前最近暴力的になってきてないか?」

「誰のせいでしょう?」

「．．．．わからん

だが俺以外だろ?」

それは本気で言ってますか?

「．．．．今日はドッチボールで疲れたからもう寝る」

「どうしてスルーした!?!」

そう叫ぶ父さんを置いて部屋に戻った

部屋に入る前にノックする

もしかしたら薫が着替えているかも・・・・・・・・あるわけないが

返事が無いから部屋に入る

そのまま布団に入った瞬間・・・・・・・・

部屋にバスタオル姿の薫が入ってきた

「予想外だ・・・・・・・・」

その言葉も今の薫には届かない

顔を真っ赤にしてすばやく移動しようとしたら転倒

「だいじょう・・・・・・・・」

裸の薫が倒れている

気絶しているようだった

「忍者なんだから気絶するなよ」

と言いながら起こそうとした瞬間俺の手が止まる

「・・・・・・・・俺には無理だ」

俺はそう悟った

質問（後書き）

友達から「緋弾のARIA」I V ～IXまで貸して貰って上機嫌なたまちゃんです

だけど執筆に時間かかったせいで1冊も読めていないしかも今凄い眠い！（学校が始まって6時に起きれるように体が調整されてるよ）

明日は朝6時に執筆開始して予約投稿でもしとこうかなそれに俺の好きなサイトも巡回しないといけないし絵も描きたい

まあ明日中に全部終わらせるけどw

では終わります！

そいえば「緋弾のARIA」で好きなキャラは白雪・理子（ヤンデレ積極的）・ジャンヌ（？）です。

だけど明日描く絵はARIAってw

おっとそれました

また見ないと風穴空けるわよ！byアリア（のつもり）

気絶？した薫

どうする

と、取り合えずバスタオル掛けよう

上からバスタオルかけたただだから心配だな

. しょうがない、布団まで運ぶか

そう思つて薫を抱き抱える もちろん見てないぞ

「おわ！」

転んでしまった

しかも俺が押し倒している形に

「湊おふ」

最悪な奴に見られた

「お前がそこまで積極的だったとは思わなかった」

「誤解だぞ」

「これは早く母さんに知らせないと」

聞いてないな

「あ、父さん 母さんに連絡する前に一つ頼みがあるん

「だけど」

起きあがりながら父さんに言う
ついでに手には携帯

「ここに立ってくれないかな」

「ごうか？」

「バカだよあんた……………」

「いけ！」

「おわ！」

「やっぱりあんたは俺の父さんだよ」

俺は父さんを押しして俺がさっきなった状態を父さんで再現した
ついでに……………パシヤ！

「み、湊……………それをどうする気だ？」

「明らかに怯えている」

「母さんに送る」

「言うと同時に送信した」

「ちよつと家に帰るからお前はここにいる……………」

「わかった、頑張つて」

「お前が何もしなければ頑張る必要なかったのにな」

父さんが部屋を出る

それと同時にメールが届く

【父さんに伝えて。早く帰って来て 言いたい事があるの】

いかにも優しそうだがこのメールの向こうで母さんがどんな表情してるか気になった

「さて、薫を布団に入れて俺は寝るか」

湊が寝て30分後

薫はゆっくりと体を起こす

「まさか湊のお父さんにもやられると思わなかったけど……………」

ちらりと湊を見る

「布団までちゃんと運んでくれるなんて」

そう言つと考える

少しすると

「僕の裸見たんだよね？ 見てないのかな？」

どっちでもいいや……僕の隣で無防備に寝るなんて」

そう言いつつ湊の布団に向かう

「襲われても文句言えない……よね？」

その時湊は夢を見ていた

「ど、どうしてお前達は裸なんだ!？」

鈴、このえが迫ってくる

逃げようとしたら後ろから誰かに抱きつかれた

「か、薫!？」

「さあ湊さん楽しい時間ですよ」

「ご主人様大丈夫です

痛いのは私達だけですから」

「問題はそこじゃないから!」

もがいても薫は離してくれない

その間も鈴達はこっちに近づいている
だ、誰か助けて〜!

悪夢から目覚めて(前書き)

最近サブタイトルがてきとつになっ
てきてるような

悪夢から目覚めて

っは！

悪夢から目覚めると馬乗りになっている薫の姿がある
その姿にすぐ目をそらす

「ど、どうして裸何だ？」

「服着てないから」

「……………じゃあ何で馬乗りになってるんだ？」

「無防備に寝てるから襲おうかと」

「もう俺に寝るなっていいたいのか!？」

「違うよ！

だって寝て貰わないと襲えないよ」

もうこいつの近くで寝たくないよ……………

「もういい……………俺は父さんが使ってた部屋で寝るよ」

「こっちの方が安全だと思うよ」

「何故？」

「近くで寝てくれないと欲求不満で本当に襲っちゃうから」

結局薫から離れられないのかよ……………

「わかった

移動はしない……………だから降りろ」

しびしび降りると今度は布団の中に入ってきた

「……………どうしてはいつてくる？」

「降りろって言われたから」

「なら自分の布団に戻ってくれ」

えゝ何でゝって顔をこつちを見てくる

「じゃないと俺がそつちの布団行くぞ」

「ふゝん僕の布団で寝たいんだゝ

僕の臭いがするから？」

ちよつといじめてやろう

「早く布団に戻らないと」

「戻らないと？」

「さっきの画像を学校にばらまく」

そう言つと自分の布団に戻っていった

「そいえば最初から気絶は演技だったのか？」

「違うよ」

湊に押し倒されてるところで気づいた」

あの時か．．．．．

さて、また眠くなってきた所だし

あ、そうだ．．．．．携帯のロック完了と

「そうか．．．．．

俺は寝る、お休み薰」

「お休み」

朝起きると俺の携帯と格闘する薰がいた

「早速頑張ってるな」

「み、湊！？」

慌てて携帯を後ろに隠す薰
ばれてるのにな

「っで、パスワードわかったか？」

おもむろに携帯を前にだす

「パスワード2までわかったのか．．．．．凄いな」

俺の携帯はパスワードが3重になっている

．．．．．鈴達に携帯をいじられないようにな

「そ、そうかな？」

「ああ．．．．．鈴もこのえもパスワード2で止まったからな」

そう言うとパーっと顔が明るくなった

「さて、携帯を返してくれ」

薫から携帯を返されると俺はロックを解く

「さて、俺は着替えるから向こう向いててくれ」

と言ったのにこっちを見ている気がする

振り返ると顔を逸らす薫．．．．．わかりやすいな

「お前も早く着替えるよ」

そう言ってまた着替えを再開した

男との勝負1

着替え終えて学校に行き、授業を受け、帰って寝るまで薫は何もしてこなかった

そんな普通なら当たり前の生活が何十日も続く

薫もようやくわかってくれたようで今は普通の友達だ

「もうすぐ6月の終わりが」

6月30日.....

俺とあの男が戦う日だ

「勝てますか？」

「聞かなくてもわかるだろ」

勝てるはずがないんだ

俺では100%勝てない

「それでも湊には勝ってほしい」

「兄じゃなくて俺に勝ってほしいか？」

これも催眠の効果か？

それとも友達だからか？

「.....そう」

何かを考えた後にそう答えた

「でも俺は勝てない
勝てる要素がどこにもない」

そう言つと「でも」つと言いたそうな顔をする
しかし言葉はない

「……………さて」

俺は言つ

「どうせ勝てないんだ
最後まで戦つてやるさ」

少し薫が明るくなったような気がした

「俺は寝る」

そろそろ別れの挨拶も考えないといけないしな」

「……………そうだね」

今にも消えそうな弱々しい声
俺はその言葉が聞こえなかった

6月29日

この日俺のお別れ会があった

「短い間お世話になりました」

頭を下げる

ここにくるのも最後になるだろう
そう思うと何だが悲しいな

その後は日常と同じ
授業を受けて、帰るだけだ

とうとう6月30日がやってきた

『本当に大丈夫?』

(大丈夫だ

ばれないようにわざと負ければいいんだし)

『そんな単純に事が進めばいいけど……』

薫に連れられ着いた場所は森
丸くなっている木のない場所で戦うようだ

「逃げずによくきたな」

俺はそんな言葉を無視して辺りを見回す
このえがいた

『話しかけなくていいの?』

(別に話す事なんてない)

このえと最後になるだろう会話をしないうまま勝負が始まる

「行くぞ」

そう言うと素早い動きでこちらにくる
俺は反応できないまま腹を殴られた

「.....っ!」

息が少しの間だ出来なくなる
だがここで負けたら疑われる

「まだ立ち上がれるか」

そう言い俺のあらゆる場所を殴る
殴り殴り殴りつける
身体中が痛くて立てない

「これで終わりだ」

もう終わりか
そうあきらめた

攻撃が来ない、俺は前を見た

.このえが俺の前に立っていた

「これいじょうご主人様を傷つけるのは私が許しません！」

男との勝負2（前書き）

まさかこんなにシリアスになるなんて思わなかった
.....

男との勝負2

「ならお前が俺の嫁になれば何もしない」

その言葉にこのえは動揺する

そして少しながい沈黙の末

「わかりました」

その言葉に俺はビックリした

あそこまで嫌がっていたのにどうして!?

だが俺の頭ではもう答えが出ている……………だが認めたくない

「どうして」

俺の言葉にこのえが反応した

「どうしてあんなに嫌がっていたのに」

息を吸うこのえ

その動作が異様に遅く見えた

「ご主人様が傷つくのをもう見たくないの」

泣いていた

涙を流しながらも笑っている

そんな俺は気づかなかった

裏が出ようとしている事に……………

「さようなら」

男の方に歩いていく

「待てこのえ」

その言葉にこのえは立ち止まる

「かわいい女性がそんな顔するのは許せない」

「な、何だ．．．．．」

雰囲気が変わった」

「説明しよう」

いつの間にか父さんがいた

「湊は少し変だね

普通の時は頼りないが．．．．．」

そこまで笑いながら話してた父さんの口調が変わった
真剣になった

「裏になれば私でも勝てない」

また口調が戻る

「いや、私も母さんに習って睡眠学習をさせてたからな
っつい面白くて成川と太刀原の技を全部教えちゃってね
でも裏の時しか使えないのが残念なんだよな」

本気で悩む

「そんな事はいい
勝負の最中に話しかけるな」

「それでこそ湊だ！」

「うるさい奴はほつといて

お前はこのえを泣かせた．．．．それが罪だ」

その言葉と共に湊は走った

「お、俺だつてお前の親に勝てるんだ
貴様ごときに負けるか！」

勝負はすぐついた

湊が相手を気絶させて戦闘不能にし勝利

「さて、お嬢様」

「ふえ！？」

湊はこのえをお姫様抱っこする

「このままさらってしまおうか」

その言葉にこのえは過剰反応する

「さ、さささ、さぶつって……」

そのまま気絶してしまった

「しょうがないお嬢様だ」

気がつくと部屋にいた

「……確か勝負してたはずだが
考えていると薫が入ってきた」

「ちょうどいい、勝負はどっちが勝った!？」

「えっ!」

「早く教えてくれ」

「み、湊だよ」

まさか!?

俺に勝てる要素なんて無かったはずだ

「父さん俺に関して何か言ってたか？」

「確か催眠学習で技覚えたとかって……」

父さん、俺間違ってたよ

……親じゃなくて敵だったんだね

家に到着（前書き）

前回のシリアスどうだったたでしょう？

家に到着

それから数日．．．．．
父さんは手紙を残して消え

俺も帰ろうとしたがそんな身体じゃ無理だと止められた

『どうしてあんなに強いのに隠してたの？』

俺はやつと帰る許可を得て今は車

(俺だつて知らなかったんだよ)

『でも裏湊だつて？』

あれはかつこよかつたな』

(言うな！)

俺は裏を消したいんだ)

『このえちゃんにあんな事したのに？』

(何！？ 初耳だぞ！？)

『二人きりのベットで．．．．．』

(う、嘘だ！)

『よくわかつたね』

嘘かよ！

神様のくせに嘘つくな

『むっ！』

私の悪口考えたな！』

(. 半分あつてるかな)

その後神が何か言っていたが寝たふりをする

「ようやく帰ってきた」

目の前の光景が懐かしく思える
俺の住んでる寮だが

帰ってきた喜びを抑え部屋に向かう
抑えきれずに早足ですぐ家の前に着く

「ただいま」

そう言い家に入ると

「み、湊さん！」

俺に気づいた鈴が走ってくる

そして飛びついてきた!?

「危ないから飛ぶな!」

俺の言葉は遅くもう飛んだ後

抱きつかれた衝撃に負け後ろに倒れた

「やば．．．．．」

俺は頭を打った

気がつくとベットで寝ていた
ぶつけた痛みは残っていて頭が痛い

「大丈夫ですか!」

鈴が涙目でそう聞いてくる

「大丈夫だ」

あれ?

一瞬変な感覚がした．．．．．

「俺はもう少し寝てるから」

そう言いながら時計を見る

午後3時

「お前はお茶での飲んでゆっくりしてろ」

そう言うと安心したのか鈴は部屋を出ていく

俺は父さんの手紙を見てみる事にした

『湊へ

お前に二つ言っておく

裏が出る条件は女性の困っている時や泣いている時だ

だがそれも本心でなければ裏はでない

次は二つ目だ

父さんは裏の方が嬉しいぞ！』

(読むな！)

『だって面白そうな手紙なんだもん』

(さて、取りあえず父さんはさらに酷い目にあわせるとして……)

裏が出る条件がわかったのは嬉しいな)

俺も曖昧だったからな

嘘泣きでも裏が出ると思って怖かったし

『そうなんだ』

……私が本当に泣いたら裏になってくれる？』

(わからないよ

神が女性ならなるんじゃないか？

でも神様って性別あるのか？)

『私は女性．．．．．だと思ってるよ!』

思ってるだけか

というか自分の性別知らないのか？
そう聞こうとしたが鈴が入ってきた

鈴が来て

「ど、どうした？」

「いえ、湊さんの部屋に女性の気配がしたので……」

お前は何者だ!？」

「見ての通りいないぞ」

「でもそこにいる気がします」

……的確に神がいる場所当てんなよ

「気のせいだ、誰もいないよ」

「……そうですか」

やっと行ってくれた

『あの子凄いな!』

(確かにな)

『……私が今ここで脱いたらどうするっ?』

(……入?)

『だから』

(わかっただから言っな)

『じゃあ早く答えて』

(目を閉じる)

『本当に？ 盗み見たりしない？』

(俺はオタクなんだ

神とはいえ興味の対象には……………って話の途中で脱ぐな！)

布団に隠れようとした時

「湊さん」

鈴が扉をノックした

「どうした？」

「いえ……………今湊さんの前で女性が裸になろうとしてる気がしたので」

どうしてわかるんだよ

まあ言ったら危ないから言わないけど

「気のせいだ……………と言いたい」

神が隣にいる、しかも裸で

鈴が来たから脱ぐのやめただろって思ったら気にせず脱いでやがった

「……………入っていいですか？」

鈴の口調が変わった!?

……………何か怒ってないか？

「入っていいぞ」

入ってきてすぐ布団をめくりやがった!?
何もないとすみませんと返してくる

「……………私でもわからないなんて」

「人間なんだから誰でも」

「もしかして幽霊!？」

「聞いてねえな……………」

それから大変だった……………
塩をまこうとしたり、お被いしようとしたり

「落ち着いたか」

今俺は鈴を後ろから抱きしめ落ち着かせている
……………そうしないと俺が保たないんだ

「落ち着きました」

「なら良かった」

そう言い離れる

「じゃあ俺は寝るから」

色々あつて午後5時

今から寝たら何時に起きるかな？

『……………おきて』

うるさい

『起きてってばー!』

(何だ……………)

『玄関の前に誰がいるよ』

その言葉に警戒しながら扉の前に行く
そして……………

「流石か？」

「どつしてわかった!？」

「どつしてって言われてもな」

「……………ならいい

夏休みまで泊めてくれないか？」

「どうして？」

「姉さんが家に帰って来るんだ

あいつと二人きりだと何されるかわからないから泊めてくれ！」

「それは無理よ」

鈴が来て（後書き）

最近0時までには凄く眠くなる・・・

誤字脱字ありましたら教えてください

坂井が泊まる（前書き）

明日から「バカとオタクとハーレム生活」（2次創作）の方を中心に執筆します
なので投稿遅くなると思います。

坂井が泊まる

声のする方を見ると

「佳奈．．．．．何故ここに」

「ネットで買った発信機を付けたの」

発信機か．．．．．

お前も本当に大変だな流石

「そんなもの普通必要ないよね？」

「睦月と駆け落ちされたら困るから」

「しないよ!？」

姉弟で駆け落ちは普通ないよ!？」

そろそろ帰って貰うか

「あゝ流石」

「何？」

「帰ってくれ」

「この状況を見てそんな事言えるのか!？」

「．．．．．お前が止まるとお前の許嫁も泊まるからだ

俺の家にはもう部屋が一つしかない」

「私は流石と寝るから大丈夫」

「ちよつと待て．．．．．」

許嫁とか一緒に寝るとか聞こえたんだが」

「気のせいだ」

「気のせいじゃないよね!?!」

「ねえ流石？」

もう諦めたらどうなの?」

「何を?」

「貞操を」

「．．．．．」

涙目で見られても俺は助けられないぞ
それより聞かないと

「泊まるのか?」

「泊まります」

月島さん達とも仲良くなりたいですし」

「わかった」

おっと言っておかないと

「部屋で初体験はやめてくれ」

流石が一気に笑顔になった

「でも風呂ならいいぞ」

「わかりました」

「どうした？」

風呂入ってないなら入れよ？」

「湊……………貴様は悪魔か？」

「女に優しい天使だよ」

まあ嘘だが……………

「……………女に対して悪魔になってくれると助かる」

「それは無理だよ」

そんな事してみる

裏が出てくる可能性があるじゃないか！

「なら俺と一緒に風呂入ろうぜ湊！」

「……………俺にそんな趣味はない」

「俺もだよ!」

「諦めて常盤 坂井 佳奈さんと風呂入れよ」

「何で言い直した!？」

いや 黒いオーラが感じられたから

「じゃあその部屋使ってくれ

俺は自分の部屋にいるから」

『あなたも大変だね』

(そう思うなら助けてくれ)

『私には無理だよ

せいぜい近寄りたくなくなるようにするくらいしか出来ない』

(それを使った場合のデメリットは?)

『効果が切れた瞬間モテモテ』

(それも使えないか)

『君って本当に変だよな

普通モテモテって言われたら喜んで使うのに』

(そこらへんの奴と一緒にするな

俺が本当に好きなのは2次元なんだ)

『でも私の裸でドキドキしたりしてるよね?』

人間の本能なんだから仕方ないだろ

坂井が泊まる（後書き）

最近「ガンダムVSガンダムNEXT PLUS」が俺達の間で流行
ってる

．．．．皆強い（＾０＾；）

またまた紙による雑談コーナー

『今度は漢字間違えなの？』

え？ よくわからないんですが

『．．．．で今回の目的は？』

いや〜もうすぐまた薫が出ますが．．．．
そうすると紙さんの出番少なくなりそうですね〜

『大丈夫よ、作者は番外編考えてるらしいから．．．．
登場キャラそれぞれの過去を書くそうよ
今の所流石編と神編は決定らしいわ』

ほお〜それはそれは

でもどうせつまらないんでしょ？
シリアスだらけなんでしょ？

『そ、そこまで知らないわよ』

私の情報によると流石編は入学式から開始

神編は前に書いてあったヤンデレ（薫に技使用！）の事と後は秘

密（実は決まっていなくて言えない）
をやるらしい．．．．無駄な事を

『これで終わりだね
早く湊の所に行かないと』

では神さんでした〜

流石が泊まった次の朝

「起きて下さい」

「まだ眠い」

「じゃないと大変ですよ」

無視しよう

「本当に起きないんですよね？
なら寝てる間に私とひ」

「起きた！」

鈴の発言は恐ろしいな

「っで、何のようだよ」

折角の休日なんだ

「期末テストに向けての勉強です」

「……………向こうの高校でやってきた」

「範囲が違います」

「……………薫に勉強教えてもらった」

「女の子ですか？」

「そう．．．．．いや違う！」

や、やばい．．．．．

「2人つきりですか？」

何か凄い真つ黒なオーラが出てるぞ!？

「どうした湊．．．．．な、何だ佳奈？」

逃げたなあいつ

「いや違うぞ！」

父さんもいたよ！」

あ、少し薄くなった

「でも学校2人で行ったんですよね？」

「う．．．．．く、車だから仕方なかったんだ」

「．．．．．確かにそうですね」

向こうが少し透けて見えるくらい薄まった
命拾いしたよ．．．．．

「じゃあそろそろ流石の方に行くか」

「ここは話題を変えよう」

「わかりました」

「助けてくれ湊！」

何故か無理矢理服を脱がされそうになっている流石

「何やったんだ？」

「俺が知りたいよ!？」

「こっちに戻ってきたらこうだよ!」

「……取りあえず見苦しいからやめてくれ」

「助かつ……」

「やりたかったら寝るとき使った部屋でしてくれ」

「……てないよ!？」

「何で佳奈は俺を引きずって部屋へ連れ込もうとしてるの!？」

「大変だな、そんなに必死に抵抗して」

「諦める流石、お前はもう卒業するんだ」

「何を卒業するの!？」

「2次元? 2次元を卒業だよな? そうと言ってくれ!？」

目をそらしてみた

「何で目をそらすの!？」

俺の貞操の危機なの!？ 親友の家で卒業は聞いた事無いよ!？」

俺だって聞いた事無いよ

．．．．卒業は2次元を卒業するって意味で言ったんだけどな

「大丈夫だ、お前の許嫁は常識があると信じてる」

「いやいや普通ここまで見て佳奈が常識あるって思う人少ないと思うよ!？」

「気にするな」

「気になるよ!？」

「それより本気で抵抗しなくていいのか？ もうすぐ部屋だぞ?」

「わかってるよ」

こう見るとホラーだな

狂気の女性に引きずり込まれる男性の図．．．．怖いな

「なら生きて帰ってこいよ」

「死ぬ可能性あるの!？」

「ないから安心しろ」

流石が泊まった次の朝（後書き）

今日の出来事

友達と大富豪やって遊んだ、それにダウトも．．．．．
3人でやったからダウトはネタにしかならなかった（結果俺が勝てたけど）

というか出てくるキャラで誰が一番人気なのかな？

．．．．．詳しく美少女を書いてないから質問は無理か

スキャナー買わないと．．．．．じゃないといくら頑張っても鈴達描いても無駄になる

下級生のリベンジ 1

部屋に入って十分後に流石が戻ってきた
どうやら説得に成功したらしいな

「何したんだ？」

「思い出したくない」

「……………どんまい」

「それで？ お前達はいつ帰るんだ？」

「姉さんが帰るまで」

「……………まあ面白いからいいか」

ピンポン

「誰か来たようだな」

玄関の扉を開けると

「か、薫！？」

「そんなに驚いてどうしたの？」

「何でここに？
それとそいつは？」

「僕は湊に用があつて来たんだ
ここにいる人に道を聞いたらここまで案内してくれてね」

「そうか……何だ？」

その中学生くらいの子がフッフと笑っている
はつきり言つて怖い

「見つけました！ 太刀原 湊！」

っは？

見つけた？

「お前は誰だ？」

「白井 呉羽です！」

知らないな？

「っで、俺に何のようだ？」

「兄のリベンジを受けてもらいます！」

兄？ リベンジ？ なんだそれ？

「……リベンジって？」

「あなたは月島さんを賭けて私の兄と勝負したはずですよ！」

そんな事あったっけ？

．．．．．思い出した！ 確か名前は翔太だったっけか？

「あの後、兄は勝つためにアニメなどをずっと見ていました．．．．

．．．
私は兄に勝ってほしいから裏で支え続けた」

いい話のようだけど兄のやり方間違ってるよな？

問題作る人を変えたら良かったんじゃないか？

「今日やつとりベンジが出来ると言っていました！

あなたに逃げ道はありません！ 一緒に来て下さい！」

．．．．．チャンスだけど面倒くさい

というか帰ってきてから心休まる時間が少なくなってる

鈴にこのえ、神、薫、流石とその許嫁．．．．．疲れるな

「わかった行くよ

．．．．．っで？ 場所は？」

「学校です」

「太刀原先輩．．．．．よく逃げませんでしたね」

「まあな」

鈴がいなくなる可能性があるんだ

その可能性は捨てないよ、それにお前しつこそうだし

「……………勝負の前に一つ聞いていいですか？」

「……………いいぞ」

「月島 鈴先輩の事をどう思ってますか？」

何も言えない

無理矢理居座られて好きになられてるとしか思えない

それ以外の感情何て……………

「何とも思っていないんですか？」

それなのに好意だけは受け取ると？」

「それで……………あってるかもな」

下級生のリベンジ1（後書き）

あれだね 小説やアニメに影響されやすいね
. 下級生のリベンジが終わったら当分シリアス展開ない
かな？

あ、番外編はちゃんと書いてるからね！
さぼってなんかないんだから！

といった感じで今日は終了！ 明日は番外編を投稿します
基本流石視点です。 ダウトで負けた罰ゲームの内容や、湊が里に
行ってたときの1ヶ月間など書く予定です。 後は流石の日常とか

ではこれにてさようなら～
また明日も見てくださいいね

TVで
なぞなぞ

S
G
つて出てきた

出てきてすぐ「Steins;Gate」って思った俺はもう駄目
かも知れない、そんな気がする

下級生のリベンジ2

「それじゃあ月島先輩が可哀想じゃないか！」

確かにそうだ

だが鈴は何故か諦めない

それならこの下級生を使う

「……………なら俺に勝って奪って見ろ！」

こう言えば絶対に勝てないだろう

「その言葉後悔させてやる！」

「スタート！」

先生の合図で同時にテストを開始する

鈴達には言っていないからテストは普通だ

『相手の回答見てきてあげよっか？』

(そんな卑怯な真似はしない)

『どっしってっ』

(. 鈴は俺よりあいつと居た方が幸せになれると思う)

『 本気で言ってるの? 』

(そうだ)

『 なら私は答えを見に行つて教える 』

(どうしてそうなる)

『 あなたは勘違いしてる 鈴はあなたが好きなんだよ
湊がどんなに無視しようが冷たく扱おうが諦めない
だから鈴の手助けを私はする 』

(俺が違う答えを書いたら?)

『 わたしが一時的に乗っ取つて書く 』

どうしてそこまでする?

鈴がそこまで俺を好きなのはわかった
だけとお前が手助けする事に何の意味がある?

(. どうしてそこまでする)

『 私は神だよ 』

困っている人を助けるのは当たり前だよ 』

(. そうかい)

話す気ゼロなら無理には聞かないよ

「ストップ」

テストを回収、採点が始まる

「結果を発表します」

どうなる

「0点と100点でー」

終わったな、名前書き忘れたのか
神の頑張りを無にってしまったな

「ー太刀原 湊の勝利！」

何!?

どういう事だ?

「やっぱり俺には無理でした」

下級生がいきなり話始めた

「嫌がる月島先輩を無理矢理俺の物にする事が」

そう言った下級生は何だかっこ良かった
何て思うはずがない

「なら罰ゲームだ」

「・・・・・・・・そんなの聞いてませんよ!？」

「俺をここまで来させた罰だ

明日一日鈴とデートしてもらおう」

「それって俺にとって罰ゲー・・・・・・・・」

「と言っても女装でだが」

「・・・・・・・・ムですね」

「じゃあ明日10時に校門で待ってる」

「ちょっと待って下さい!

俺は女装の仕方なんてわかりませんよ!？」

「ここは無視しよう」

「聞こえてるはずですよね!？」

無視ですか? 自分で考えてこいって事ですか!？」

俺は何も聞こえないぞ

さて、鈴は家か? 早く言わないと

下級生のリベンジ2（後書き）

ね、眠い……………

今日応募しました（バイトの）

1週間以内に電話が来て、それで面接の日程の話になると思います
……………バイト始めたらもっと投稿遅くなるな

それとGC版パワプロ10やったらメモリーカードの容量が足りなくてセーブ出来なかった

明日友人からメモリーカード借りる予定

神と湊の雑談コーナー！

「っで？ どんな話すればいいんだ？」

『じゃあ質問』

湊は鈴、このえ、薫のうち付き合っと思ったら？』

「無回答で」

『なら無人島に行くとしたら誰と一緒にがいい？』

「……………薫かな？」

色々知ってそうだし」

『そうなんだ』

これで雑談コーナー終了です

「ナ〜よりナーでいいんじゃない？」

「．．．．．今度は太刀原 湊さんに心理テストをしてみたいと思います」

どんな結果がでるか楽しみだね

「俺のイメージ崩れなきゃいいんだが

．．．．．とその前にスルーしたたる！？」

大丈夫ツス

ではこれで後書き終わるツス

「．．．．．最近P S 3の面白いソフトが少ない
エクシリアは面白いかな？」

新たな問題

家に着いてから1時間後

「俺の勝ちだな

約束通り明日下級生とデートしてもらおう」

「わかりました

「……………一つ質問していいですか？」

「いいぞ」

「どうやって持っているカードを知ったんですか？」

俺と鈴、薫、このえの4人でダウトをやった

負けた者が明日下級生とデートという罰ゲーム付きで

「何の話だ？」

今回は神に協力してもらい鈴を最下位にできた

「とぼけないで下さい！」

私が宣言と違うカードを出したら全部ダウトと言いました！」

まずい……………さすがにやりすぎたか

「気のせいだろ」

「そう言っても無駄ですよ！」

『どうするの？』

この状態だと逃がしてくれないよ?』

(大丈夫だ)

「落ち着け鈴

それより明日の服とか選んだらどうだ?」

「明日はジャージで行くからいいです」

「駄目だろ!?!」

俺が『デート用の服はないのか?』と聞こうとしたらこのえが先に言った

「ならあの服を着たらどうですか?」

「あの服は湊さんとのデート以外絶対に着ないです」

宣言しやがったよ

さて、それより俺はあし………
携帯がなった

「何のようだ流石?」

「バカとテ トと召喚獣につ!の11話見てみるよ!

あ、それと夏休み海に行くことになったから」

「そうか、楽しんでこいよ」

そいえば最近海に行ってないな

「何言つてんだよ、お前も行くんだぞ？」

今何と？

「えー俺も海に行くとか聞こえたんだが」

「そつだぞ」

「……………俺は一言も行くとは言っていないぞ」

「なら俺だつてそつだよ」

どうする？

逃げる方法を考えるか！？

「湊さんそろそろ勉強始めますよ」

「お、俺は今から流石の家に……………」

「明後日テストなのに遊びになんて行きませんよね？」

「……………勉強しに行こうと思ったんだよ！」

危ないな……………

まあこれで流石と話す時間を作れるだろう

ピンポン

『はい』

流石の許嫁が出たか

「太刀原です」

『ちょっと待って下さい』

そう言っつてすぐに玄関の扉が開いた
家の上がってリビングに向かう

「……………どうした？」

リビングでは流石がYシャツにトランクスの格好で座っていた

「いや……………さっきバカテスの事話しただろ？」

そしたら佳奈が興味持って見たんだよ

「それで？」

「見た話でキャラが今の俺と同じ格好になったんだ」

新たな問題（後書き）

湊の心理テストコーナー

「ナーにしろよ!」

そんな事より始まりました湊の心理テスト

『楽しみだね』

「俺は嫌な予感しかしないが」

まず最初に.....

今日のおやつはあんこのぎっしりつまった「たいやき」です。あなたは最初にどの部分から食べますか？

A：頭から B：背中から C：お腹から D：しっぽから

「皆も参加してみてくださいね!」

逃げないで下さい

見てる人が参加するのはいいですが

『早く 早く』

「.....耳元で答えていいか？」

じいじいじいじい

「.....」

へえ、あなたはその答えですか？

「これで終わりだ！」

終了また次話でお会いしましょう！」

『私聞いてないよ、教えてよ』

さて、今回の心理テストの結果は次回

．．．．．早く知りたいならメッセージ送ります
まあ湊がどの答えにしたかも次回

友人に島田美波のストラップ貰った、(^^)／

海に行かない方法(前書き)

10万PV突破!

今後もこの調子で行けたらいいです

海に行かない方法

「それで？」

「この格好に無理矢理させられた」

「……………どんまい」

俺から言える事はこれだけだ

「さて、勉強始めましょうか」

「じゃあ俺と湊はこっちで勉強するから」

「それは駄目、こっちで一緒に勉強するの」

常盤さんがそう言った

その言葉に女子が賛成

おかげで勉強しながら目でのやりとり

（勉強はいいとして海の件だ、どうする？）

（仮病とかは？）

（お前は馬鹿か？

それでも無理矢理海に連れて行かれるだろう）

（湊の言うとおりだな

なら用事とかはどうだ？）

(無理矢理聞き出されるだろうよ)

(これも駄目か)

(.....一つだけ逃げる方法があるかも知れない)

(どうやってだ?)

(薫の実家.....忍者の里に逃げるんだ)

幸い薫はこっちに来ている

後はあの男が協力してくれればいいだけだ

(それで行こう!

つで、決行はいつだ?)

(終業式から二週間以内だ

海の仕度をして監視の目が緩い時に逃げる)

(了解)

「湊さん?」

「な、何だ?」

「さっきから手が止まっていますけどわからないんですか?」

「いや、大丈夫だ」

「わからなかった聞いて下さいね？
もし赤点取ったら補習で海に行けなくなっちゃいますから」

「わかった．．．．ん？」

補習で海に行けなくなる．．．．チャンス！？

「流石．．．．．」

小さな声で流石を呼ぶ

（どうした？）

（計画変更．．．．赤点取るぞ）

（何でだ？）

（馬鹿！ 赤点取れば夏休みに補習で海に行かなくてすむんだぞ！）

（それは本当か！？）

（本当だ、だから赤点取るぞ！）

（わかった）

流石との作戦を終えた次の日
今日は鈴が下級生とデートする日

『あなたはいかないの?』

(めんどくさいから行かない)

『なら薫と二人きりだね』

(.それは危ない気もするが俺は行かない)

いざとなれば催眠で無理だ
使えば俺が終わる

『じゃあ私も見に行ってくるから』

そう言うと壁をすり抜け鈴達のところに向かった
ちなみにこのえと流石、常盤さんも見に行っている

「さて、薫は今どうしてるかな」

部屋を出ると台所から声が聞こえる

「これが忍者の里に伝わる惚れ薬」

.その惚れ薬をどうするつもりですか薫さん?

海に行かない方法（後書き）

さて、まず心理テストの結果から書きましょう

C：浮気度100%

欲望にストレートなタイプ

チャンスがあれば浮気をしてしまい開き直ってしまう性格

B：ばれなければという思いが強く、浮気度高め

A：恋人がいれば異性に興味がなくなる

D：浮気に興味が無く、恋人に対して一途。浮気はいけない事と認識している人

ちなみに湊はDを選択

でも浮気に興味がなくても周りは……………

See you again これであってる？

怖いから日本語で……………これで後書き終了！

フラグ（前書き）

次のヒロイン決定！

「ようやく私の出番ですわね」

これでもいいキャラを予想出来るかな？

フラグ

そんな事を思っていると

「お昼にはこの薬を使って……………」

このままだと俺が危ないよな……………ならば……は……

「薫、ちよつと出かけてくる」

薫の所に行く

こつ言えばお昼を食べずに

「お昼には『必ず』戻ってきてよ」

逃げられるわけないよね

しかも必ずの部分強調したし

「いや、でもお昼は外で……」

「帰ってくるよね？」

僕は手料理作って待ってるからね？」

「……………はい」

しょうがないよ、だって目が本気だった

もし帰って来なかったら命に関わるだろう

どうする？

鈴の様子でも見に行くか？

いやいや、その前に惚れ薬をどうにかしないと

「どうしてこうなる」

今俺はこのえ達と共に鈴の尾行？ ストーカー？ を行っている

それは俺がどうしようかわからないから実家に帰ろうとしたときに

「ご主人様も来たんですね！」

と、このえ達に捕まりストーカーをする羽目に

俺は惚れ薬の対処方法を母さんに教えてもらいに行きたかったのに

「っで、あの二人は湊の目から見てどう見える？」

「女装趣味の変態と美少女」

「．．．．．確かに」

納得しちゃったよ

女装は俺のせいなのにな

「というか流石．．．．．鈴のあの服装は何だ？」

俺にはファッションとかそういう物には興味ない。 だけどな．．．

．．．

「普通の服だぞ？」

「お前はおばさんが着るような服をデートに着るあいつを変に思わないのか？」

おばさんが着るような服は別にいい
デートで着てくるとか色々勇気ありすぎだろ

「ジャージよりはいいんじゃないか？」

「……………どっちも同じだろ」

「安心して下さい！」

ご主人様とのデートではかわいい服です」

……………何を安心すればいい？

というかデートする事前提で話してないか？

「このえはデートの時の服装は何にするんだ？」

ここは話を逸らそう

「メイド服です」

「まあ確かにご主人様って言われるなら服装もそっちの方がいいよ
な」

思った事をそのまま口に出す

「・・・・・・・・ちよつと用事思い出したので帰ります」

そう言つて帰つていった

・・・・・・・・俺ひよつとしてフラグ作つた？

家に帰つたらメイド服のこのえが・・・・・・・・最悪だ（精神的に）

ふと時計を見ると・・・・・・・・12時30分

「さ、流石・・・・・・・・俺、帰るわ」

「何かあつたのか？ 声震えてるぞ」

フラグ（後書き）

眠い。。。。

予約投稿出来ないから辛い。。。

やり方を知らないのかP S 3だと出来ないのか。。。どっちだ!？

そして最近寒くなってきましたね

暑いのと寒いのがどっちがいいんだろう？

寒いと手が悴んでゲームが出来ない+夜寒くて眠れない

暑いとゲームに集中出来ない+夜暑くて眠れない

どっちもどっちだな

さて、後書き終了!

また見て下さいね。 バイビク by白石 稔?

協力関係？（前書き）

今日で掲載から4ヶ月!!!

なのに今だ夏休みにも入っていないという事実・・・

協力関係？

「いや、何でもない」

1時までには帰れば許して貰えるだろ
早めに帰らないと

「じゃあ俺は帰るわ」

「ああわかった、また明日」

「じゃあな」

走って家に向かう
その途中運悪く信号が赤になった

「早くしてくれ」

うずうずしながら青になるのを待つ
しかし目の前に金持ちが乗るような長い車が止まった

「青になったな」

一歩歩いた途端目の前の車のドアがあいた
そして出てくる連中に囲まれる俺

「な、何だよ」

内心ビクビクしながらそう言う

「話があるから来てもらおうか」

「俺はないから行かないぞ」

「なら力づくで来て貰う」

いつの間にか後ろにいた奴に首を殴られる
殴られると抵抗できずに視界が真っ黒になった

目を覚ますと豪華な天井があつた

「ようやく起きましたわ」

お嬢様と思われる人が勝手に喋り出す

「あなたに一つ提案がありますの」

やっと少し頭が起きてきた

「私と恋人になりなさい」

その言葉でやっと起きてきた頭がパニックになった

「・・・・・・・・夢か」

「夢じゃなくてよー!」

俺の言葉にすぐに反応する

「うるさい

ここは何処だ?」

「私に向かってうるさいとは何ですの!??

．．．．．まあいいですわ。ここは私の家ですわ

「つで、俺は何故ここにいる?」

「さっき申し上げた事を伝えるためにここにお連れしましたの」

お連れって．．．．．誘拐の間違えじゃないのか?

それにさっきの為だけにここまで連れてくるか?

「．．．．．まあいい

それで? 提案がなんだって?」

「だから私と恋人に．．．．．」

「冗談はいいから早く用件を言ってくれ」

「なら、いいでしょう

あなたの願いを協力して差し上げますわ」

「俺の．．．．．願ひ?」

「あなたは月島 鈴他2名を家から追い出したい。そうですわね

「？」

何故それを……………

「どうやってそれを知ったんだ？」

「それは秘密ですわ」

「ならお前のメリットは何だ？」

「それも秘密ですわ」

こいつの考えている事がわからない
だが協力してくれるなら協力して貰おうじゃないか

「よくわからない点はあるがいいだろう」

「なら交渉成立ですわね」

「そうだ……………そいえば名前を聞いてなかったな」

「私の名前は九条くじょう 麗華れいかですわ」

「なら九条、よろしくな」

そう言って手を前に出す

協力関係？（後書き）

60話から章付けます

何か59つて中途半端で章は付けたくないです

パソコン買うのがいつになるかわからないです

.....このまま買わないなんて事も？

書く事が無くなったので後書き終了

夜中（前書き）

書くの忘れてました

九条は私と書いて「わたくし」と読みます（まあわたしでも変わら
ないような気がするけど）

それと次話は人物紹介をする予定です

夜中

俺の手を九条はずっと見つめている

「どうした？」

「な、なんでもありませんわ！
私と握手できる事を光栄に思いなさい！」

我に返ったと思っただらあわてて握手をする
九条の顔が何故か赤くなつたのは黙っておこう
異性との交流が少ないだけだろうし

「じゃあ俺は帰るから」

「．．．．．もう」

「ん？」

「もう夜ですし、泊まっていく事をオススメしますわ」

「いや、でも．．．．．へ？」

一瞬窓を見て何か発見

「ははは．．．．．」

俺を囲った奴らの一人がベランダに居た
手にはスケッチブックらしきものとペン

【お嬢様を悲しませたら殺す】

はあ．．．．．泊まるしかないのか

【泊まっても殺す】

「ならどうしろって言うんだよ！」

「ど、どうかしましたの!？」

てか気づいてなかったのか九条は．．．．．

「ちょっと考えさせて欲しいな」

「わ、わかりましたわ」

そう言ってまた窓を見る

【自分で考える】

考えろって．．．．．

【ちなみにお嬢様を悲しませた場合、俺がお前を殺しに行く。 泊

まった場合全員で殺しに行く】

ならこのまま帰るわ

「九条、やっぱり俺か．．．．．」

俺は気づいてしまった

扉の顔一つ入りそうな穴でこちらを覗いてる人

「く、九条……………あれ……………」

その方向に指を指すと九条がそつちを向く

「気にしない事をオススメしますわ。ただの変態ですので」

「お父さんを変態呼ばわりは酷いよ」

こつちにも普通に聞こえるくらい大きな声で、しかも泣きながらそう言ったへんた……………九条のお父さん

「さて、そろそろ遅いですし寝ましょうか」

「寝ましようかって今何時だ？」

「午前1時です」

「……………へ？」

「聞こえませんでしたの？」

「いや、聞こえてた」

午前1時

そんな遅くまで女子と一緒に、さらに鈴達に連絡をしていない 死刑確定！

そして薫の手料理食べなかった 元が人だとわからない状態にされ

る俺

「俺の人生終わった．．．．．短かった」

ならこのままここに隠れさせて貰えばいいんじゃない？
ここなら絶対にはれないだろうし！

『やっと見つけた』

（．．．．．最悪なタイミングで来たなお前）

俺の希望を返せ！

『じゃあ私はここにいる事を鈴達に知らせてくるから』

（ちょっと待て！

鈴達にお前は見えなйдらる？）

これが最後の砦だ．．．．．

夜中（後書き）

さて、今更ですが「転生先は」（名前変更予定）は設定変更の上、執筆を始めます

そして感想で書いて頂いた「ヤンデレ娘」と「俺TUEEE!」はオタクと美少女達（めんどくさいので今後オタクって書きます）で出てきます

「ツンデレ幼なじみ」は「転生先は」で出てきます

さて、本格的に「転生（ry）」の設定を決めていかないと遅くても3日以内には投稿したいな

人物紹介＋雑談？

太刀原 湊 身長168

月島 鈴、太刀原 このえ、成川 このえと一緒に住んでいる
最近ギャルゲーやエロゲーをやっていない

「催眠」が使える（欠点だらけなので湊はあまり使いたがらない）

月島 鈴 身長156

校内美少女ランキング上位の美少女

湊のオタクを直す発言の事を忘れている、しかし湊へのアタックが
間接的にオタクを直していつてる？

太刀原 このえ 身長155

湊のいとこ

昔、湊と結婚の約束をしている

鈴の事は、湊を狙うライバルと見ている

しかし最近は友情も芽生えてきて……

成川 薫 身長160

男物の服をきれば男子に見えるほど中性的な顔立ちをしている

湊の親父の策略にはまった湊の「催眠」によって湊の事を好きにな
ってしまった

九条 麗華 身長167

お嬢様、それに変態の親父とボディーガードらしき人物が複数いる
事以外湊はまだ知らない

坂井 流石 身長165

姉の坂井 睦月、常盤 佳奈と一緒に住んでいる

そして睦月と佳奈の喧嘩を止められるのは流石だけである

坂井 睦月 身長167 19歳

流石の姉。ブラコン

罰ゲームなどがあるたびに部屋へ流石を連れ込んでいる

佳奈の事が嫌い

常盤 佳奈 身長164

流石の許嫁

ツインテールが特徴

睦月の事が嫌い

「って事で人物紹介終わりだな」

「随分簡単すぎないか湊？」

「作者に言ってくれ」

「もっと詳しく書けよ、練習したんだろ？」

作：流石よ．．．．．どうしても越えられない壁って物があるだろ？

「壁に当たるの早すぎだろ！？」

作：うるさい！ 俺は今日買ってきたバカテス6・5を読むからもう帰る！

「おい作者．．．．．行っちゃったよ。 どうする湊？」

「どうするも何もこれで終わらせる訳には行かないだろ？」

「なら面白い話でもしてくれよ」

「作者引っ張りだしてくる」

俺が街を歩いていると前から友達がきた

その友達は隣の女子と楽しそうに話していた

俺はとつさに隠れた

そして隣に歩いてた子は誰？と学校で聞いたら知らないと答えてきた
まあ当たり前だろ。「夢」の中で出てきたんだから

「流石、糸と針」

作：何する気だ!?

「その面白くない話をしたお前の口を塞ぐ」

作：ごめんなさい!もう2度としませんから!

「なら面白い話しろ」

作：お願いだから家に帰して〜!!!

人物紹介＋雑談？（後書き）

本編の話はさておき三連休での体験

お爺ちゃんが足を挫いてしまい俺が寺の手伝いに行くことになった
自分の家からお爺ちゃんの家まで電車で1時間かかる、まあそこは
どうでもいい

日曜に墓にお供えしてある花の片付け、萎れていたりするものを全
部捨てる

そして花を片付けていると

「.....」とうがらしを発見して絶句

お爺ちゃん曰くきれいだから花の代わりにお供えしてるんだよ

そっから20 30分後

「.....」トマトを見つけて絶句

お爺ちゃん曰くきれいだから（ry

そして次の日.....まあ今日の朝ですね

お供えしてある飲み物類の片付け

お酒があると持ってみると

「.....」中にGが入っていて絶句

さらにバケツの中身がお酒やお茶やらの集合体で奇妙な臭いを . . .

尊敬するよ爺ちゃん

気持ち悪い話になりましたね

ここは話を変えましょう

遊戯王タッグフォース6なかなか面白いです

今「レイン 恵」攻略中

夜中2

『そういえばそうだったね
普通に話したから忘れてたよ』

(. 今何と?)

『だから普通に話してたから忘れてたって』

(. 鈴達にお前の姿は見えるのか?)

『見えないよ』

(ならどつちって)

「聞いてますの?」

「へ? あ いや、聞いてなかった」

「まったく なぜ生命の危機になっているのか聞きましたの」

「え〜と お前のせい」

間違っていないはずだ

こいつのせいで薫の料理を食べることが出来なくなっただから
そのせいで俺の命はもうすぐ終わる

「私が何をしましたの?」

まあ普通わからないよな

「もういいよ

それより帰る、お前ともう会うことは無いだろう」

「そんなに覚悟を決めてどうしましたの……」

九条がちよっとひいてるが気にしない

その時、俺の携帯がなった

「もしもし」

「もしもし、湊か？」

「どうした？」

「今どこにいるんだ？」

「……あるお嬢様の家」

「九条の家か」

こう言っただけで誰の家にいるのかわかるなんて有名だな九条は

「じゃあ今から月島さん達が向かうから」

「……何を言ってるんだ流石は、鈴達が向かってきても無駄だろ」

他人の家だし

「それはどうかな？」

そう言った直後部屋がノックされる

「お嬢様、お客様がお見えになっております」

「通しなさい」

「いやいやいやおかしいだろ！」

「大きな声を出してどうしましたの？」

そう簡単に通すとか普通ないだろ

それにもう夜中だぞ

ここはびしっと言ってやろう！

「ふ．．．．．いや、何でもない」

執事に睨まれた．．．．．

変な事言っなとかそっういう目だ

「変な人ですわね」

「．．．．．そっかもな」

もう無理だ

寮に帰りたくなってきた

「では私はお客様をお出迎えしてきますわ」

そう言うと部屋から九条が出ていった

(さて、さっきの話の続きだが)

『じゃね〜』

(聞けよ!)

神もどっかに行ってしまった

「さて、逃げるか」

「逃げれると思うなぞ」

「お前誰だ」

いつの間にかいた黒服の男に言う

「俺は執事の黒宮くろみや 琢磨たくまだ。覚えとけぞ」

初対面でザコ呼ばわりか、ならこつちも答えてやらないと

「覚えとくよクズ」

これでいい

「いい度胸だなぞコ、殺されたいか？」

夜中2（後書き）

友達に「はがない（僕は友達が少ない）」借りて読んで執筆してない日々が続いている今日このごろ、やっと投稿出来るという安堵と共にまた「はがない」読もうという気分になっている

何てよくわからない話は置いてくとして……
もうすぐテストでブルーな気持ちになっている訳です

……まあ友達に勉強しない？と言ったら驚かれましたけど
(、・、・、)

今期アニメはシャナ、はがない、ベン・トー、ましろ色、イカ娘を見る予定

特に「シャナ」と「はがない」は期待大

とまあこんな感じで今回の後書きは終了！じゃね

三途の川？（前書き）

前回の投稿から日が経ってしまいました
なので湊のキャラがちょっと違うかも・・・

三途の川？

「遠慮しとくよ」

「ふん．．．．．まあいい、ついてこい」

「．．．．．拒否は？」

「逃げたくなきゃついてこなければいいさぞ」

逃がしてくれるのか、ならついていくか

「なら着いていく」

「わかればいいさ」

それから1分

「ここに入れザコ」

案内された部屋

そこに入る事を体が拒んでいた

「早く入れザコ」

蹴られて無理矢理入らされた

そして目の前の光景

「ああ．．．．．ようやくわかった」

ここに入るのを拒んでた理由はこれだ
．．．．．目の前に鈴達がいる

「太刀原さんこんばんは」

部屋は広い、しかし扉は後ろの一つだけ、他は窓しかない
そして俺を見つけた鈴が他人のような言葉で言った
やべえ．．．．．絶対怒ってるよ

「こんばんは、では俺は家に帰るので」

そのままスルー．．．．．されるわけないよね
後ろを向くと薫が俺の前に立っていた

「どうして逃げるんですか太刀原さん？」

「お、俺は帰るだけです」

鈴の方に向き直してそう言う
怖い．．．．．何かはわからないけど凄く怖い!?

「私達とお話してから帰りましょうよ」

本当に怖い!

無表情で淡々と喋られると凄い怖い!

「それはちよつと遠慮します．．．．．」

そう言って帰ろうと後ろを向く

「……………薰？」

目の前に危険なオーラを放つ薰がいる

「ハハハ……………ダツシュ！」

横に抜けて扉を目指す

しかしドアノブにもう少しで届くという所視界が消えた

「ここは何処だ？」

目の前には川、そしてその川の向こうの人達は凄く楽しそうに笑っている

「こっちへおいで」

俺に気づいた一人が手招きで誘ってくる

「そっちは楽しいですか？」

「こっちは樂園じゃよ」

本当に笑顔そつで笑っている

【そっちには行くなよ】

不意にどこからか声が聞こえてきた

「誰だ!?!」

【俺は太刀原 伊織 いおり じゃあ伝える事は伝えたからな】

「おい待て! 太刀原ってどういう事だ!」

その質問の返答はなかった

「み……………など……………さん」

声がする

そしてその声に導かれるまま……………

「湊さん起きて下さい!」

起きると心配そうな鈴の顔が目の前あった

「よかった!」

余程嬉しかったのか鈴は俺に抱きついてくる

それで落ち着いたのか気づいたら声に出していた

「太刀原 伊織って一体誰だ?」

三途の川？（後書き）

今日、そして明日も文化祭の準備・・・疲れる
でも今日面白いの見つけた

<http://mamesoku.com/archives/1931292.html>

感想：アドンに笑った

さて、これで後書き終了！

新たな出来事（前書き）

次話から過去編開始です

伊織とは一体誰なのか、湊との関係は？などわかります

新たな出来事

「い、今なんて言ったの？」

あれ？ 薫が動揺してる？

「だから太刀原 伊織って」

そう言つと薫は走つてどこかに行った

「おい薫!？」

一体どうしたんだ？

伊織つて名前を聞いた瞬間血相変えて……………

「起きたなら早く着替えろザ」

入れ替わりで執事がきた

そして制服を放り投げるとすぐどこかに行った

「というかこれ俺の制服……………」

……………気にせずぱつぱと着替えよう

そして服を脱いだのを見計らつたように

「太刀原さんはいるかしら？」

九条が入ってきた

「く、九条!？」

九条は俺の姿を見ると顔を赤くし

「着替え中なら早く言いなさい!」

「無理言うな!」

「と、取り合えず一緒に来ていただけるかしら?」

「わかったよ」

大急ぎで着替えて九条に着いていく

家の外にでると目の前には高級そうな車

「これに乗るのか?」

「そうですね」

車に乗り込むとすでに鈴達が座っていた

「湊さんこっちに来て下さい」

言われるがままに向かう

「少しの間眠って下さいね」

ハンカチで口と鼻を塞がれる

そして眠気に勝てず俺の視界は真っ暗になった

「やっと起きたか、早く行くぞザ」

目が覚めると執事がいた

そして状況の説明をされないまま連れて行かれる

「無理じゃ!」

「そこをお願いできないかしら?」

「無理なものは無理じゃ!

使わせられんのじゃ!」

「理由を聞こうかしら?」

「あれを最初に使わせる人はもう決めているのじゃ!」

「.....その人ってこの人の事かしら?」

着いた瞬間視線が集まってきた

「何故.....お前がここにいるのじゃ.....」

「.....え?」

俺の姿を見て驚いている少女

だが俺はこんな子は知らないぞ

「……………ちよつどいい」

ボソつと少女が呟く

「この私がつつた大発明を最初はお前に使わせてやるのじゃ！」

「……………大発明？」

「そこに座るのじゃ！」

俺の質問を無視し、有無を言わずイスに座らされる

「では作動なのじゃ！」

その言葉を最後に真つ暗になった

目を開けると目の前に俺が倒れている

少しすると目を開けた

「ここは……………そうか、あいつには感謝しなきゃな」

そう言うつとすぐ立ち上がり常人とは思えない早さで走る
当然俺の体は引つ張られた

新たな出来事（後書き）

最近色々あって執筆する時間が作れなくなってきたたまちゃんです

次いつ投稿出来るかわかりませんが
でも少しでも開いた時間に地道に執筆していきます

さて、次は笑える話を一つ……………

PSP（改造）がバグりました……………orz

症状は……………

何の前触れもなく操作が出来なくなる（画面は動いている）

その数秒後電源が消える。以上です

バージョンアップしても本体の初期化（両方とも改造してくれた友人にやってみると言われ）しても直らない（笑）

もうこのPSP終わったな（笑）

以上、俺の不幸でした

過去1（前書き）

よくわからない、おかしくない？って思う部分があるかも

過去1

『あぶねえええ！』

体を上下左右に移動させながら木を避ける

『自動スクロールで動いてる最中のキャラはこんな気持ちなんだな』
感情の無いゲームキャラに対して同情を覚えてしまった
そして数分後に目的地についたのか急に止まった

「やっと着いたな」

俺（ここではアイツと呼ばつ）が村を見てそう言う

「よし．．．．．ん？」

アイツは行こうとするが何かに気づきその動きを止める

「あれは．．．．．俺！？ いや、おかしくないか、ここは過去
なんだし」

『へへあれがコイツか』

そいつは同じ歳くらいの女の子に話しかけられて困っている様子だ
った

「かわらねえな．．．．．つま、過去だから当たり前か」

『あれは．．．．．鈴に似てるな？　つま、あの程度で困ってる
ようじゃあ先が思いやられるな』

「確かあれは家の両親に会わせられるところだったな」

何だろう．．．．．この気持ち．．．．．

「もうすぐあれが．．．．．絶対に過去を変えてやる!」

さつきから過去過去うつるせえな〜って過去．．．．．?

『．．．．．何だと〜〜!!!!』

この俺の叫びは誰の耳にも届かなかった

「よろしくお願いします」

俺の親父に似てる人に頭を下げているアイツ

さて、ここまでを簡単に説明しよう

敵と疑われたアイツは向かってくる奴を返り討ちにした、しかし俺
の親父似の人に負けた（わざと負けたような気がする）
強さに惚れたと言って弟子にして欲しいと言う

数日間毎日頭を下げたお陰で弟子にして貰って今に至る

「では私の息子を守ってやってくれ」

「わかりました!」

その日から数日

「どうして奴は現れない！」

怒りで壁を殴る

「湊さん．．．．．どうしましたか」

小さいアイツが心配してアイツに話しかける
アイツは小さいアイツの頭に手を置いて

「大丈夫だ、心配するな」

と優しく言っていた

しかしアイツは何かに気づいたようで、顔を真っ青にした

「ま．．．．．さか．．．．．」

『おい、どうした!?!』

聞こえない事はわかっていた．．．．．がとっさにそう言っていた

「だ、誰だお前．．．．．」

『な．．．．．』

俺の声がアイツに届いていた、しかも姿も見えている

声を聞こえるとわかるとすぐに事情の悦名を求めた
俺の事はそっちが話したら話すと言って

「わかった、話そう。この先に待っている出来事を」

過去1（後書き）

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/102974/blogkey/295647/>

TPPについて（竜王&竜姫さんの活動報告に行きます）

二次創作の危機！？……是非とも署名を——（・）——

さて、最近「C3・キューブ」見るよとよく言われるたまちゃんです

俺だって見たいよ……でも時間が……

いつもだったらPSPで見れてたのに壊れて……（・）>——

<（・）ビエエン

このへんで終了！

また見て下さいね！

過去2

小さな頃の俺（伊織）は女性に対して恐怖心を持っていた
それはある教えが原因だが今は言わない

俺が森に散歩に出かけた時誰かが襲われていた．．．．．それは
市いちだった

折角いい気分になってきた所を邪魔された腹いせに襲っている奴を
襲った

．．．．．それが俺の生涯忘れる事のない出来事の始まりだった

「どうしてついてくる」

「好きだから」

「．．．．．俺は嫌いだから向こう行け」

「やだ」

俺が助けたその日から市は俺につきまとうようになった

当然俺は恐怖心の影響もあり冷たくするが市はそれでもつきまとった

「お疲れだね」

「．．．．．そうだな」

「じゃあ一緒にお風呂に入らない？」

「何でそうなるんだ！」

俺は次第に市に心を許しつつあった

そこに俺の今後消えることのない復讐を誓った奴が来る

「よろしく」

「よろしくお願いします」

「俺は．．．．．湊と呼んでくれ」

そう、湊と名乗る男だ

俺より強く、色々教えてくれる湊に俺はすぐ心を許した

そしてある日、湊がどうしてか壁を殴っていた

「湊さん．．．．．どうかしましたか」

俺がそういうとすぐ怒りを消し、俺の頭に手を乗せ優しく撫でてくれた

「大丈夫だ、心配するな」

そしてここで気づいた

ここにいる湊と名乗る人物は．．．．．未来の俺だと

『．．．．．』

俺は考えていた

ならどうして市を．．．．．？

「話を続けるぞ」

『うん』

その日から湊は俺にあまり会わなくなった
どうしてそうなったのか……心配で一番最初に相談したの
は市だった

「そうなんだ」

「うん」

「なら私が聞いてきてあげる」

「ありがとう」

俺の中で市への気持ちが強くなっていたのを俺は覚えている
しかし……その思いが市に届く事はなかった

「敵襲!!!!」

その言葉を聞いた瞬間湊の所に向かった市を探した
湊が市を守ってくれる……そう信じてはいたがそれでも不
安だった

走っている時に俺はある場所を思い出す
そこに向かってひたすら走った……そして見てしまった

<市のそばで血のついた刃物を持っている湊の姿を>

それから覚えていない

気がついたら布団にいたから

しかしあの光景だけはしっかり覚えている

そしてその日、俺は誓った

<市を殺した湊を必ず殺すと>

過去2（後書き）

本編書いてて泣きそうになったたまちゃんです（・・、）
俺の文章力でどこまで伝わるかわかりませんが・・・・・

さて、今日は鈴と湊にきてもらいました

み「何だが悲しい話だな」

り「そうですね・・・・・湊さんは伊織さんの気持ちどう思いますか？」

み「可哀想だな・・・・・伝えられない気持ちか・・・・・」

り「湊さんも早く気づかないと伊織さんみたくなりませよ」

み「何の事だ？」

り「もういいです！・・・・・でもいつか湊さんから好きだつて言っしてほしいな」

み「え？ もういいですからの後何か言ったか？」

り「言ってますんよ」

さて、これで後書きは終わりです
次話も見せてね〜

過去3（前書き）

相変わらずの戦闘描写の無さ 8
- 8 ;

過去3

あの話から数日．．．．伊織は小さいコイツに会っていない
どうなるのか正確に知るために記憶と同じ行動と言っていたが正直
不安だ

「湊さんどうしたんだろ．．．．俺のせいなのかな？」

俺の事を話そうとしたが必要無いと言われた
正直俺もそっちの方がいい

「明日市に相談しよう」

ついに明日か．．．．

明日どうなったかわかる

「今日だな．．．．さて、あの場所に向かうか」

あの場所とはコイツの一番好きな場所であり．．．．市の死ん
だ場所だ

『お前大丈夫か？』

「何が？」

『だってかなし．．．いや、何でもない』

「変な奴だな」

そう笑っている

だが悲しそうな目をしているのを見てしまった

もししくじればまた好きな人の死ぬ場面を見る事になる

この状況

『どうにも出来ないのかな．．．』

「何か言ったか？」

『何も』

それから数分後にその場所に到着した

森の中にある川のすぐそばだ

「来るのは何百年ぶりか．．．」

それから数分間．．．コイツは一言も喋らずに下を向いて何かを考えていた

「あの．．．湊さん」

「どうした」

「最近湊さんが来ないって心配してるので会ってあげてほしくて」

「そうか．．．お前は伊織とどうなんだ？」

「えっ……………どつって言われても……………」

顔を真っ赤にしながらそう言う市

「……………俺もお前達を応援してる。だから絶対に幸せになれ」

「はい、そのつもりです」

「きゃーー」

近くから少女の悲鳴が聞こえてきた
助けに……………でも、ここを離れる訳にいかない

「私は大丈夫ですから行って下さい」

「だけど！」

「大丈夫です。私は本当に大丈夫ですから」

「……………わかった」

そう言って向かう

向かうと忍び達が少女を囲んでいた

「我らを見た者は容赦なく殺す」

そう言いながら

「うるせえ！」

「何者だ！」

コイツが言つと一斉に忍び達がこちらを向く

「うるせえんだよ」

コイツはそう言って走ると次々に忍び達を倒していく
数分後には体が動かさず目でこちらを見ている忍び達がいた

「早く市の所に行かないと！」

過去3（後書き）

湊と神の恋愛テクニク！

湊「おい．．．．これはどういう事だ？」

神「見ての通りだよ」

湊「俺は恋愛した事ないしテクニク何て知らないぞ！？」

神「そこはバッチリ私がフォローするから」

湊「はあ．．．．つで、具体的にどうするんだ？」

神「私が提案した事を湊に実践して貰う！　まず最初はこれ！」

<お前の全てが欲しい！>

湊「言える訳ねえだろ～～～！！！」

神「言わなきゃ帰れないよ」

湊「ぐっ．．．．わかったよ、言えればいいんだろ！」

神「ほらほら～．．．．あ、ちょっと来て」

湊「ったく．．．．早く言って終わらせてやる．．．．お前の全てが欲しい！！！」

鈴「み、湊さん……………//」

神「あ、鈴ちゃん倒れちゃった」

湊「どうしてくれる〜〜〜!!!」

鈴が倒れた為、このコーナーは次回!

湊「もう絶対やらねえぞ!」

神「大丈夫だよ……………また無理矢理連れて来てあげるよ」

湊「大丈夫の意味がわからねえよ〜〜〜!!!」

過去4

「あの……………」

「何の用だ……………俺は急いでるんだが」

「お礼がしたいのでお名前だけでも……………」

「俺は湊だ！ 後礼ならいらないぞ」

そう言つとすぐ市の所に走り出した

「私は月島 神楽かぐらつて言います！ 絶対にお礼しますから！」

『何だろう……………この寒気は……………』

そんな事を言っているとすぐさつきまでいた場所に着いた

「市！ 市！」

必死に叫ぶが市は姿を現さない

次第に伊織の顔に焦りが見えはじめた

「どこだ！ 隠れてるなら出てきてくれ市！」

必死に叫んでも返事一つ返さない

「みなと……………さん」

不意に近くから声がした
伊織はその声の方に走った

「市!? どうしたその傷!」

身体中傷だらけの市がそこに倒れていた

「えへへ・・・・・・・・・・・・・・・・やられちゃった」

「もう喋るな! 今すぐ里に戻って手当を!」

「無理です・・・・・・・・だから・・・・・・・・湊さんに一つ言っておきたいと思って」

「喋るな! 今から行けば間に合うかもしれない!」

市はそんな言葉を見殺して話しはじめた

「私・・・・・・・・湊さんが伊織だって・・・・・・・・わかってました」

『なっ・・・・・・・・!』

その反応は伊織も同じだったようで絶句していた

「私への接し方や雰囲気・・・・・・・・似てました」

「それだけでどうして俺が伊織って」

「ほら・・・・・・・・今認めました」

「・・・・・・・・八八八・・・・・・・・やっぱり凄いや市は」

「大人になっても・・・・・・・・私の事が・・・・・・・・好きでしたか？」

「ああ・・・・・・・・好きだった・・・・・・・・誰よりもお前の事が」

もうすぐ市が死ぬと俺にもわかった

「それを・・・・・・・・聞けて・・・・・・・・良かった」

そう言うと市は動かなくなった

「・・・・・・・・」

『・・・・・・・・これからどうするんだ？』

「もうすぐ俺が来る・・・・・・・・それを寝かせたら・・・・・・・・市を埋める」

『そうかい』

それ以上何も言えなかった

そしてすぐ小さい頃の伊織がやってきた

「市をよくも！！！」

完全に自分を失っている

「ごめん・・・・・・・・助けられなかった」

伊織はそう言うと一撃で小さい頃の伊織を倒した
小さい頃の伊織と市を抱え里に戻る

「コイツをよろしく願います」

伊織の父親に小さい頃の伊織を引き渡すとすぐ近くの場所に市の墓
を作った

過去との別れ（前書き）

総合評価300pt越え、PV15万越え！ - (ノ)。(八)

。(ノ)イー

本当にありがとうございます!!! (嬉)。(ノ)つねしいよ、

過去との別れ

「俺が勝つたらあの場所に部屋を作って下さい」

伊織はそう父親に申し出た

「……………理由は？」

「……………」

伊織は何も答えない

「……………一つ条件がある。それを果たせれば無条件で作ってやる」

「何でも聞きます」

「ならば……………敵を全滅させて来て欲しい」

「それだけ？」

「そうだ」

「……………3時間で片づけます」

伊織の父親はビックリした顔をしていたが伊織は気にせず部屋を出るそれからきっかり3時で敵は降伏した

「条件を満たしました」

「……………いいだろう。何処に作ればいい?」

「あのお墓を上」

「……………正気なのか?」

「正気です。後、作ったら守り神としてください」

「……………わかった」

「じゃあ俺は帰ります」

「何処に?」

「言えませんが」

そう言つと部屋を出る

『ちよつと待つてくれ』

「どうした?」

『部屋を作る場所を見せてくれ』

伊織は部屋を作る場所に行つてくれた

『さつきは気づかなかつたけどこの場所……………』

「どうした?」

その瞬間目の前が真っ暗になった

次に目を覚ますと最初に座らされたイスだった

「おおゝ意識が戻ったようじゃ」

「湊さん大丈夫ですか？」

それから俺は状況の説明をしてもらった

俺はイスに座らせられるとすぐに意識がなくなり2分くらいいたら意識が戻ったらしい

「気分は悪くないですか？」

「ああ大丈夫だ」

「本当に大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ．．．．．そんなに心配か？」

「だって．．．．．」

「ん？」

「湊さんが優しいから」

あゝそういう事ね……………

「俺はいつも通りだぞ？ 熱でもあるんじゃないか？」

鈴の身体を引き寄せ額をくつつける

「ほら、結構熱いから今日は帰った方がいいぞ」

「お前のせいじゃ」

過去との別れ（後書き）

湊と神の恋愛テクニク part 2！

湊「またかよ……………」

神「でもその前に質問です！ 今まで出てきたキャラで好きなキャラアンケート（パチパチ）」

湊「……………それを誰がやるんだ？」

神「この小説を見てくれてる人にだよ？」

湊「……………つで、俺はなんにも聞かされてないんだが」

神「今決めたんだもん！ アンケートは感想又はメッセージでどのキャラが好きか書いて貰えたらうれしいな」

湊「さて、これで終わりだな」

神「まだテクニクが残ってるよ」

湊「いや、もういいだろ？ 次にしようぜ？」

神「うん……………じゃあ仕方ないかな」

湊「やつーー」

神「その代わり次は一人一人にセリフ言ってもらおうから」

湊「……たじゃないぞ!? おかしいだろ!?!」

神「じゃあアンケート待つてまゝす」

湊「聞けよ!?!?!」

神「アンケートの締め切りは今日から1週間後だよ　1週間後の
投稿で結果も発表するからね」

湊「……………だめだ……………聞く気ないよ……………」

さあ逃げよう(前書き)

あれ？ 薫の口調が変わった・・・？

さあ逃げよう

「俺のせい？」

「普通に考えればわかる事じゃ」

「ご主人様」

呼ばれたのでそつちを見るとこのえが何か求めるような目をしながら俺を見ていた

「どうした？」

「．．．．．私モ」

「へ？」

『私モ』からこのえは言えないらしく
言おうとしては顔を真っ赤にするを繰り返していた
だが少しすると決心したらしく

「私モしてください！」

そう言ってきた

今の俺は気分がいいから拒む事はしない
というか気分がよく無ければ鈴にあんな行動とらなかつただろう
鈴と同じ事をしてあげたら

「．．．．．もうだめ．．．．．凄に近い」

そう言いながら顔を真っ赤にしてうつむいてしまった

「お前達忘れとらんか？ 今日テストがあるとか言ってた気がするんじゃないか？」

そうか、何日も向こう行ってて忘れてたけど今日テストだ

「じゃあ早く学校行かないとな……………ん？」

肩を掴まれた

掴んだのは誰かと向くと

「ぼ、僕もして欲しいな」

そういう薫

さらにその奥で何故か目を輝かしている九条

「いや、でもテストだし……………」

「大丈夫だよ……………ね？ 九条さん？」

「そうですね……………私達のテストは午後からお願いしてありますから」

本能が逃げると言っている

だから俺は本能に従う

「わかった……………じゃあ目を閉じて」

二人とも言われた通りにする
あれ？ 何で九条も目を閉じてる？
まあ今は逃げる事に集中しようか

今俺は学校に向かっている
後ろには薫と九条の執事がいる

「お嬢様を騙すとはいい度胸だなクズ」

騙すつもりはなかったよ

俺は薫にだけ言っただけだと思っただけだな
というか『ザコ』から『クズ』に変わってない？

「僕から逃げられるなんて思わないですよ？」

それはそうと声……………声に殺気があって凄く怖いですよ薫さん！？

……………本気で俺の事殺すつもりで来てないよね？

「クズのくせに逃げるな！」

いや、普通逃げるだろ！？ 命懸けかも知れないんだから

「僕に秘策を使わせるなんて……………」

前を向いて必死に逃げているからわからないが何か言ってるのだけ

はわかった

「あぶね!？」

俺の横にいた通行人の手がいきなり前に飛び出してきた
それから通行人の横を通るたび、捕まえられそうになる

「な、何した!？」

そう言いながらも必死に逃げる
けどもうそろそろ体力の限界だ

さあ逃げよう(後書き)

湊と神の恋愛テクニクpart3!(+アンケート結果)

湊「つで、アンケート結果はどうなった?」

神「私に1票しか無かった……もう一回やり直さない?」

湊「いや、駄目だろ……」

神「え〜〜」

湊「それより早くアンケート結果言おっせ」

神「じゃあこれみて」

鈴：4票

このえ：2票

薫：3票

他：1又は0票

湊「まあ予想通りだな」

神「もうこーなったら!」

湊「ん? 神を水色にしてどうした? それにルービックキューブも持つてるが……?」

神「のろあ〜〜!〜!」
「どうして邪魔をするの!〜?」

湊「色々問題あるだろ！？ それにフ。ア好きに怒られるから止めてくれ！」

神「作者の友達にもフイ 好きいるよね？」

作「大丈夫だ、問題ない」

湊「会話として成立してないぞ!？」

神「大丈夫だよ？ でも問題あるから後でお仕置きね」

湊「はあゝ恋愛テクニクというか雑談になってるよ」

神「あ……………忘れてた。てへぺろ（・>）」

湊「……………帰って寝る」

作「じゃあ恋愛テクニクは次話だな」

湊「いったいいつまでそれで引っ張っていくつもりだよ……………」
「

神「そうだよ」

作「ちなみに俺は自分の恋愛よりも誰かと誰かをくつつける方が好きだったりする」

湊「そんな事はいいから俺の質問に答えろ……………!!!!」

作「じゃあまた次話の後書きにて」

今度は伊織に!?

「どこまで．．．．．追ってくる気だよ」

今俺がいるのはあまり人気の無い所

人がいると捕まると思いあえて人の少なそうな場所を走っている

「こうなったら．．．．．曲がり角を．．．．．利用して逃げるしか．．．．．」

最後の力を振り絞り、曲がり角を曲がっていく

「やべ．．．．．」

3回ほど曲がるとそこは行き止まりだった

鈴達の声は徐々に近づいてきている

「終わったか．．．．．」

諦めかけたとき不意に目の前に何かが現れた

しかしその正体を確認する間もなく意識がなくなった

目が覚めるとベットに縛られている

そんな状況に俺は夢でしかないともう一回寝る事にした

【現実逃避するな】

この声は．．．．．伊織？

そっか、夢だから聞こえるのか

「いや、無理だって．．．．．俺には夢にしか思えないって」

取り合えず答える

『誰と話してるの？』

目の前には神があらわれた

(いや、独り言だ)

『嘘だよな？ 誰かと話してる口調だし』

【どうした？ 俺の問いに答える】

(そんな事無い、俺は寝るから！)

おい、伊織！ 夢だからって出てくんない！

【夢じゃねえよ．．．．．なに！？】

急にビククリしたような声を出した

どうした？

【いや、まさか．．．．．アイツが生きてたのは俺の同じ時代だし今生きてるはずは．．．．．】

何やら意味のわからない事をぶつぶつ言っていた

「さて、夢じゃないならこの状況どうすれば？」

今ここから見える範囲ではマンションかなって感じた

「起きましたね」

その声のする方向を見る

すると今までいなかった場所に突然現れていた

「起きたなら早く伊織様を出して下さい」

．．．．．！？ なぜこいつが伊織の事を．．．．．

「どうして私が伊織様の事を知っているかわからないって顔ですね」
顔に出ていたと言われ驚いていると

【嘘だ、アイツは人の心を読める。 嫌な力だ】

「嫌な力とは酷いです伊織様」

【こいつ、湊の思考を読んだな！】

「やっぱりばれましたか、さすが伊織様」

おい、こいつは一体何なんだ！？

【こいつは】

「私からお話しましょう、伊織様がこんな奴と話す必要ありません」
酷い言われようだ

「私の名前は成川 冬花^{とつが}、伊織様の婚約者です」

今度は伊織に!?(後書き)

テスト返しされた今日、俺の心はボロボロですと言ってみるたまちやんです

明日もテスト返しがあるんです・・・怖い

取り合えず今の点数状況

数学:59点

国語:29点

基礎拾得(国語:数学=合計):34点:38点=72点

この時点で国語が赤点・・・終わったorz

取り合えず明日もテスト返しされるからもう寝よう
じゃないと心が保たない^.^;

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5969t/>

オタクと美少女達

2011年12月15日00時51分発行